ヌサンタラの妖怪と 1950 年代のジャワ人

目次

1950 年代のジャワ人

(1)　いまはむかし 3
(2)　ジャカルタからジョグジャへ 5
(3)　ジョグジャ到着 7
(4)　特異なジャワ文化 9
(5)　霊の世界 15
(6)　ジャワの妖怪 17
(7)　ジャワの幽霊 19
(8)　バタラカラ 23
(9)　プスギハン 27
(10)　妖怪いろいろ 30
(11)　天地創造 32

ポンティアナッ

(1)　ポンティアナッ 35
(2)　クンティルアナッ 36

インドネシアの妖怪変化と超常譚

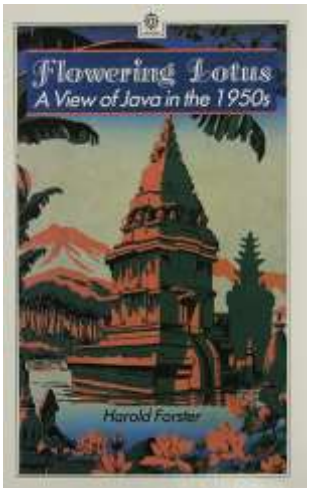
(1)　首絞め幽霊 39
(2)　あなたは超自然を信じますか？ 40
(3)　スンパポチョン 41
(4)　身に着けた不死身の術を試したら、死んだ！ 44
(5)　呪いと同棲 46
(6)　ドゥクン、呪い、公共アナーキー 48
(7)　妖怪トゥユル 51
(8)　バリ島の神隠し 56
(9)　バビゲペッ 65
(10)　幽霊話の裏に何がある？ 68
(11)　トイレの怪 71
(12)　幽霊はナシゴレンが好き～ 72

ジャワ島妖怪大全

(1)　幽霊と妖怪 73
(2)　妖怪の 5 大区分 75

(3)　場所を支配する者……78
(4)　恐怖を与える者（前）……80
(5)　恐怖を与える者（後）……82
(6)　女が化けた者（前）……86
(7)　女が化けた者（後）……87
(8)　人間に飼われる者……88
(9)　動物由来の妖怪（前）……92
(10)　動物由来の妖怪（後）……94
(11)　尊ばれる者……97
(12)　人間に憑りつく者……98
(13)　人間に由来するハントゥ……101
(14)　人間に由来するハントゥ……103
(15)　人間に由来するハントゥ……105
(16)　人間に由来するハントゥ……107
(17)　恐怖を与える妖怪……109
(18)　恐怖を与える妖怪……111
(19)　恐怖を与える妖怪……113
(20)　恐怖を与える妖怪……116
(21)　ホラー映画……117
(22)　ホラー映画……118

「1950年代のジャワ人（1）」（2023年04月06日）



1949年12月に開校したヨグヤカルタのガジャマダ大学に初代の英語科教官として招聘されたイギリス人ハロルド・フォースター氏が1952年から四年間の滞在中にジャワ島と一部のヌサンタラ地域で見聞したインドネシア共和国の普段着の姿を一冊の書物にまとめたものが、1958年に「Flowering Lotus」というタイトルで出版された。イギリス人知識人の目に映った1950年代のジャワやバリの様子は、当今のインドネシアに比較して見るなら実に隔世の感を禁じ得ない思いがする。

1950年に完全独立を成し遂げたインドネシア共和国の新設大学に奉職することが決まったとき、新しい住処に関する予備知識を持とうとして、かれはロンドン中の書店を回った。しかしオランダ領東インドと呼ばれる長い歴史を持ったインドネシアに関する英語の書物はそのころ、満足できるものが何一つ見つからず、出会うものと言えば時代遅れの薄っぺらな情報ばかりだった。

新生インドネシア共和国もまだあまりにも若すぎて、散発的な時事ニュースや論説に出会うことはあっても、系統的にまとめられた知識を得ることは不可能だった。結局かれは奥さんとふたりで、先入観の皆無な白紙としてジャワ島に移り住むことになったのである。

まず、これから住む第二の故郷になるべきヨグヤカルタの名称からして紛糾きわまりないありさまになっていたことも、この若い国でエクスパット[1]として暮らすかれに何やら挑戦めいた印象を与えることになった。

Jogjakarta が当時の公式綴りだったが、Djokjakarta あるいはジャワ語の Ngajogjakarta なども咲き乱れ、地元民もヨクヤ、ジョクジャ、ジョクヤなどを入り乱れて使っていた。オランダ人がオランダ語で Jogjakarta と書いてヨグヤカルタと発音していたように、ラフルズも History of Jawa(1817 年)の中で Yug'ya Kerta と書いていたのだから、いったいどこのだれが Jogja というオランダ語綴りをジョクジャという英語発音で広めたのだろうか。

[1] 外国人専門家

フォースター夫妻はオランダの定期航路客船でジャカルタに上陸した。到着は朝で、タンジュンプリオッ港からジャカルタ市内のホテルに移動した。数日間をそこで情報収集と気候に身体を慣らすことに費やしてから2時間のフライトでジョクジャ入りしようと思っていたのと裏腹に、翌日午前6時40分発の汽車でジャカルタからジョクジャに向かうようアレンジされているのを知ってがっかりした。

特に反乱分子が汽車に攻撃を加えることがしばしば起こっていたから、ジャカルタの西洋人は一様に汽車でのジョクジャ入りを不可能と決めつけていた。襲撃が起こったら列車ダイヤはストップしてしまう。たとえ自分の乗っていない汽車が襲撃されたとしても、自分が乗ろうとしていた汽車は運行を停止してしまうのだから。

しかしヨーロッパ人たちがあたかも毎日起こっているように物語った事件など道中にまったく起こらず、反対に夫妻は違うことでたいへんな目に遭ったのだが、それは後の話。

ふたりがジャカルタで感じた印象はひどいものだったようだ。ホテルは広い庭に面してバンガロー風の部屋が並んでいるスタイルで、庭は干し物で満ち溢れていた。ホテル自体が悪臭を放つ運河のすぐ近くだったそうだから、鉄道駅への便も併せて考えるならそれはかつてバタヴィアの最高級ホテルとして名を馳せたオテルデザンドだったのかもしれない。

かれに与えられたジャカルタでの時間はその一日だけであり、ふたりは必要な手続きを行い、先住の西洋人たちから生活に関する諸情報を聞いた。そして一日が終わり、ふたりはホテルに戻った。[続く]

「1950年代のジャワ人（2）」（2023年04月10日）

夜の室内はむっとする暑さだ。インドネシアのホテル客室は必ずと言っていいほど小さいテラスが付いているから、夫妻はできるかぎりテラスで時を過ごそうとした。チチャ[2]が壁を這いまわり、電球にとりついて飽食する姿を眺めるばかり。かれらの餌はあふれるほどあり、光がチチャの腹を透かしてその生き物の消化プロセスを垣間見せてくれる。しかし蚊の大群と落下してくるチチャに追われて、ふたりの夕涼みは長続きしなかった。

客室内には薄汚れたベージュの蚊帳の掛かっている鉄製ベッドが5つも置かれてごみごみしており、格式の似合わない扇風機がうなりをあげて一定周期できしんだ。夫妻は文明世界から隔絶した土地に打ち捨てられたかのような感傷を抱いたかもしれない。インドネシア初夜の眠りは浅かったようだ。

夜明け前のモーニングコールを、かれは救いの神のように感じた。かれにとってのジャカルタはそれで終わるのだから。ジャカルタの夜明けは午前6時ごろやってきた。一年中たいした変化のない、単調な一日の始まりだ。

太陽の上昇は急速で、鉄道駅に向かう車がホテルを出たときは既に燦々たる陽光の中にいた。路上の交通は賑わっており、道路の向こう側にある狭い運河は人間でそれ以上に混雑している。濁った水をたたえた狭い運河はアムステルダムの優雅な運河とまるで較べものにならない。どこの土地に住もうがオランダ人が運河を掘りたがるのは、きっとノスタルジアのなせる業なのだろう。しかし熱帯のマラリアの巣窟でノスタルジアを働かせたのは誤った分別だったようだ。

周辺地域を埋め尽くすスラムに住んでいるインドネシア人にとっては、何はともあれこの給水施設はあり

[2] 白いヤモリ

がたいものであり、またかれらの生活に必要不可欠なものになっていた。やせて褐色の肌をしている雑多な世代の人間が濃く濁った水をかき混ぜている。素裸の幼児、サロン姿の少年、慎ましやかに下着姿で水に浸かる女性、かれらのひとりひとりが水を使う用をたし、少年たちはそれが終われば水に戯れるだけ。その用とは水浴・歯磨き・排泄、そして衣類の洗濯。

ヨーロッパ人医師はインドネシア人の性格をこう物語った。かれらは洗濯中毒だ。かれらは個々の人間の清潔さに関して強い感受性を持っているものの、衛生観念はまったく欠如している。

ほぼ13時間かかる汽車の旅が始まった。一等車はゆったりした快適な車内になっていて、最初は清潔だった。ところが、汽車が動き出したとたんにぶち壊しになった。炭水車には薪が山のように積まれ、機関車はその薪を燃やして走るから、窓を開けていると煤煙に襲われる。始末に悪い薪の煤煙なのだ。白服を着ていれば無事では済まない。かと言って、窓を閉めると生きたまま茹でられる。

このジレンマがインドネシアの自然を観賞しようという夫妻の意欲を減殺してしまった。はじめて目にするジャワ島北岸のエキゾチックな風景も、たいした感動をふたりに与えなかったようだ。ジャカルタの浅い眠りを取り返したかったふたりは、それすら走るオーブンがもたらした喉の渇きに邪魔された。

列車は食堂車をつないでいたが、ジャカルタでだれもが「使うな」と忠告したため、サンドイッチを昼食用に持って来た。オランダ人は武装襲撃のリスクを強調して汽車に乗るなと勧め、アメリカ人は氷がインドネシアでの生活における大きなリスクなのだから汽車に乗ったら食堂車を使うなと忠告したようだ。「煮沸されたものでない限り、インドネシアでは絶対に水を飲まないように。そして出される氷を絶対に受け入れてはならない。そんなことをしようものなら、必ず赤痢にやられる」。

喉の渇きは頂点に達した。聞くと、瓶入りビールを席まで取り寄せることができるそうだ。瓶入りならきっと安全だろう。ふたりは車掌にビールを頼んだ。ところが、届けられたビールの瓶は室温だった。そしてふたつのグラスの中には大きな氷塊が鎮座している。

ふたりは決意して、赤痢のリスクに挑戦した。そしてそれ以来ジャワ島のどこへ行こうが、水も氷もふたり

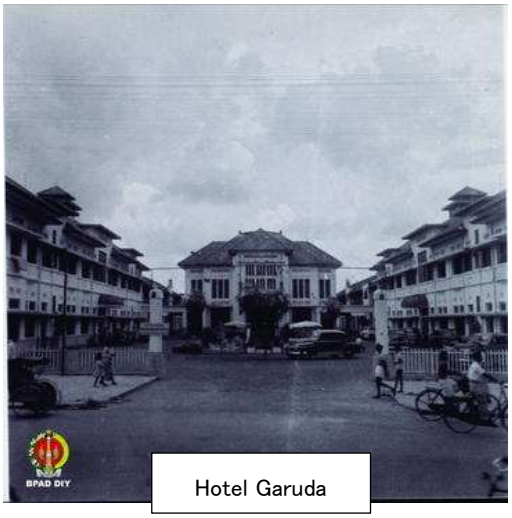
の敵でなくなった。[続く]

「1950年代のジャワ人（3）」（2023年04月11日）

線路はチルボンで分岐して、ジョクジャ行き列車はジャワ島を縦断する。ジャワ島北岸から南岸に向かって内陸高原部を通過するのだ。反乱分子武力襲撃のリスクはそこにあったから、武装兵士の一団が車内に乗り込んできた。

第二次大戦後ギリシャで7年暮らしたかれは、そのリスクを怖がっていなかった。このリスクはたとえば旅行中にタイヤがパンクする程度のものでしかない。ギリシャ共産主義者の反政府武力襲撃は、政府軍の警備が付くとかえって先鋭化する。強盗団の列車襲撃とは趣が異なっているものなのである。かれはむしろ、警備部隊が乗り込んだことのほうを怖れたようだ。

この旅は氷のリスクも襲撃のリスクもすべて杞憂に終わり、汽車は日没後のヨグヤカルタ鉄道駅に無事滑り込んだ。ジャワ島では日没も一年中だいたい同じ18時半から19時という時間帯に起こる。



Hotel Garuda

大学職員が緑色のプリマス車で迎えに来て、夫妻をガルーダホテルに連れて行った。ジョクジャのトップホテルの一番良い部屋を予約してあるという職員の話を車の中で聞かされたから、これでジャカルタ到着以来の惨憺たる体験もやっと終わりを迎えるだろうという明るい期待に包まれて、ホテルに到着した夫妻はチェックインカウンターの前に立った。

一等室は全部ふさがっている、とホテルマネージャーは言う。大学職員が抗議したが、明日のセレモニー

に招かれたVIPを受け入れるので手一杯なのです、とマネージャーは説明した。「今夜一晩だけ裏の二等室にお泊りいただいて、セレモニーが終われば一等室はいくらでも空くから、明日一等室に移るということでいかがでしょうか。」

明るい期待を打ち砕かれたかれには、もうノーと言う気力もなかった。しかし考えてみるなら、この種の行き違いはなにも1950年代に限ったことでなく、そのようなインドネシアのエバーグリーンは今でも続いているのではあるまいか。

案内された二等室は裏にある厨房の対面で、バスルームが付属していない。共用バスルームは近くだったものの、そこへの往復は公共スペースを通らなければならない。ともかく汗を流したいかれは、そこへ行った。

狭いタイル張りの浴室の一方の角には石造りの水槽があり、水が溜まっていて、大きめの空き缶が置いてある。この水槽に身体を浸けてはいけないという話は既に聞かされていた。別の角には壁の天井に近い位置にアルミのタンクが取り付けられていて、シャワーがある。筆者はこのスタイルを、ジャワにしかないダッチバスルームだと書いている。イギリス人には到底満足できるものでない、とも。

シャワーは錆が目立ち、タンクはクモの巣で覆われていて、長期にわたって使われていない代物であることがすぐにわかった。そこに水を入れてシャワーを使おうとだれが思うだろうか。かれはふたたび決意しなければならなかった。空き缶で水槽の水を汲み、それを頭からかぶったのである。

かれの妻もそのバスルームのプロセスを終え、リフレッシュしたふたりは着替えをして食堂へ行った。リフレッシュした感触は十分に得られたが、身体が清潔になった感じはしなかった。ともあれ、空腹のふたりは食堂へ急いだ。

食堂の雰囲気も、薄汚れているつぎはぎだらけの大広間だった。シミがなくて継ぎのあたっていないクロスのかかっているテーブルを求めてふたりはさまよった。ウエイターは裸足で制服を着ておらず、一様にペ

チをかぶっている点だけが制服と言えた。

　ウエイターはその夜の定食を、コンソメからフルーツのデザートに至るまで、すべてを一度に持ってきてテーブルに並べた。料理はすべて冷めていた。コンソメ・白飯・野菜の炒めもの・・・

　その日一日の体験がかれの妻の忍耐力に大穴をあけてしまったのだろう。奥さんは並べられた冷たい料理を前にして、さめざめと泣いたそうだ。[続く]

「1950年代のジャワ人（4）」（2023年04月12日）

　翌日は結婚記念日だったから、一日怠惰に過ごそうと考えて、ベッドでゆっくりし、朝食を済ませてから部屋でまたダラダラしようと計画した。しかし太陽が昇って気温が上がってくれば、二等室のその部屋でダラダラするのは無理だ。かれは部屋を替えてもらうためにマネージャーに談判しに行った。

　そこに昨日の大学職員がやってきて、「さあ、スルタン王宮へ行きましょう。」と言う。いったい何が予定されているのかまるで知らなかったかれは、「今日、大学新学期開始のセレモニーがあり、そこで新任の英語科教官のお披露目がなされることになっているのだ」と聞かされておどろいた。かれが泊まるはずの一等室を占拠したVIPたちはかれのお披露目を見るためにやってきたひとびとだったのである。

　そのようにして、ハロルド・フォースター夫妻のジャワでの四年間がスタートした。ヨグヤカルタは清教徒的な町であり、バーもナイトクラブもない。厚い木製の板をシャッターにして店の入り口を閉ざし、マリオボロ通りの商店街が夜9時に閉店すると、町は夜闇の中に静まりかえる。

　酒を飲んでダンスをするのは不道徳と見なされていた。オーストラリアのサッカーチームを歓迎するためにホテルでダンスパーティーを催そうという企画がなされたのだが、開始時間の前からプリブミの若者たちがホテルのまわりに集まって来て外をうろついた。かれらは不道徳な連中を石もて打とうと考え、ポケットに

石をしのばせてホテル周辺に不穏な空気を漂わせたから主催者は最後の最後になって翻意し、パーティーはお流れになった。

かれが見聞した1950年代のインドネシア人の姿はその書物の中にたくさん収められている。そのころから現在まで70年もの時間が経過すれば、きっと3～4世代の交代が起こったにちがいあるまい。インドネシア人はそんな昔のものから今のような人間に変化したのだと思わせるものもあれば、今でもそんなものだよ、と思われるものもある。

たとえば、かれはこう書いた。インドネシア人は肉欲的で不衛生な西洋式キスをしない。かれらはもっと洗練された嗅覚センスを好み、たいしてロマンチックでないスニフキスと呼ばれるもののほうを好んで行う。異性の肉体的魅力の中に良い香りの肌という項目があり、そして多くのひとにとってこの項目は重要で高い評価を持つポイントになっている。西洋人が公共スペースではばかりもなしに行うキスは、インドネシア人の目から見るときわめて淫らでふしだらなものに映っている。

しかしその二十年後にわたしが見聞したインドネシアの中に、スニフキスなどというものはその片鱗すら見つからなかった。[3]そのころのわたしの暮らしに密着していたインドネシア人の多くはブタウィ・スンダ・ミナン・マナドなどであり、ジャワ人はあまりおらず、いても密着というレベルでなかったことがその原因をなした可能性は高いのだが。

1950年代のジャワ人はかれに次のような印象を与えた。夫妻が借家に引越したとき、隣人たちが挨拶に来るだろうと思って数日間待っていたが、ひとりもやって来ない。新参者が挨拶に出向くのだと聞かされたので、夫妻が隣人宅を訪問した。その公式表敬訪問に打ち解けた態度で親近感を示した家はひとつもなかった。以後もふたりは近所付き合いの中で、氷のような感情を示し続ける隣人たちの頑なさに疲れ果てた。何をするにつけても、隣人たちとの触れ合いは痛みを伴った。ジャワ人はどれほど多量の喜怒哀楽を抱こう

[3] 編者が 70 年代にジャカルタに駐在していた時にジャワ人たちは年長者の頬にスニフキス(ciuman)をしていた。手にスニフキスするのはスマトラの風習とのこと。

とも、感情を表出しないものなのだ。

挨拶のために訪問すると、その家の主人が出てくるまで10～20分ほど応接間に座って待たされる。その家の主人が訪問客に敬意を表するために最良の衣服に着替え、姿を整えていることをそれは意味している。[続く]

「1950年代のジャワ人（5）」（2023年04月13日）

訪問者を迎えたなら、その訪問者が帰ろうと思うまでもてなして相手をするのがホストの務めなのだ。たとえ忙しかったり、何かの急用ができても、その訪問者をもてなすことが優先される。だから約束の時間にどんなに遅れようとも、「お客があった」という言葉が必ず受け入れられる言い訳になることを、しばらくしてかれは知った。

その家の主人あるいは女主人が現れると、10分ほど月並みな話題でおしゃべりする。礼儀深いひとは来訪の目的をすぐに切り出したりしない。そのころに熱いお茶と菓子が供される。主人が「どうぞ」と言うまで、それに手を触れてはならない。茶が十分冷めたころを見計らって主人が「どうぞ」と言う。[4]そのとき初めて茶を少し飲む。茶はゆっくり飲み、菓子も必ず一部が残るようにする。それがジャワ式の礼儀作法にかなったふるまいなのだ。お互いにそれを守らなければ失礼になる。社会交際のための訪問は、軽々しく行うものではない。

ヴィクトリア朝風の柔らかい声、伏し目がちな目線、手をたたみ、常に微笑みを浮かべているジャワ人。かれらは大声で笑うことを下品としているため、神経質で空虚なクスクス笑いがおしゃべりの合間を満たすこと

[4] インドネシア人は猫舌。

になる。[5]

ジャワ人は作法の自覚が高い。村人の中で見識ある人物という評価を行うための精巧なコードオブデリカシーが文化の中に構築されている。バナナ葉から手づかみで飯を食う農民ですら、良い手である右手だけを使い、左手は曲げた肘を支えるだけ。何をつかむにしても、常に必ず右手が第一優先される。

指で何かを指し示すときは、右手の親指が使われる[6]。他の指では失礼に当たるのだ。他人の前を通るときは身を低くして通行するのが礼儀になっている。あるとき演舞場で通路の下の段にかれが座っていると、かれの目の高さより身を低くして前を通ることができないため、通りたいひとびとが通れなくなって、大混雑が起こってしまった。

年長者は貧富と無関係に尊敬される。何かの集まりに年長者が混じると年長者への尊敬をみんなが示そうとし、フォーマルエチケットが要求されることになる。スピーチの形式も実に注意深く構成されている。

形式を価値の判断基準に使おうとするその形式主義の結果、外国人に相対したとき、自分が知らずにマナーに外れたことをして笑われるのを心配して、ジャワ人は相手のマナーを知りたいという欲求を強める。ジャワ人は天然的な礼儀正しさを持っているにも関わらず、外面的な形式をあまりにも意識しすぎるために、かれらは自分のマナーに劣等感を抱いているように見える。

知人友人隣人たちの親切にお返しをしようと考えて、あるとき夫妻はビュッフェパーティを計画した。そして招待状を数日前に各相手に届けたのだが、皆さんをおもてなししたいという目的を書いたところ、不審の念を持たれてしまった。ここでは、招待状は開始の数時間前か、さもなければ終わったあとで届くものなのであり、あまりにも早く届いたことも相手の不審をかきたてた。

ジャワ文化では、人を招いて宴を張る目的は誕生・命名・割礼・初潮・結婚・死・追悼などのためのスラマタンが常識的な道理になっていて、そうでない場合は容易に相手を納得させることの困難なものになる。

---

[5] ヨグヤカルタとソロの人たちはこうだがスラバヤなど東部ジャワはもっとがさつである。

[6] この形をとるのはスンダ人に多く、ジャワ人にはあまり見られない。

ジャワ人ももちろん大勢が集まってスラマタンでないパーティを行うが、それは大家族の絆を強めるための祝祭事なのだ[7]。家族としての縁を持たないひとびとの集まる社会的な交際としてのパーティを一介の市民が行うことはかれらの常識を外れたものだった。[続く]

「1950年代のジャワ人（6）」（2023年04月14日）

イスラムにおける結婚はふたりが神の前で行う誓いよりもむしろ法的契約の性質が濃く、花嫁の父と花婿との間で諸条件の合意を確認することのほうに儀式の焦点が置かれる。エジプトのピラミッドのふもとにある村の結婚式で花嫁の姿を目にすることはなかったが、同じムスリマとしての法的地位は他国の姉妹と違わないというのに、ジャワの花嫁はベールの陰に身を隠さず、自分のもっとも偉大なる日の主役を演じ、その役割を心から楽しんでいる。

昔、娘たちは子供時代が終わると結婚の日まで深窓に隠され、親が選んだ相手に嫁ぐことを強いられた。その義務と自分が見つけた愛のはざまの葛藤が初期インドネシア文学のメインテーマになっていた。今（50年代）のインドネシアでは、青年男女は自由に出会い、親の許諾を得る前に約束を交わすのが普通だ。しかし結婚とその儀式は親がアレンジするものであり、親の同意なしに法的な結婚が行われることはありえない。

RAカルティニを信奉する娘たちはモノガミー[8]やその他の女性の権利を主張し、第一妻の同意なく第二妻を娶った場合は第一妻の離婚要求を認めなければならないという条項をはじめ、総数十ヵ条の結婚憲章を作った。1955年7月にジャカルタ市長の娘が行った結婚式で結婚憲章に従った契約がなされ、それが実践例の第一号になった。

RA Kartini

[7] Makan tidak makan kumpul といわれている。

[8] 一夫一妻制

一方、国民のアイドルだったスカルノ大統領が１９５３年にハルティニを第二夫人に持ったことがカルティニの娘たちを失望させた。スカルノの言動はかれがフェミニストであることを知識層女性に印象付けていたのだが、女性たちは裏切られたと感じたそうだ。

妻に子供ができないとき、よその家の新生児の衣服を誰にも知られないようにこっそり盗んできて妻に持たせると妊娠すると言われている。ある婦人が嫁を身ごもらせたいので、とあるカンプンの一軒に吊り下げられていた干し物の中から赤ちゃんベストを失敬し、ハンドバッグの中にしまって帰宅した。ところがついうっかりして、そのベストのことを忘れてしまったのだ。ベストはずっとその婦人のハンドバッグの中に入ったままになった。そして何が起こったか？その姑の婦人、ご本人が妊娠したのである。

ジャワのカレンダーは5つの市日とインターナショナルな七曜が組み合わされた35日サイクルになっている。曜日に数字が与えられて各組合せ日は異なる合計数を持ち、その数に従って吉凶が判断される。ジャワ人にとっては何月何日という誕生日よりも、３５日サイクルの誕生曜日が重要なため、３５日ごとに祝い事を行う。その結果、誕生曜日祝いは年間で十回くらい行われる。

赤ちゃんの命名は誕生後七日目にスラマタンを行ってコミュニティに知らせる。スラマタンでは近所一円の子供たちをもてなして、赤ちゃんの名前をかれらの親に伝えさせる。庶民の赤ちゃんはたいてい一語の名前をもらい、結婚するまでそれが使われる。大病したりすると、悪霊に別の子供だと思わせるために名前を変える。

親が大病すると、その子が災厄を持って来たと考えて子供を親戚のだれかの家の子供にしてしまう。だから親戚の子供をやったりもらったりするのが普通なので、生んだ子供と生みの親という関係に拘泥せず、子供は親族一同の子供として扱われるようになる。血縁による差別はあまり起こらず、平等に愛情が注がれる傾向が強い。

ジャワ人の社会慣習として姓を持たないことがその現象を成り立ちやすくしているようだ。本人名は一語であり、必要に応じて父親の本人名を疑似姓のように使い、自分の名前の後に付ける。

結婚したら、５日後に子供用の名前は捨てられ、親の名前を混ぜた、長く複雑な名前をもらう。公職者や宮廷人は地位や職務が変わると本人の名前も変わる。博物館の館長になった人が名前を変えたので、その妻の夫は違う名前になった。その奥さんの外国人の友人たちは、奥さんの夫がこれまで知らなかった名前に変わっているため、再婚したのだと思って結婚の祝辞を述べたそうだ。[続く]

「１９５０年代のジャワ人（７）」（２０２３年０４月１７日）

ムスリムの必須事項である割礼は、男児は中部ジャワで１３～１４歳、東部西部ジャワでは７～８歳のときに行われる。女児の場合はもっと小さい時期にほんの小さい処置が行われる。女児は初潮が起こるとその７日後に成人の祝としてスラマタンが行われる。

断食月が終わるとイドゥルフィトリの大祭が行われる。アラブ語のイドゥルフィトリはジャワ語で Lebaran と呼ばれている。イドゥルフィトリを迎えるに当たって、ジャワ人は墓参りをする。先祖の墓が遠かったり、墓参に十分な資金がないときは、四辻に香と供物を置いて墓参の替わりにする。

ジャワ語の Lebaran という語はムラユ語源のインドネシア語発音と違っている。ムラユ語源のインドネシア語発音はレバランで、「広い」の名詞形だ。ジャワ語発音はルバランで「終わり」を意味し、断食期間の終了を指している。

極東のある国では違う発音が標準にされてしまったように見える。インドネシア語を解し、インドネシア人との会話でルバランと発音しているひとですら、日本人同士の会話では誤った発音に従っているのではないだろうか。どうしてシンプルに生きようとしないのだろう。従順さが絶対善にされてしまった社会は社会自体

が善でなければならないのではないか。善悪の混在している社会でひたすら従順に生きることを選択すると、その人間の生き様は悲惨なものになりかねないように思われる。もちろん選択の自由があるにせよだ。

いったい誰が間違い発音を広め、どうして間違いが訂正されることもなく標準化されてしまったのだろうか？この種の間違いは決してこれだけではないとわたしには思えるのだが、そんな間違いだらけのインドネシア語理解をしながら、インドネシア語は容易な言語だなどとよく言えたものだ。

ジャワ人にとってはあらゆるものに霊があり、日常のあらゆるものが神秘的なパワーを持っていて、そんなパワーを集中と自己抑制によって自分の内部に取り込むことができると考えられている。自分の祖先の霊は自動的に自分の中に継承されており、自分はそれに強く影響されている。

かつて偉大な業績を残した偉人のパワーは衰滅することがなく、その名前と誕生日は特別のオーラを持ち、古代遺跡・巨石・ブリ~ギンの巨木などがそうするように、目に見えない振動で人間を打つ。木曜日の日暮れ、そんな巨木の根元に供物が置かれる。日没は新しい一日のはじまりなのだ。[9]

死者の霊は徐々に滅していく。葬式は死のプロセスのはじまりだ。暑い季節に亡くなると翌日には埋葬されるために、縁者や友人たちにとってはあわただしい通夜が一晩だけ営まれる。遺体は頭を北にして低いテーブルに寝かされ、家族が集まると庭に運ばれて、花を浸した水で7回洗われる。顔に粉がふりかけられ、口・鼻・目・耳に綿が詰められると身体はカファン布と呼ばれる白い綿布でぐるぐる巻きにされ、その巻き物は頭頂と足先を含めて7ヵ所で縛られる。

その状態で家の広間に寝かされて、祈りの言葉と良い香りの中で一夜を明かす。死去を知った友人知人たちがやってきて、最期の別れを告げる。翌日の埋葬まで付き合うひともいれば、しばらくいただけでそのまま帰宅するひともいる。

お棺が埋葬のためにその家を出発するとき、お棺を運ぶ数人のひとたちはその家の表で止まり、お棺を高く持ち上げる。そのときに死者の子供や孫がその下を三回、行ったり来たりする。

---

[9] 世界あちこち(東南アジア以外ではイランとペルー)で調べてみたら巨木や古木に霊が宿っていることが分かった。

墓地が歩いて行ける距離なら葬列の徒歩行進が行われ、あまりにも遠ければ乗り物が使われる。墓地に着くと墓穴に下ろす前に縛り紐が解かれ、顔を露出させる。穴に下ろされると、身体は右を下にしてメッカの方角に向けられ、墓穴の壁にもたれるかっこうで横たわる。上から花びらがまかれ、土がかけられる。土が盛り上がったら、頭の部分と足先の部分に木製の暫定的な墓標が立てられる。[続く]

「1950年代のジャワ人（8）」（2023年04月18日）

三日目の夜に最初の追悼式が行われ、そのあと七日・四十日・百日・一年・二年・一千日と追悼式は合計7回行われる。費用の余裕のない家でも最低二回は行わないと後ろ指を指されかねない。一千日目の追悼は欠かすことができないとされている。

死者の霊は死んだあと三日間家の中にいるので、その間は床を掃いたり熱湯を地面に捨てたりしてはいけない。そんなことをすると霊が怪我をして怒り出すからだ。

霊は七日目まで庭をさまよい、四十日までは家の近所をさまよう。そのあとはときどき地上にやってくるようになる。一千日が経過すると霊は完全に霊界に去って、この世と離別する。だから一千日目の追悼は大切なのであり、それまで数回行われる追悼儀式とは段違いの重要性を帯びている。

連れ合いを亡くした寡夫寡婦が一千日を過ぎてから再婚しても世間はそれを道理にかなったものと見なす。ところがもっと早い時期に再婚が起こると、世間にショックを与えることになる。

霊がいたるところにいて、しかも人間に対して力を振るっているという宇宙観は、幽霊の恐怖と魔術の習慣をジャワ人に培った。満足している霊は子孫や念じてくれる人間に恵みをもたらすが、虐待されたり見捨てられた霊は人間に恐怖を与え、危難をもたらすものになる。夫妻はジョクジャで暮らし始めてからほどなく、

こんな街の噂を耳にした。

マリオボロ通りをひとりで行ったり来たりしていた美しい娘が、後ろに乗せてくれと自転車の青年に頼んだ。娘を乗せて青年がしばらく走ると、ベチャと衝突して気が遠くなった。青年が意識を取り戻したとき、墓地の中にひとりで横たわっている自分を見出して、恐怖に震えた。

全般的にインドネシア社会では、幽霊は人間の暮らしに深く関わっている。合理的な解釈のできない不可解なできごとが起こると、たいてい幽霊がスケープゴートにされる。

たとえば、置いてあったはずのお金が消え失せていると、tuyul だの babi ngepet だのが犯人にされて一件落着してしまうこともしばしばだ。現代インドネシアでこのトゥユルなる者の正体は、貧困者が金持ちに対して抱いた嫉妬から生まれたものだという分析がなされているが、1950年代にはその実在を信じる者も少なくなかった。フォースター夫妻が聞き集めたジャワの幽霊や妖怪には次のようなものがいた。

＊Puntianak　夜、若者を誘惑して淋しい場所へ連れ出し、着くと本性を現す。水上を浮遊して相手の男を怖がらせ、気絶させる。

＊Gendruwo　死ぬ心構えのない状態で殺された者の霊。墓地の砂利を誰かの家の屋根に投げつける。

＊Wewe　ウェウェは子供をさらう。

＊Peri　絶望した乙女の霊がプリ。

＊Medi Pocong　埋葬の仕方に手落ちがあり、頭ひもがほどけたのを怒って吠える。

＊Cumpelung　夜中に出てくる骨の幽霊で、断頭された頭蓋骨が転がりまわり、腕の骨がカチカチと音を鳴らす。地面の上を蛇のように滑って動き、ときどきはらわたをドサッと音を立てて地面に落とす。

＊Banaspati　正午に地中から飛び出して現れ、手でとても素早く走る。目にした子供を追いかけて捕

まえ、むさぼり食う。

＊Buta　　太陽を呑み込んで日蝕を起こす。しかし身体がないために呑み込まれた太陽はほどなくまた出現する。ゴンを鳴らして脅かしてやると、太陽の出現速度が高まる。

［ 続く ］

「1950年代のジャワ人（9）」（2023年04月19日）

自然の怪異現象も悪霊のしわざと見なされて、疫病・飢饉・大災害などの予兆と解釈された。

＊Lamphor　　押し寄せる大音響の轟

＊Kemamang　　炎の姿で出現する

＊Rijal　　形を持たない奇怪な音だけのもの

1950年代のインドネシア語正式綴りはまだオランダ風のものが続けられていたので、幽霊・妖怪の名称は書物に古い綴りで記されていた。上はそれを現代正式綴りに直したものだ。

フォースター氏が得た説明は上のようになっているが、現代インドネシアでは次のようなものが常識になっているようだ。フォースター氏の記録と対照して見ると、時代の差という要素は度外視できないものの、ミクロ世界という個人的体験から得られる情報と、マクロ的に大勢がよってたかって編集した情報の違いが感じられるのではないだろうか。

＊Puntianak

拙著「ポンティアナッ」をご参照ください。[10]

「ポンティアナッ（1）」（2023年04月03日）

「ポンティアナッ（2）」（2023年04月04日）

「ポンティアナッ（終）」（2023年04月05日）

＊Gendruwo

ジャワ語ではこう綴られるが、インドネシア語では普通 genderuwo と書かれてグンドゥルウォと発音される。スンダ人は ganderuwo と書いてガンドゥルウォと発音する。ジャワの伝説で語られる巨大なサルの姿をした霊的存在で、皮膚は赤黒く、全身が長い毛で覆われている。姿を現さないときは、水が流れる大岩、廃屋、巨木あるいは暗く淋しい湿った場所に住んでいる。

死ぬ用意のできていなかった人間の霊という説もあり、また天上界に住んでいる人間の姿をした霊という説もある。

ジャワ文化のグンドゥルウォはいたずらと女が大好きの男幽霊であり、寝ている女の服を脱がせて身体を触ったり、その服を寝ている別の者に着せたりする。更には寂しい女とセックスし、子供を産ませることもある。グンドゥルウォは女に催淫の魔術をかけるそうだ。子供はもちろんグンドゥルウォの子孫ということになる。今生きている?人間の男たちはみんなグンドゥルウォの子孫かもしれない。

グンドゥルウォは夜、家の屋根に小石を投げる。私がジャカルタのパサルミングに住んでいたころ、夜になると私の寝室の上の屋根で何かが跳ねながら転がり落ちる音がときどき聞こえた。カラン～カラン～カラン～カラカラカラカラという音だ。ところがその最後に聞こえるはずのトンという地面を打つ音が起こらない。屋根の音が起こる時は一晩に数回起こる。翌朝、何が落ちたのかを調べて見たものの、それらしい異物は

[10] 巻末に添付

地面の上に何も見つからなかった。

その不思議な家ではときどき、わたしが寝室で仕事していたりすると、夜昼関係なく壁の外をだれかがヒタヒタと裸足で歩く音がする。その家に住んでいる者の中に外を裸足で歩く者はいないから、家の住人ではなさそうだ。かと言って、家は塀で囲まれており、表門はいつも閉めてあるから、外から人間が入ってくれば門の開閉音ですぐにわかる。

わたしの子供たちはこの家に小人がいると言っていたが、妻の姪たちの中に「この家にラッササがいる」ということを言う者がいて、どうしてそんな違いが起こるのか不思議に思ったことがある。[続く]

「1950年代のジャワ人（10）」（2023年04月20日）

＊Wewe

ウェウェは wewe gombel と呼ばれるほかに kalong wewe とも呼ばれている。ゴンベルというのは地名だそうだ。鬼面で乳房が腰まで垂れ下がった女の姿をしており、子供をさらうと言われている。ところがそれは物事の本質を見ないうわべだけの説明で、夜に家の外で子供を脅かすのは早く家に入るように仕向けるためであり、また子供にむごい仕打ちをする親から子供をさらうのも親に改悛させるのが目的であり、親が心を入れ替えると子供を返してくれるという、まるで子供の守護神のような話になっている。

だが醜く怖ろしい姿をしているために子供も怖れて近寄ろうとはしない。ウェウェゴンベルにさらわれた子供は家に返されてきても、口がきけなくなっているという話だ。

カロンウェウェはコウモリの姿をしているためにその名が付けられた。しかし、その巨大コウモリはウェウェゴンベルが変身したものであり、実体は同一であるというのが大多数の意見になっている。

*Peri

これは英語の fairy に対応する概念のようだ。もちろん語源は英語に由来したのでなくてペルシャ語の pari に由来したとされている。つまり英語がヌサンタラを訪れるはるか以前からこの概念はインドネシアに入って来ていたと言えるだろう。ただし視覚化は英語文化に基づいたようで、ピーターパンに出てくる妖精がインドネシア人のイメージするプリの姿ではないかと思われる。

ペルシャ語のパリは地上に落ちた天使を意味しているそうだ。翼のある人間の姿をし、緑陰に花の咲き乱れる大自然に住み、大自然の営みが守られるように保護と育成に努める仕事をしている者たちと説明されている。

霊的存在を見ることができると自称するインドネシア人 Om Hao 氏によれば、プリには二種類あるそうだ。ひとつは美しい娘姿で自在に人間界に出没し、人間にいたずらをするのを生きがいにしている者たち。もうひとつは外国から来たプリで、小人の姿をし、背に翼が生えている。

インドネシアの在来プリはジャワ島中部のムラピ山に王国を作っているとオムハオは物語っている。ムラピ山に宮殿を持っている霊界の主はニャイ・ロロ・キドゥルだと一般に言われているから、ひょっとしたらプリはそんな位置付けにある者たちかもしれない。

＊Medi Pocong

ポチョンとはカファン布を巻かれた遺体を指しており、その遺体がピョンピョン飛び跳ねて動き回るものが memedi pocong あるいは hantu pocong と呼ばれる。

人間が死ぬと霊は肉体から離脱して去っていくものなのだが、埋葬のときにカファン布の縛りひもを解き忘れたりすると、霊は遺体からの離脱ができなくなる。死後四十日経過すると霊はこの世から去らねばならないことになっているため、そのときに霊がまだカファン布の中に閉じ込められているポチョンは、カファン布の縛りひもをほどいてもらおうとして地中から飛び出してくる。それがポチョ

ン幽霊の由来だそうだ。

　ホラー映画に出てくるポチョン幽霊はピョンピョン飛び跳ねるのだが、そのような視覚化がまだできなかった時代のポチョン幽霊は空中でフワフワ漂うのが普通だったそうだ。その変化はどうも人類が持った観念主義の先鋭化（良く言えば合理化）ではないかという気がする。人類の知能が観念主義という方向性の下に進歩発展してくると、こんなことが起こるのかもしれない。

＊Cumpelung

　現代ジャワ語で頭蓋骨を意味するチュンプルンは cumplung と綴られる。樹に生っているヤシの実の中に丸い穴が開いて中身が空っぽのものもチュンプルンと呼ばれる。チュンプルン幽霊の詳細についてネット内を探してみたものの、フォースター氏の説明より詳しい話が見つからなかった。[続く]

「1950年代のジャワ人（11）」（2023年04月21日）

＊Banaspati

　いわゆる火の玉がバナスパティだ。低い高さに浮かび、空中を飛んで移動する火の球あるいは渦状の火であり、それにちょっかいを出す者を焼き殺す。この火の精が火の形をしているとき、banaspati geni と呼ばれる。ジャワ語のグニは火を意味する。

　一方、フォースター氏が記録した特徴のバナスパティは、正確には banaspati tanah liat と呼ばれる者かもしれない。しかし特徴の表現が少し違っている。バナスパティタナは捕まえた人間の血を一滴残らず吸い取って殺してしまう。たいてい森の中に隠れていて、身体が土に触れていない人間が餌食になるとされている。バナスパティタナの懸念があるときは、サンダルを脱いで裸足で土の上に立つことが勧められている。

＊Buta

この綴りはジャワ語でブトと発音され、人間の形をした巨大な食人鬼を意味している。語源はサンスクリット語のようだ。一方、インドネシア語の場合はブタと発音されて盲目の意味を示す。ところがジャワ語の buta もインドネシア語に取り込まれたため、インドネシア語での buta という綴りはどちらもブタと発音されるが盲目と食人鬼のふたつの意味を示すようになった。

これでははなはだややこしいので、その間の事情をよく知っているひとはインドネシア語文の中に食人鬼の意味で書かれた buta が出てくると、それをジャワ語扱いしてブトと読むひともいる。

正確には、日蝕のときに太陽を呑み込む者は Batara Kala という名前であるため、現代ではたいていその名前で呼ばれている。昔のジャワ人はバタラカラが巨大な食人鬼であったためにブトと呼んでいたのかもしれない。

日蝕や月蝕が起こるようになった事の発端は、ヒンドゥの天上界にあった。バタラカラはシヴァ神の子供として生まれたが、呪いをかけられてブトになった。あるとき、ブトであるバタラカラが神々の集いに紛れ込んで一緒に永遠の水を飲んだ。ところが、資格を持たないブトが混じっているのを陽の神スルヤ神と月の神ソマ神（ラティ女神とも言う）がウィスヌ神に訴えた。ウィスヌ神はバタラカラの首を切り落としたために、首から下は籾を突く臼 lesung になった。

頭だけになったバタラカラがスルヤ神とソマ神あるいはラティ女神に怒りを向けたのも当然だ。バタラカラはかれらを追いかけまわすようになった。追いかけて捕まえると、呑み込んでしまうのだ。ところが呑み込んで喉を通ったら、身体がないのだからまたすぐ外に出て来る。太陽や月が呑み込まれてまた喉から出て来るまでの間、日蝕や月蝕が起こって地上は真っ暗になるのである。しかしその闇もすぐにまた元に戻る。

地上が日蝕月蝕によって闇に覆われるとき、田畑の栽培物は水をかけ続けなければ死んでしまうと昔のジャワ人は信じていた。また果樹は木を叩いてやらなければならない。そうしないと、バタラカラの怒りの波長がそれらに届いて無事で済まなくなるのである。

人間は、地上が闇に覆われている間、眠ってはいけない。眠ると怒りの影響を蒙る。家畜も同様で、もし眠ってしまうとそのまま起きなくなる可能性が高いから、蝕が起こっている間は木の棒などで家畜を軽く打って眠らないようにさせなければならない。

特に人間の妊婦は危険が大きく、胎児は容易に影響を受けるため死産になるおそれがあり、無事に生まれても五体満足で生まれる保証がない。妊婦はベッドの下などの安全な場所に隠れなければならず、また蝕が終わったらスラマタンを行って安全回復を確実にさせることが勧められていた。[続く]

「1950年代のジャワ人（12）」（2023年04月25日）

日蝕や月蝕が起こると、バタラカラを驚かせて太陽や月が一刻でも早く戻るようするため、ルスン、クントガン、台所の鍋類などを叩いて音を出すことが昔から行われてきた。特にルスンを籾突き棒で打つと効果があると考えられてきたものの、ルスンを使う家庭は大きく減少してしまったから、昨今は村落部でも鍋釜を叩く家庭が一般的になっている。

バタラカラは人間にそんな害悪をもたらすのだから、ジャワ人はバタラカラが一刻も早く天空から立ち去ってくれることを望む。村に盗賊団がやって来ると、戦闘技ではとてもかなわない村人も一致団結して全員が立ち上がり、鍋釜を打ち鳴らしながら盗賊団に向かって行く。大勢の武器を持たない人間集団が総出で大音響を立てて詰め寄ってくれば、盗賊の心理は普段と異なるものになってしまう。そんなシーンは何やら、うちわ太鼓を大勢が叩いて「怨敵退散」を唱える姿にわたしの脳裏でオーバーラップしてくる。ヌサンタラではそれが効果を持ったのかもしれない。一方、極東の国では確か皆殺しにされるのが普通だったと思うが、間

違っているだろうか？

１983年6月１１日午前１１時29分に始まった皆既日蝕のとき、オルバ政府はバタラカラを信じる国民に対して、日蝕の間は家の中に入って外に出ないようにせよと指導した。特に日蝕を絶対に見てはいけない。そんなことをすると目が buta（盲目）になると説明されたのだが、国民の中に「ブトに変身するぞ」と脅かされたように感じた者がはたして皆無だったかどうか？

しかしバタラカラを怖れ日蝕に怯えたのはどうも庶民ばかりだったような印象だ。オルバ政府の高官たちの中で、家にこもった者はひとりもいなかった。どうやら古代から支配階層はバタラカラなど何とも思っていなかった節がある。

古マタラム王朝のムダン王国創始者ンプシンドッが西暦９２９年７月２４日にマランのトゥルヤン石碑のオープニングを行ったとき月蝕が起こったものの、そんなものが王国行事の進行に支障をもたらすことはなかった。

１２４８年から１２６８年までシゴサリ Singhasari 王国を統治したウィスヌワルダナ王がムラマルルン石碑の建立式典を西暦１２５４年に行った際、月蝕が起こった。偶然だろうか、碑文の中にシヴァの名前が刻まれている。

古マタラム王国の王都が置かれた中部ジャワ州のクドゥで発見された西暦８４３年の年号を持つスチェン石碑も月蝕の夜に式典が営まれた。おまけに月蝕という言葉が碑文の中に刻まれていて、ジャワ島における最古の記録になっている。

ジャワ島王国史の参照資料として最右翼と目されているヌガラクルタガマは西暦１３６５年の９～１０月のある日に完成した。ンププラパンチャがそれを書き終えた夜、月蝕が起こった。

ジャワ人の宇宙観に特別な位置を占めている日蝕月蝕に対して、支配階層が示す態度は庶民層のものと大きく異なっていた。その現象を見るかぎり、庶民が持たされた観念も支配階層に完全に支配されていた

可能性が感じられる。

インドネシア人がだれでも知っているブトのひとりが buto ijo だろう。全身が緑色をしているので、ブトイジョと呼ばれている。視覚化されたブトイジョは、巨大な体躯、カッと見開いた大きな目、野生のままの長い頭髪、口からこぼれ出た牙のような歯並をしていて、見る者に恐怖をかきたてる。しかし身体を人間並みの大きさにすることも自由自在だ。時に、腕を四本持っている姿も描かれており、人間には対抗し得ない能力を持つ存在という意味が暗示されているように思われる。

一般に言われているブトイジョの性質は、子供をさらって自分の奴隷にしてこき使い、最後に食ってしまうという単純明快なもの。物語では往々にして、夜の真っ暗闇の中に出現するシーンがよく描かれているのだが、昼日中に登場する話もあって、時間帯に拘束されるような者ではないように思われる。

日蝕月蝕を起こすバタラカラをブトと呼ぶひとがいることは上記したが、そのブトをご丁寧にブトイジョに特定化するひとまでおり、ミクロレベルでいろんなひとから話を聞いていると何やら支離滅裂な印象を受けることになりそうだが、なぜそんなことになるのかはお察しいただけると思う。[続く]

「1950年代のジャワ人（13）」（2023年04月26日）

ブトイジョに対する魔除けは、黄色い竹の小片にひもを通してネックレスのようにかけておけばよいとされている。ブトイジョが狙うのは子供だけのようで、女性の操をむさぼる者ではないようだ。だから他の女好き悪霊ほどの脅威は感じられず、ただおどろおどろしいという怖さがあるだけではないだろうか。

とは言っても、ブトイジョは人間の願望を成就させる力を持っていて、その助力を得た人間は自分の大切な何かを代償としてブトイジョに捧げなければならなくなる。その代償、往々にしていけにえ、をインドネシア

語で tumbal という。ブトイジョは tumbal nyawa を求めることが多い。

ブトイジョが持っている能力の中に pesugihan というものがある。ジャワ語のスギは金持ちを意味している。日本人の杉さんがジャワへ行くと、きっと誰もが大金持ちと思うだろう。プスギハンとは黒魔術を使って金持ちになる方法を指している。プスギハンに関わる悪霊や妖怪にはトゥユルやバビ~ゲペッなどもいるが、ブトイジョの貫禄には及ばないようだ。そのため、ブトイジョと連絡を取ることのできるドゥクンは商売繁盛している。

トゥユルは坊主頭の子供の姿をしたジンで、かれの飼い主のために近隣の住宅を回って家の中に置いてある金を集めて来る。トゥユルが求めることをしてやるなら、だれでも飼い主になれるそうだ。トゥユルを数人飼っている人間がいるという話もある。

このトゥユルがどうして銀行に入ってごっそりと札束を取って来ないのか？ATM機の中のお札は金属ではさまれており、ゴムバンドや何かではさんであるお札をトゥユルは抜き取ることができないというのがその理由として語られている。銀行にある新札はすべて帯封で縛られているではないか。

おまけにトゥユルは目から鼻に抜けておらず、頭にちょっと抜けたところがあるため、時々お札でない切符や領収書や金銭レジのレシートなどを持ち帰ることがあるそうで、飼い主はしばしばがっかりさせられるという話を飼い主のひとりがしていた。

引き出しのように人間が誰でも開くことのできる場所にあるお札はトゥユルの獲物になるのだが、金庫のような一度閉じられると鍵を持っていない人間に開けることができない場所はトゥユルにも開くことができないという説明もあり、トゥユルの銀行泥棒不可能説は世間周知のことになっている。

バビ~ゲペッは黒魔術を身に着けた人間が妖怪イノシシに変身し、透明イノシシになって見とがめられることなく他人の家に入り、現金を盗むというプスギハンだ。これも銀行泥棒不可能説がいろいろな理由で語られている。トゥユルとバビ~ゲペッについては、次のページをご参照ください。

インドネシアの「妖怪変化と超常譚」[11]

http://indojoho.ciao.jp/koreg/liblenik.html

＊Lamphor

現代ジャワ語では lampor と綴る。元来は日没時に川から聞こえる大きなざわめき音を指していて、南海の宮殿からヨグヤカルタ王宮あるいはムラピ山の宮殿に向かうニャイ・ロロ・キドゥルの家来の一行が空中を移動するために出している音だと信じられている。この言葉はインドネシア語に取り込まれており、KBBIには行列行進する霊と説明されている。

しかし現代インドネシアの都市伝説では、ランポルは空中を飛ぶ棺架の姿で描かれる。イスラム式の葬式は遺体だけを土中に埋葬するので、柩は遺体を墓穴まで運ぶためのものになっており、遺体と一緒に埋められることがない。棺架とはその運搬用の柩を意味している。空中を飛ぶ棺架は目に見えない悪霊がある場所の上空で飛ばしているものであり、夜中にたまたま家の外に出てそれを見た人間は姿を消して二度と戻ってこないか、もしくは狂人になって戻ると言われている。

悪霊の姿は玉の形をしている霊魂だという説があり、また人間の形をした黒い煙状のものだと語るひともいる。ただし人間の形とは言っても脚がない。その悪霊は人間を殺し、棺架に入れて連れ去るのだそうだ。もしも夜中に家の表戸をノックする者がランポルの悪霊である場合、扉を開いたが最後、その者は病気になり、たいてい生命を落とす運命をたどる。別の話ではノックもなしに家屋内に入り込み、眠っている者を殺して棺架に移し、魔界に運び去るとも語られている。ランポルの悪霊はしゃがむことができないので、ランポルが来たときはベッドの下や床の上に寝ていると被害者にならないという魔除けの方法も勧められている。

[続く]

[11] 巻末に添付

「1950年代のジャワ人（14）」（2023年04月27日）

悪霊が棺架を空中に飛ばしている目的はその場所に疫病を広めるためであり、その村の住民に落ち度があったのを怒って悪霊が皆殺しにしようとしていると言う話もある。魔界と交わした約束を破って tumbal を実行しなかった者がいるのか、それとも他の理由だろうか。

あるいはニャイ・ロロ・キドゥルに結び付ける説もあって、その悪霊の正体は南海の王宮の警護兵であり、棺架は海から来る南風に乗って空を飛ぶので、通る場所はだいたい一定していると語るひともいる。だから強い南風が吹いてくる夜はランポルに警戒しろと注意する年寄りも少なくない。

さまざまなバリエーションが述べられているものの、共通しているのは大きな音がする点だ。その音はよく聞くと welwo, welwo と言っているように聞こえるので、ジャワ人はそれを dijawil lan digawa（触って連れて行く）と解釈している。連れて行かれるのが子供だけなのか大人も対象になるのかよく分からないけれども、日没を忘れて遊び惚けている子供を家に帰らせるためにランポルがよく利用されるそうだ。

ランポルが村にやってきた懸念がある場合、村びとはバタラカラを追い払う時と同じことをする。ランポルも村にやってきた盗賊団と似たようなものなのかもしれない。

＊Kemamang

ジャワ人にとって火の玉はバナスパティだけでなく、このクママンもそうだ。夜中に大自然の中を通っている人間が時おり、空中に浮遊している火の玉を目にすることがある。それは見た者の方に向かって来る火の玉であったり、あるいは木々の間から間へ飛び回っている姿だったりする。

物識りによれば、頭が火で翼を持っている霊的存在がクママンだという説明になっている。バナスパティと異なる点については、バナスパティはアグレッシブに人間を襲って殺す行動が常なのに対して、クママンのほうは人間に襲いかからないというソフトな性質をしている。しかし、

だからと言ってクママンは無害だということにならない。クママンに出会った人間はその精神の根底を揺さぶられて狂人になり、挙句の果てに首を吊ったり高所から身を投げて自殺する末路に追い込まれる。

クママンにしろバナスパティにしろ、かれらが火災を引き起こしたり、あるいは接触した人間に火傷を負わせたという話がないようだから、その火は天然性の燃焼とはちがっているのではあるまいか。

ジャワ島のある地方では、クママンは水田の地面からちょっと上に巨大な火の玉となって出現し、人間を捕らえて食い殺すと信じられている。インドネシア語記事には間違いなく食い殺すと書かれていて、焼き殺すとは書かれていない。

このクママンも、その出現は人間界に起こる疫病・飢饉・大災害などの予兆であるという説が語られていて、ランポルと類似の役割を人間界に果たしているようだ。しかしランポルと違ってクママンの場合は、それらの疫病・飢饉・大災害をクママン自身がもたらすのかどうかよく分からない。

＊Rijal

ジャワ語辞典には、深夜に聞こえる奇怪な物音という語義が記されている。ジャワの田舎の村では、夜が更けると住民は早い時間に寝てしまう。みんな朝の暗いうちから起き出すのだ。どの家でも起きている者がいなくなって寝静まると、夜の闇は虫の声、小動物や鳥の鳴き声、その他さまざまな物音で満たされる。そんな中に、時にグレーッグレーッという、大きくはっきり聞こえる音が混じることがある。

それがリジャルだと言われているようだが、人間に何をするのか調べてみたものの、たいした情報が見つからなかった。

アラブ語に人／男を意味するリジャルという言葉がある。ジャワ人ムスリムにとってはおなじみの言葉だ。妖怪のリジャルがアラブ語に関係しているのかどうかは判然としない。ところが、ジャワ人の語る天地創造の話の中にリジャルが登場するのである。そこでは自然界の構成要素のひとつである光の原基物質という意味を持たされていて、それが人間の生命の源になったという話の展開を見ると、ジャワ人の物語る天地創造説話は最初ヒンドゥ＝ブッダ文化で組み立てられたものにアラブ文化の影響が入り、イスラム観念が混じりこんでジャワ的なものができあがったように思われる。[続く]

「1950年代のジャワ人（終）」（2023年04月28日）

ジャワ固有のものがその中にあるのかないのかはわたしの論じられるところではないが、そのストーリーを組み立てるのに使われた物差しやハサミや接着剤は明らかにジャワ人固有のものだろう。オリジナリティに剰々たる価値を置く者には多分、物差しやハサミや接着剤に意識を向ける余裕など存在しないかもしれないが。

宇宙ができたとき、人間界はまだそこに存在しなかった。それはつまり、まず最初に超自然界が作られたことを意味している。霊的存在が宇宙の先住者だったということだ。その後 mudita と呼ばれる人間界が作られた。ムディタには高度な権利が与えられた。つまり高い能力を持ち、それを駆使するという権利だ。あらゆるものに名前を付け、適材適所に配剤し、秩序を統べる力である。ムディタは空(くう)から発した世界に生をもたらしてそこを賑わいで満たすものだからだ。

この世が作られる前に宇宙を構成していたのは sunyaruri であり、それは人間の目に映らない、ただ感じることだけができるものだった。それは清く、無にして、穢れの排除された原初界であり、alam purwa と名付けられた。そこにムディタが作られ、更に終末界である wasana も作られた。

スニャルリは果てがなく、辺縁もなく、空で静謐な環境であり、そこに感覚が存在したかどうか判らない。ムディタはそのすべてがひっくり返り、ワサナはプルワに倣った。

宇宙ができたとき、太陽・地球・空気は既に作られていた。そして美しい光が作られ、人間は人間界のさまざまなものを見ることができるようになった。宇宙に必要な要素として、聖なる水 kamandhanu が作られた。穢れのない純粋なカマンダヌにさまざまな成分が溶け込んで、それは padmasari になった。

次いで rijal が生まれた。リジャルは光の精髄であり、白・緑・黄の三色から成っている。白は garini、緑は nurani、黄は handini という名で、その三つが sukma の生命になった。スクマは人間の霊魂だ。霊魂が人間の内部で生命を持ったとき、人間の生が始まった。

リジャルは小指の先ほどのちっぽけなものでしかないが、人間にとってはとても重要なものだ。リジャルは日によって変化する。金曜日は黄色い光で西から東へ移動する。土曜日は赤みがかり、南西から北西へ移動する。日曜日は赤色になり、南から北へ移動する。月曜日は白色で東から西へ、火曜日は青で北東から南西へ、水曜日は青のままで天空にとどまり、木曜日は黒に変わって北から南へ移動する。ジャワ人はそのリジャルの動きに合わせて自分の行動を統御しないと、悪い結果が生じることになると考えている。リジャルの動きが人間に恵みや褒美をもたらすのである。

人間はリジャルを通して色を識別するので、善悪を区別して完璧に生きることができる。ヒヤンスクマ[12]に溶け込んで人間に生命を与えたリジャルは超自然的存在だ。そのために、真のヒヤンスクマとコンタクトしようと考える人間は自己の内部に備わっている超自然の感覚を開いてやらなければならない。

正しい超自然の感覚を通して、人間は sasmita[13]を受け取ることができる。人間がヒヤンスクマと接触するようになると、自己の内にある Ingsun と向き合う道が開かれる。インスンとは生命そのものなのだ。インスンは火に由来する超自然の光 pramana の形をしている。プラマナを見出すために女は mayangsarkara、男は mayangkara の段階を経る。マヤンサルカラとマヤンカラは合体して mayanggaseta を作る。マヤン（愛）ガセタ(Gusti)とは神の愛が人間の中に下ったものだ。

その段階に至った者は satria(Kawula)と pinandhita(pendeta)の合体した人間になる。これこそがジャワ人にとって理想的段階の人間とされている manunggaling Kawula-Gusti なのである。

この天地創造譚はガジャマダ大学教授のスワルディ・エンドラスワラ博士の著作からかいつまんで抜き書

---

[12] 唯一神

[13] 喜び・微笑

きしたものだが、果たして読者のお気に召しただろうか？[完]

「ポンティアナッ（１）」（2023年04月03日）

（ポンティアナッ）

カリマンタン島西岸のほぼ中央にこの島でもっとも長いカプアス河の流れ込む河口があって、広大なデルタ地帯ができている。カプアス河の支流であるランダッ河の南部デルタにカプアス河の別の支流が水路をうがち、肥沃で水の豊富なこのデルタ地帯には背の高い巨木がうっそうと茂って密林をなしていた。

Pontianak スルタン国初代スルタンのシャリフ・アブドゥラッマン・アルカドリがその森林を切り開いて王都を作った。西カリマンタン州都ポンティアナッの街は西暦１７７１年１０月２３日に誕生した。シャリフ・アルカドリはそのとき、４１歳前後だったようだ。かれの父親アルハビブ・フシンはハドラマウトから来たイスラム布教者で、予言者ムハンマッの血を引くと言われている。母親は多分ヌサンタラのプリブミであり、このスルタンはアラブプラナカンだったにちがいあるまい。

その年、父親が没したのでかれと兄弟そして一家に従う民衆が新しい土地に移るため１４隻のカカップ船に乗って旅立った。カカップ船とはムラユの帆船で、海岸や狭い川の航行に適した設計になっている。このカカップというムラユ語は偵察やパトロールを意味しており、ムラユ人はこの船を軍事用途あるいは貨物運送用途に使っていた。一方カリマタ海峡から南シナ海南部にかけての地域で海賊の別名になっている、南フィリピン出身の海洋人種であるイラヌン人別名ラヌン人はこのタイプの船を海賊仕事の補助用船舶として使っていた。

一行は午後の礼拝時間に岬に上陸し、その土地の様子を調べた。その岬はいま、タンジュンドホルと呼ばれている。定住するにはあまりよくない土地であることがわかったので、一行はまた旅立った。カプアス河を下って、いまバトゥラヤンという名前になっている島にたどり着いた。そのときから、カプアス河の周囲を埋めつくしている密林がざわめき始めたのである。得体の知れない者どもが不穏な雰囲気を漂わせている。

うっそうたる密林の奥の方から声とも音ともわからない怖ろしげな物音が聞こえてきた。大勢の者が神経をいらだたせ、あるいは怯えた。「ありゃあ puntianak だ」。怯えるひとびとはそう語った。

一行は、デルタ地帯に出てから王宮の建設地を定めるために野営して地勢の調査を行った。ところが、密林の奥の方から聞こえてくるざわめきは収まる気配がない。怯える者たちは仕事が手に付かなかった。

アニミズム社会の観念に従えば、霊は高い木にとまる。beringin の巨木は諸霊が宿るための受け皿だ。ヌサンタラのどの土地に行こうが、ブリ~ギンの樹に障りを起こさないように努めている地元民の姿は共通のものになっている。障りを起こせば悪いことが起こるのである。punti というのは背の高い木を意味しているそうだ。そこに宿る霊をひとびとはプンティアナッと呼んだかもしれない。

これからスルタンになろうというシャリフ・アルカドリは、その不穏な者どもを追い払うために大砲を三発、密林の中めがけて撃たせた。効果はたちどころに表れた。怖ろしげな音はピタリとやんだのである。

シャリフ・アルカドリは砲弾の落ちた地点を探させて、そのそれぞれの場所に王宮、大モスク、王家の墓地を作らせた。この王都の命名を行うにあたって、初代スルタンはポンティアナッの名称を選択した。この町が持った奇妙な名称の由来譚がこれである。

しかしポンティアナッスルタン国の建国説話に出てくるポンティアナッというのは、カリマタ海峡から南シナ海一帯を古い昔から荒らしまわっていた海賊たちだったという分析もなされている。一部の海賊がそのデルタ地帯の密林を隠れ場所にしており、そこを開拓しにやってきたひとびとを追い払うために悪霊を装って脅かしたものの、反対に大砲を撃ち込まれてかれらのほうが逃げ出したというのが真相だったのかもしれない。

[続く]

「ポンティアナッ（２）」（2023年04月04日）

（クンティルアナッ）

ムラユ文化でよく知られた幽霊のひとりがこのポンティアナッだ。元々puntianak に由来したとされており、

プンティアナッとは perempuan mati beranak が短縮されてできた言葉だという説明が見られる。つまり出産時に死亡した女性の幽霊である。しかも出産に失敗して死亡し、胎児もこの世に生まれ出ることなく母体と一緒に亡くなったケースがポンティアナッの源泉とされている。

インドネシアの非ムラユ地方でポンティアナッは kuntilanak という名称で呼ばれている。ホラー映画やポンチ絵に描かれるクンティルアナッは、白い長衣を着て長い黒髪を垂らし、おぞましい笑い声を響かせる女の姿をしている。人間を憎み、人間を殺す攻撃的な幽霊がクンティルアナッなのだ。

ジャワ島でよく語られているストーリーでは、クンティルアナッはある時期に田舎の村に出現するようになり、たいへんな美人の姿をして満月の夜に現われ、人気のない寂れた場所を徘徊して男のナンパを待ち受ける。男がその針に掛かると暗い場所へふたりで忍んで行き、性行為の最中に正体を表わして、男の生き血を吸い取って殺す。殺しの仕事が終わるとワルの樹の高い枝の上に月光を浴びながら立ち、口の端に付いた血をぬぐおうともしないで、聞く者を戦慄させる笑い声を立てるのである。

人間の娼婦かクンティルアナッかを見分ける方法として、クンティルアナッはフランジパニの花の香りを漂わせており、また人間の姿で出現する場合は背中に穴が開いているので、背中を調べればわかるという話になっている。

ところがスンダ地方のクンティルアナッには背中の穴がなく、背中に穴があるスンダの幽霊は sundal bolong と呼ばれる別人だ。スンダルという語は性的にふしだらな女性を指して使われる言葉であり、ボロンは穴があいていることを意味している。何やら意味深な表現ではないか。

スンダルボロンという幽霊はクンティルアナッとそっくりの姿で描かれるために、同じものの異名と解釈するひともいるが、世間で語られている話を較べると細かい点に違いがあるようだ。スンダルボロンは背中の穴の中に内臓が見えていて、本人はそのありさまをとても恥ずかしがって常に長い髪の毛で穴を隠そうと努めている。そんな心理的なか弱さがスンダルボロンにある。

このスンダルボロンは男にレープされた結果死んだ女性だそうだ。レープと死の関係はさまざまなケースがあるのだろうが、レープが直接原因であっても遠因であっても、そのできごとがかの女の人生を狂わせたことは同じだろう。

そのときのレープによって妊娠し、死後に墓の中で出産した、というかの女のエピソードが紹介されていて、クンティルアナッとは経歴がちがっているだけでなく、性格にも違いがあるように思われる。この幽霊は新生児をさらって去っていく性癖を持っているために、赤ちゃんができた家庭はたいていこの幽霊を怖れる。

ヌサンタラでは今や、クンティルアナッとスンダルボロンの両方が徘徊していて、おまけにマレーシアにも出現するようになった。移住したヌサンタラのひとびとがスンダルボロンの話をマレーシアに紹介した結果そうなったということらしい。

クンティルアナッは性行為の最中に男を殺すだけでなく、幼児をさらったり、出産直後の女性に祟ったりもする。そんなクンティルアナッの攻撃から身を守るためには、釘・ナイフ・はさみなどを身の回りに置いておくとよい。そのような尖った物があると、クンティルアナッは傍に寄って来ないのだ。新生児のできたジャワの家庭ではたいてい、赤ちゃんベッドの近くにナイフやはさみが置かれている。

もしもクンティルアナッが攻撃してきたら、背中の穴にそれらの尖った物を突き立てるのだそうだ。しかし地方によっては、脳天に突き立てるように勧めているところもある。

インドネシアの「妖怪変化と超常譚」

「首しめ幽霊」（2005年12月13日）

中部ジャワ州ドゥマッ県のカラントゥガ、サユン、グントゥル、ボナンなど数郡で奇妙な噂が広がった。夜寝ていると、幽霊がやってきて首をしめ、命を奪うというのだ。それを幽霊だと言う者もおり、あるいはブラックマジックで姿を見えないようにした人間だと言う者もある。この噂はさらにスマランから中部ジャワ州一帯に広まり、カラントゥガ郡ロジョサリ村では四人が殺されたなどという話がまことしやかに流れ始め、自分が襲われたという話が各地でささやかれて、首しめ幽霊譚で中部ジャワ州北岸街道部一帯はもちきり。

おかげであちこちの農村では、夜ひとりで寝るのが怖いという人々が集まって、村の集会所で交代で夜番しながら寝るという奇妙な習慣がはやり、自警団と警察が夜回りを熱心に行うようになった。村の出入り口はしっかりと固められ、見知らぬ外来者がうっかり村に入り込もうものなら生命が危ないという雰囲気が醸成されていった。ドゥマッ警察署長やスマラン市長が住民に対し、噂に呑まれて好まれざるパニック行動を起こさないように、と警告したが、住民たちは日に日に新たな尾ひれを加えて届けられる噂の方を信じた。

１１月２２日早朝、北スマラン郡バンタルハルジョ町の住民四人が、首しめ幽霊に襲われたとそれぞれ訴えた。ウィナルノ30歳は、自分が眠っているときに首しめ幽霊に襲われ、自分の首を締めている黒い影を見た、と語った。ウィナルノが恐怖の叫び声を上げたので、隣人たちがかれの寝室に飛び込んでかれを起こした。スピア49歳は、半ズボンをはいた大男の姿の首しめ幽霊を見たと語った。そのときかの女はまだ眠ってはおらず、しかし眠くて半覚醒状態だったらしい。スピアも叫び声をあげたために、隣人が助けに飛び込んできた。

噂は噂を呼び、わけ知りは「首しめ幽霊はワリソゴの時代より昔からいたんだ。」と由来を語り、別の知識人は「あれはニャイロロキドゥルの崇拝者なのだ。」と由緒を説明した。ある村では「首しめ幽霊を捕まえたぞ。」と触れ回る村人が出た。「そりゃあたいしたお手柄だ。」と村役村民たちがやってきてその村人に幽霊はどこかと尋ねると、村人は部屋の片隅にひもでつながれている猫を指差した。「今はあの姿をしているが、あれが首しめ幽霊の化生だ。」

ドゥマッ郡ブレロン村のジャッミコ42歳とトゥルス25歳はそれぞれが化生の黒猫を捕まえた。そしてスマラン県バウェンのプサントレンに猫を委ねた。ジャッミコは猫に言って聞かせた。「もしお前が元人間だったら、善き人間に戻れ。元々動物だったのなら、人間に祟りを起こさない動物に戻れ。」この話が付近一帯に伝わると、化生の猫を一目見ようと村人たちがあとからあとからプサントレンにやってきた。中にはプサントレンにタユの儀式を猫のために行えという要求も出され始めた。そんな状況にバウェン警察署はプサントレンを訪れて猫を逮捕し、拘置所の独房にぶち込んだ。署長が言うには、あのままにしておくと、住民間でタウランに発展しかねないから、とのこと。「猫がそんな背教行為を行うはずがないという一派と噂に呑まれている一派との間で抗争に発展するだろう、と言うのである。ともあれ、プサントレンから警察署に移された化生の猫を見ようと、周辺各地からやはり人々が続々と警察署の拘置所を訪れた。ところが、それから四日後、拘置所の独房から黒猫二匹の姿が消えた。「やはり姿を変えたか？」とつぶやく見物人に、「いやいや、三日間観察したがまったく猫のままなので、昨晩放してやったよ。」と警察署長が答えた。

「あなたは超自然を信じますか？」（2009年5月4日）

神秘好きのインドネシア人は果たしてどのくらいスーパーナチュラルを信じているのだろうか。特に最近話題をまいたポナリ現象のように、霊験あらたかなるものが持つ超自然パワーをどのくらい信じているのか、ということについてコンパス紙R＆Dが2009年2月18～20日の間全国10都市の857人に対して行なった調査で、学歴別に持っている傾向が明らかにされた。ちなみに「あなたはお守りをいつも持ち歩いていますか？」という問いに「はい」と答えたのは26人しかいなかったものの、スーパーナチュラルを信じていると答えたひとは大きな数にのぼった。

	無学歴	小学校卒	中学校卒	高校卒	短大卒	大学卒(学士)	大学卒（修士）
信じる	40%	32.5%	27.6%	34.7%	35.4%	39%	30.3%
信じない	40%	65%	71.3%	63.7%	63.6%	57.8%	69.7%
分からない・無回答	20%	2.5%	1.6%	1.6%	1%	3.2%	0%

どこまでのレベルの教育を受けていようが、三人にひとりは超自然にいる何かが現世にいる自分たちに何らかの働きかけをしているという思想に染まっているようだ。呪い殺しが刑法典の中で犯罪のひとつに据えられている事実がその実態を裏書しているように思える。近代実証主義がかれらの日常生活に根付く日はまだまだ先のようだ。

「スンパポチョン」（2010年8月2～5日）

東ジャワ州ジュンブル県グムッマス郡ムナンプ村クドゥンレンコン部落の老人ミスタニ75歳が、同じ部落の住民サリミン45歳をブラックマジック使いだと非難した。この部落では過去20年間に住民11人がよくわからない原因で死亡しており、住民の間ではブラックマジックで殺されたという噂がささやかれてきた。

ジャワの田舎でブラックマジック使い（インドネシア語は tukang santet）だと指差されたら、生命にかかわる問題になる。立証などできるはずもないことがらだから、幼児のふざけ話程度のものと軽んじるのは大きな危険を招くもとだ。なぜなら、住民たちはその実在を信じており、誘導のしかたひとつで容易に集団リンチに発展するからだ。田舎で恐いのはそれなのである。

ミスタニに魔性の殺人鬼だと名指しされたサリミンは怒った。「何を言うかい！オラの家族の方が弟・兄・叔父の三人をブラックマジックで殺されてる。そんなことを言うミスタニこそがブラックマジック使いぞ。」

とはいえ、年寄りのほうが無条件で尊敬され信用される世間の風習であれば、そんな水掛け論的非難讒謗の応酬をいくらしたところでサリミンが優位に立てる見込みはあまりない。世間にオラの潔白を証明するにはどうするべえ・・・・・とサリミンとかれの一族は頭を絞った。そして到達した結論がスンパポチョン(sumpah pocong)だったのである。

ポチョンとは白布の死衣で全身を包まれた死体のことで、その死体を包む白布はカファン布(kain kafan)と呼ばれる。イスラム式埋葬では、死体は必ず全身を清めたあとカファンで全身をくるみ、鼻や耳などに綿を詰め、墓穴に運んでそのまま埋める。そのポチョンがゾンビになって墓穴から抜け出し夜の村や町を徘徊す

るのはインドネシア版オカルト映画でおなじみのものだ。ならば、サリミンが行なったスンパポチョンとはいったい何なのだろうか？

人間は真実を語るし、嘘もつく。だからひとの言う言葉が真実であるのか嘘であるのかは、そこだけではわからない。世界が超自然の力に支配され、悪邪狡曲の念を抱く者は超自然の力が成敗すると信じられていたころ、禁忌を犯す者は雷火に打たれて焼け死ぬということが言われ、それを怖れる多くの人間に禁忌を守らせる効果をもたらしていた。

だから昔のひとびとは自分の言うことが真実であるのを証明するために「わが言葉にいつわりあらば雷に打たれよ」と天に向かって大声で叫ぶようなことをした。インドネシアにもその風習はあり、インドネシア語では sambar geledek という言葉で表現される。

スンパポチョンもそれと類似の原理に拠っている。自分は真実を述べているのだということを証明するためにその人間にポチョンの姿をさせ、アッラーの前でその主張を語らせるのである。ポチョンの姿をさせるのは、その人間が命がけで真実を述べているのだという印象を見る者たちに与えるパフォーマンスだろう。「人の将（まさ）に死なんとする、其の言ふや善し」である。

クドゥンレンコン部落のサリミンはモスクへ行って生きたままるで死体のようにカファンで全身を包まれ、モスクの説教壇の前で自分はブラックマジック使いでないことを明言した。もちろんサリミンは死体でないから全身を清めてからカファンで包むようなことはせず、盛装した上からカファンに包まれた。

このスンパポチョンの行は標高３，０８８メートルのアルゴプロ山を北にいただく広大な平地の真っ只中にある寒村に大きなトピックをもたらした。村民はもとより県外からも続々とその見物に訪れるひとでひきもきらないありさま。言うまでもなくサリミンの行なったスンパポチョンは可能な限り大勢のひとに目撃してもらうことが目的だったから、かれにしてみれば目論み大成功というところだろう。なんとミスタニの一族も大勢がサリミンのスンパポチョンを見にやってきたそうだ。どうやらこれでサリミンは自分の立場をきわめて優位に持ち込んだようだ。

このスンパポチョンはムスリムがモスクで行なうのが普通だが、イスラム法の中にポチョンの姿をして神に誓うような作法はない。だからこれは正式なイスラム法の遂行とは異なる、イスラム渡来以前からインドネシ

アにあった習俗がイスラムの中に取り込まれた形のひとつだとされている。つまりポチョンの形はもちろんイスラム法に従った葬儀の作法であり、アッラーの前で誓いを述べることもイスラム法に従ったものではあるが、イスラム法はポチョン姿で神に誓うようなことを教えていないということなのである。

遺産相続・土地所有・金銭や物品の貸借等の民事にかかわる係争で、証拠がほとんどあるいはまったくないというケースのものがある。そうなるとあとは本人の弁舌と意志で周囲の人間を信用させて相手を追い込んで行く、という行動に向かう。つまり共同体住民の多数が信用すればそれが事実として扱われる、という不可思議な原理がそこに働くのである。サリミンのケースもそうだ。サリミンがブラックマジック使いであることを部落民に信じさせれば、それが事実と化してサリミンに対する処刑に発展する可能性は高い。サリミンがスンパポチョンを行なって部落民に潔白を証明し、部落民がそれを信じたら、サリミンの身の安全は保障される。インドネシアにはそのような原理がいまだに消滅することなく存在し続けているのである。

しかし係争が訴訟として法廷に持ち込まれることもある。その場合でも証拠がほとんどあるいはまったくないというケースのものがないわけではない。普通、証拠がまったくなければ訴訟は却下されるわけで、自分が正しいことを主張しあう原告と被告のどちらを信じるかというようなことを判事が行なうわけにはいかない。ところがインドネシアの民法および民事訴訟法の中にこのスンパポチョンが取り入れられているのである。

インドネシアの民事法廷で証拠として採り上げられるのは、まず書かれたものや物的証拠、そして証言。次いで過去の出来事を時系列に並べ、その帰結として推測されることがらを証拠として採り上げるということも行なわれるが、この第三種の証拠は判事にあまり歓迎されないものらしい。それでもまだ判決を下すのに不十分である場合、第四の証拠として採り上げられるのが本人の自認である。しかしその自認というのは、単に自分が正しいとして弁じたてることを意味しているのではない。そこにスンパポチョンが登場するのだ。

もちろん厳粛な法廷ではポチョンなどという場違いな言葉は用いられず、スンパミンバル(sumpah mimbar)という言葉に置き換えられている。優先度の高い三種の証拠で判決が下せない法廷は、この第四種の証拠をもとに判決を下すことができる。アッラーへの誓いはインドネシア社会にとってそれほど重要な位置に置かれていると言うことができよう。

民事訴訟法はスンパミンバルを第四の証拠に採り上げてよいと認めているが、スンパミンバルの作法に

は一切言及しておらず、ポチョン姿を取ろうが取るまいが問題にはならない。もちろん民事訴訟法はムスリムだけに適用されるわけでなく、あらゆる宗教者も同じように扱われるから、スンパは自分の信じる宗教の礼拝所で行なうとされており、非ムスリムがポチョン姿をするはずもない。ただムスリムにとっては社会通念としてスンパポチョンが確立されていることから、ムスリムスンパ者の作法がそれに引きずられているのが実情であるようだ。

民事訴訟でスンパは薄弱な証拠を補完するためのスンパスプレトワルと証拠の完全不在に対する決定打としてのスンパデシソワルの二つに区分されている。判事団・法廷吏・弁護人・ウラマたちがモスクでスンパ者が行なうスンパミンバルを実見聞し、その際に述べた言葉の内容と本人の態度を合わせてスンパを評価する。

スンパミンバルを行なう日時にスンパ者はモスクでまず身を清め、そしてアルクルアンが唱えられる中で死者に与えられる作法をそのまま受ける。キヤイのひとりがアッラーに成り代わってスンパ者に対面し、大勢の列席者の前でスンパ者は神掛けて真実を述べる。

その儀式が終わると、法廷事務官を中心に列席者は顛末書を作成して法廷に送り、その顛末書を踏まえて判決が下される。度胸のある人間が勝訴するという他国にあまり例のない原理がそこにある。

「身に着けた不死身の術を試したら、死んだ！」（2012年3月23・24日）

ジャワ人の神秘主義はつとに有名で、ジャワ特産の短剣クリスの霊験あらたかさに関しての、クリスを持って外出したところ、クリスが持ち主の手を離れて空を飛んで家に帰り、持ち主が家に着いたらクリス掛けに鎮座していた、という話などは枚挙にいとまがない。

その神秘主義の一項目として、不死身の体になるというものがある。その術を修めるための作法がもちろ

んあり、ドゥクンの指導のもとにその作法を極め、いざ戦争に赴いて身に一創も負わずに敵を皆殺しにしたという英雄譚もあれば、敵になぶり殺しにされたという話もある。ともあれ、不死身の体を持つことに憧れる人間は数多い。なにしろ鉄砲の弾丸をはね返し、槍で突かれようが剣で切られようが、体のどこにも創ができないというのだから、それが本当であればもう怖いものなしだ。

ジャワ島西端のバンテン州にドゥブス(debus)という術が伝わっている。16世紀前半、西ジャワのヒンドゥ王国であるパジャジャランの征服を試みた東部中部ジャワ北岸のイスラム都市国家連合がパジャジャランの筆頭海港バンテンを占領してそこにバンテン王国を築いてから、ドゥブスの術がその地に花開いた。この術を修めれば、鋭利な刃物や火あるいは劇物などに体を損なわれることがなく、まだ割っていない椰子の実の中に殻を破らないで外にある品物を封じ込めたり、頭で鶏卵の卵焼きを作ったり、といった不可思議な芸当ができるようになる。

ドゥブスというのは元々アラブ語でアラブ風の剣を意味した[14]。幅広の湾曲した剣で先が尖っているあの剣のことだ。ドゥブスの術者に対してその剣が振るわれ、何度も体を打ち据えるが、体のどこにも創がつかない。次いで腹を槍で突くが槍はまったく突き刺さらない。鉈を持ってきて体を切り刻もうとしても創ができない。熾火を食べ、舌や頬あるいは体の皮膚に針を通し、それでも体は無傷のまま。体を切り刻んで創ができ、血が流れると、術者はすぐにその創を癒してしまう。体に劇物をふりかけて着ている衣装がぼろぼろになっても、皮膚がただれることもない。さらにはガラスや陶器の破片を食べ、そしてわが身を焼く。術者はそんな芸当を衆人環視の中で行ってみせる。それがドゥブスだ。

北ジャカルタ市チリンチンに住むデディ、アンドリ、ヘンドラ、ラフマンの四人がバンテン州セラン市スカワナのザエナルの家を訪れたのは2月19日（日）夕刻のこと。ザエナルを知っているデディが不死身の体になれると三人を誘ってやってきたのだ。その夜、四人はザエナルの指導を受けながらその家の裏庭でドゥブスの術を身に着けるための作法を踏み行った。呪文を唱え、花を浸した水でマンディする。すると四人は体の奥底から湧いてくる力を感じた。

---

[14] 編者がバンテン州のセランに駐在していた時にこのドゥブスの実物を触ったことがある。トラックの板ばねでできている刃がついていない蛮刀であった。日本から持って行った鉈でティッシュを切ったところ現地の人たちはその切れ味に怖がった。

「自分がまるで別人になったみたいだぜ。」

「お前もそうか。オレもなんだか力がついてきた気がする。」

「じゃあ、やってみるか。お師匠、お願いします。」

ザエナルは用意した劇物を四人の体に振りかけはじめた。そしてそれを体にすり込むように手でこする。ところが劇物が体にかかったとき、かれらは「痛い痛い」と悲鳴をあげた。どう我慢しても痛いのは痛い。

ラフマンは腕がただれ、デディとアンドリは背と胸が焼けた。次はヘンドラの番だったが、かれに劇物を振りかける前にザエナルは事態が異常であることに気付いた。ヘンドラはそれで命拾いした。

ザエナルは急遽デディとアンドリとラフマンを家から7キロ離れたセラン県地方総合病院へ連れて行った。到着したのは夜１０時ごろで、救急治療室で三人の治療が行われたが、軽症のラフマンを除いてあとのふたりは午前3時ごろ、息を引き取った。

事件の報告を受けたセラン県警は病院のラフマンやザエナルの家にいる者たちから事情聴取をしたが、肝心のザエナルは姿を隠してしまっており、警察はその行方を追っている。

デディとアンドリは親族で、同じ自動車修理工房で働いている。土曜日の夜ふたりは別々の理由を家族に告げて家を出た。かれらふたりはこれまで不死身の術を修めるようなことに興味を持ったことがなく、残された遺族はふたりがいったいどうして不死身の術を身に着けようとしてかえって死んでしまったのか、まったく見当がつかない、と当惑の中で悲しみにくれている。

「呪いと同棲」（２０１３年６月１１日）

われわれは既に宇宙飛行やデジタルの世紀に入った。ところがインドネシアでは時計の針を逆戻りさせようと努めている者がいる。呪いを犯罪あるいは刑法違反と定めて中世以前の時代に戻そうというのだ。そして呪いの研究視察にヨーロッパへ行こうと言う国会議員が現われた。

わたしが知る限りでは、呪いはアフリカ諸国やカナダで法制度のお荷物になっているだけだ。もし呪いを刑事犯罪にするのであれば、その要素をどのように分析し、何を決定要因とするのか？フレイ教授によれば、呪いに関わる基本事項はふたつあり、呪い犯罪の要素の有無を警察が判断するよう訓練することではないのだそうだ。

＜冤罪＞

わたしが不思議に思うのは、犯人と被害者の因果関係において、呪術者を訪れて呪いを依頼しあるいは使嗾した者がどうして共犯者の座に置かれないのかということだ。このことは、特定道路で特定時間に通行する自家用車に三人以上乗っていなければならないという規則をわたしに思い出させる。実際に警察が措置を取る対象にしているのは運転者やカーオーナーでなく、数千ルピアの報酬のために自分の身体で人数不足を補うサービスをしている者たちなのだ。特定の人物を呪うよう依頼した者も同じだ。依頼者は犯人とされず、呪術者が犯罪者にされる。

もし呪いというものが本物なら、コルプトル[15]やナルコバ[16]犯罪者にどうしてさっさと呪いをかけないのか？そのほうが近道ではないか？実際に犯行者－被害者関係を検討する場合、呪いの問題は基本的に単なる欺瞞をその本質に見出すことになる。呪いのイシューは、超自然性を信じ、医学的に合理的な根拠を求めず、復讐欲のとりこになっているだけの草の根民衆に受け入れられているものでしかない。

＜古代文化＞

人類文化開闢以来の古さを持つ男女の同棲行為までもが法律で統制されようとしている。古代社会で男女の同棲は何の問題でもなかった。人間が社会的価値スケール・文化のアスペクト・社会構造などを持つ共同体を形成するようになって、ひとは不倫・売春・姦淫を区別するようになった。法的規範が整備されだしてから、既婚者にせよ未婚者にせよ、正式でない性関係のすべてが不倫という言葉で呼ばれるようになり、正式でない性関係のうち既婚者のものは浮気と呼ばれて未婚者のものと区別された。

---

15 贈収賄者

16 麻薬などの薬物中毒

＜祭祀の一部＞

数世紀前から売春は宗教祭祀の一部としてとらえられており、今日のような意味合いとは違っていた。現在、売春は汚職撲滅コミッションのセックス饗応を含めてさまざまな意味が与えられている。一方姦淫は、未婚の互いに好き合っている男女が行なう、規範に外れた性関係だ。どの宗教であれ、教義に即していないすべての性関係は禁止という理解が標準だ。ところが教育があり公式宗教を奉じるひとびとがそんな明白な禁止対象にされている性関係を持とうとするのはどうしてなのだろう？

ともあれ、宗教規範の確立をはかるために刑法を使おうとする者が出現するとき、問題は違ってくる。インドネシアは宗教国家ではないのである。ましてや、なんらかの目的を持って同棲を承認している慣習法があったり、あるいは結婚儀式を行なう経済能力がないような場合まで法律で統制しようというのだ。そんな者たちを同棲の罪で刑事犯罪者にするというのは、なんという差別だろう。慣習的社会文化に従っている文字を知らない種族の社会はどうだろう？同棲罪をかれらに適用してはならない。

いかなる理由であれ地方高官が結婚し、その数日後に妻を離縁したようなケースも、同棲に区分されるのだろうか？ゴシップによれば、ジャカルタでも大勢の高官たちが同棲しているそうだ。本当は、そのようなものは売春の一種の隠れ蓑なのである。オランダ人はそれを「Hoe groter geest, hoe groter beest.」と評している。つまり社会的地位や教育レベルが高まれば高まるほど、ケダモノ心も大きくなるという意味だ。

オランダの刑事犯罪法教授ファン・ハームルは第二次大戦の前にこう書いた。「劣悪な刑事犯罪法を通して、民衆の倫理生活は毒され、自由は息の根を止められ、治安は破壊される。そして無実の者が犠牲者になるのだ。」

モラルに満ちた倫理に目を開き、熟考せよ！

ライター：　アイルランガ大学名誉教授　JEサヘタピ

ソース：　２０１３年５月２３日付けコンパス紙　″Santet dan Kumpul Kebo″

「ドゥクン、呪い、公共アナーキー」（2013年6月26日）

人間というものは奇跡なしに生きることができないため、自家製の奇跡を自分自身に与えようとする。かれらは異端者にも、無神論者にも、反逆者にもなれるが、魔法や呪術をも信じる。 ヒョードル・ドストエフスキー（1821－1881）

ドゥクン、魔法使い、予言者あるいはどんな名称であれ、その話はこうして始まる。人間の神秘に対する嫌悪と憧れは、もちろん太古から続いてきた。それは石器時代以降に発展してきたと信じられており、神秘の術法をマスターした者はコミュニティ内で特別な地位を与えられた。かれらは尊敬され、あらゆる方針の源泉となり、病気や問題を解決した。

魔法というのは一般に、超自然の力を用いて個人・社会あるいは特定事件に影響を与えることと定義付けられている。しかし文明が宗教を伴って浸透するようになると、魔法に関わっていた者たちは暗黒時代に投げ込まれた。その陰鬱な時代、人類の基本的人権にとってもそうだと言えるが、はヨーロッパで6～8世紀に起こった。超自然性に満ちた邪教は邪悪のパワーと見なされ、呪術師と指差された者には死が待ち受けていた。呪術師狩りとその殺戮は13、15、17世紀まで、アメリカの植民地を含めて継続した。

＜知識の道標＞

しかし世界の他の地域では、呪術はいまだにその場を与えられている。アフリカの諸種族は呪術師を不運から死に至るあらゆる事象への答えの源泉としている。数百年も続いているその文化は、のちに英国オックスフォード大学社会人類学教授となったサー・エドワード・エヴァン・エヴァンズ＝プリチャードが1920年代に南スーダンのアザンデ族に関する研究を行なったときに水面上に浮上した。

かれの『アザンデ族における妖術，神託および呪術』と題する研究はアザンデ族のローカルな知恵と同時に魔術に関する理解の道標となった。エヴァンズ＝プリチャードの著作は今日までもヨーロッパの多くの著名大学において人類学の必修書になっている。

アザンデ族はサヴァンナ草原に住んでいる。かれらは畑作・狩猟・漁労・採集で暮らしている。かれらはシロアリが好物で、また家禽を必ず飼っている。かれらの生活に不可欠なふたつのもの、つまりシロアリは美

味な食物なのであり、家禽は不倫から死までのあらゆる難問のためのメディアなのだ。呪術師の答えは、密林に生えている植物から抽出した赤い粉の毒を無理やり飲まされた家禽の反応次第だ。家禽に与えられる毒の量は普通、痙攣を起こして死ぬのに十分な量なのである。ところが、死に至らず健康を回復する家禽が稀でないのだ。

エヴァンズ＝プリチャードはその毒を英国に持ち帰ってラボ検査を行なった。その結果、人間にとってさえ猛毒のストリキニーネの類似成分がそこから発見された。

＜インドネシアのドゥクン＞

インドネシアでもドゥクンに関するさまざまな調査が行なわれてきた。そのひとつはクリフォード・ギアツの古典『ジャワの宗教(1960)』だろう。ギアツはジャワのドゥクンを、癒しドゥクン、治療ドゥクン、呪術ドゥクン、慣習ドゥクンの四つに区分した。

パルスディ・スパルランは著書『ジャワのドゥクン(1991)』の中で、善と悪の力が預託を与えたドゥクンはマクロコスモスとミクロコスモスの間を取り持つ者となりうる、と述べている。人類学者クンチャラニンラが相互関係における超自然パワーへの信頼と定義付けたものがそれだ。この超自然学にはさまざまな自然現象・相伝物・護符などが関わっている。だから、災害・出生・婚姻・将来などさまざまなできごとの解説を得ようとするとき、ひとはマクロコスモスとミクロコスモスの介在者としてドゥクンの助けを求めるのである。

しかし、場所によって依然尊敬の対象になっている慣習ドゥクンや癒しドゥクンと異なり、呪術ドゥクンは滅ぼさなければならない社会や宗教の敵と見られている。

＜呪術ドゥクン＞

インドネシアの歴史にも暗黒のページがある。現代という時代においてすらそうだ。呪いドゥクンだと指差されて数百人が生命を落とした。１９９８年にそれが起こったのは、バニュワギ・ボンドウォソ・シトゥボンド・ジュンブル・パスルアン・パムカサン・サンパンなど東ジャワ諸県の村落であり、皮肉なことに、それらの地方はナフダトゥルウラマの勢力地区なのである。刑法典改定において政府が呪い行為を第２９３条に置いたことに関連して、それは熟考されてしかるべき事実なのである。

アミッ・アルフマミが２０１３年４月１２日付けコンパス紙の論説『呪い：文化と犯罪』の中で明らかにしているように、呪いは三つの行為区分から理解されなければならない。他人を苦難に陥れる呪い、呪いドゥクンと指弾された者に対する憎悪が引き起こすアナーキー、呪いドゥクンと指差された者への私的断罪行為。

インドネシア民族の長い歴史を思えば、慎重さを欠く刑法典の呪いの条項は冤罪とコンフリクトの源泉になりかねない。呪いのイシューを除外しても、アナーキーや私的断罪行為は繰り返し発生しているのである。例をあげれば、アフマディヤへの襲撃事件、もっと遡ればインドネシア共産党員との烙印を捺された数十万同胞の殺戮など、枚挙にいとまがない。われわれはまたそんな悲劇を繰り返そうというのか？血と涙が大地を濡らすことがまだ足りないと言うのか？

ライター：　コンパス紙記者、アグネス・アリスティアリニ

ソース：　２０１３年５月８日付けコンパス紙　″Dukun, Santet, dan Anarki Publik″

「妖怪トゥユル」（２０１４年１０月２７～３０日）

社会生活の中で金銭が社会構成員の重要な価値観を形成しているところでは、金銭を盗む妖怪が出現するようだ。品物を隠す「物の怪」はどこにもいるらしいが、他の人間を富ませるために金銭だけを目標にして盗みを行なう「物の怪」というのはどうやら、マレーミソロジーにあるトヨル(toyol)別名トゥユル(tuyul)をおいて他にはなさそうに思える。日本でそのように金銭にこだわる妖怪はいないようだし、英語の情報を探ってみても、そういうスピリットを見つけることができなかった。ちなみに toyol　というのは amok　や paddy　と同様に、マレー語源の外来語として英語のボキャブラリーに入っている。金銭大事文化のインドネシアよりも大先輩格の中国にはその種の妖怪がいるのだろうか？ミソロジーには疎い筆者であるから、いろいろと見落としをしている可能性は小さくないので、その道の専門家のご意見を拝聴したいものである。

さて、マレーミソロジーの中に棲んでいるトヨルの本場はやはりインドネシアとマレーシアのようで、あとはシンガポールやタイにも出没するという話だが、その話をしているのもどうやら、もっぱらマレー系のひとびと

に限られているように見える。呼称も、マレーシアはトヨルが主流で、インドネシアはトゥユルがメインのようだ。このトゥユルの故事来歴をまずジャワ人専門家の書物から抜書きしてみよう。トゥユルとはこういう存在なのである。

トゥユルとは子供の姿をした妖怪だ。この妖怪は他人の金銭を、持ち主がまったく気付かないようにして、少しずつ盗む。盗難の形跡など一切残さず、おまけに持ち主が気付かないくらい少しの金を盗むのである。そしてかなりの期間をかけてターゲットにされた金の束が見えなくなったとき、持ち主はやっとその盗難に気付くという寸法だ。トゥユルが盗んだ金は、花を入れた曝し白布の袋に貯えられる。

トゥユルは子供の姿をしているが子供ではなく小人（こびと）なのだ。同じようなことをする妖怪にブタイジョー(buta ijau)というものがあるが、そちらは巨漢で、トゥユルは小人という違いがある。トゥユルは身長が５０～８０センチくらいで、頭は坊主、皮膚は赤みがかった茶褐色をしており、まるで幼児のように見える。男もいれば女もいる。妖怪の多くは人間を襲うのだが、トゥユルは人間に使役されるくらい人間を怖れている。特にトゥユルというものを熟知している人間には頭が上がらないそうで、持っていない尻尾でもすぐに巻いてしまう。

そんなトゥユルを飼育する人間がいる。飼われているトゥユルはご主人様の命令を拝してそれを実践するのである。ご主人様が命令するのは、トゥユルの専門分野である金銭・財宝・有価証券などを盗んでくることだ。トゥユルはご主人様が命じる家々をまわって、毎日金銭や金目のものを集めて持ち帰ってくる。

ジャワ語では財産を指してスギ(sugih)と呼び、金持ちになる方法をプスギハン(pesugihana)と称するが、プスギハンの中に超常的方法で金持ちになることも含まれており、トゥユルを飼うのは明らかにプスギハンのひとつである。上述のブタイジョーと契約する方法もあれば、バビゲペッ(babi ngepet)という術を使うものもあり、さすがに金銭重視文化だけのことはあって、金銭や財を得るための魔術には事欠かないのがインドネシアだと言えよう。

善悪観念が日本文化とは異なっているインドネシア人ではあるものの、超常的手法でプスギハンを行なうのは被害者が不当に損をすることであり、おまけに社会の中で貧富の差が拡大するのだから、魔術を使う人間は世間の敵と見なされるのに即して、トゥユルを飼ったり超常的手段を用いて金儲けをしていることが

判明すれば村人たちの報復リンチを受けるという結末が訪れるのは間違いない。だから闇でそういうことをしているひとびとは、社会が肯定する金儲けの源泉を用意しておくために必ず何か事業を行なっている。もっともポピュラーなのは、商売だ。

冠婚葬祭のような祭事を行なって地元共同体のひとびとを招くのは、招かれたひとびとから祝儀を得る副次効果が期待されているためだ。数日間にわたって祭事が行なわれれば、その期間、来訪者の祝儀が主催者の家に貯えられていく。トゥユルが一番好むのがそういうシチュエーションだ。金がどんどん入ってきて総額が変化していくため、主催者主人も途中経過がどうなっているのかという点への明確な認識が難しく、いくらいくら貯まっていると思ったのに少し足りない、という事態を自分の認識の問題と思ってしまう。それがトゥユルの付け目なのである。たとえ抽斗に入れて鍵をかけても、トゥユルには抵抗できない。反対に鍵がかかっているという安心感が、ご主人の心理を自分の思い違いという方向に導いていく。

勘のよいご主人が、トゥユルの仕業を見破り、盗人を痛い目にあわせてやろうなどとすると、たいへんな目にあわされる。トゥユルも自分が攻撃されたら、相手に腹を立てるのである。トゥユルの怒りに燃える逆襲は、その家の金銭財宝が急激に減っていくという現象で果たされることになる。

トゥユルを飼うことをはじめた陰謀プスギハンの徒は、トゥユルがどのような供え物を望むのかを最初に両者協議の上で決め、毎日それを欠かしてはならない。飼主がそれを欠かせば、トゥユルは逃亡して関係を絶ったり、あるいは飼主に復讐することもある。トゥユルの世話はなかなか大変な仕事であり、おまけに隣近所にトゥユルを飼っていることが絶対に知られてはならず、そういう苦労をしながら闇の金儲けを行なうのだから、そのような悪事を行なう人間が限られていることは容易に想像がつくにちがいない。

トゥユルに関するジャワ人専門家の説明はそういうものだが、バリ島にもトゥユルがいて、トゥユルの被害を避ける方策まで世間の常識と化している。バリ島でトゥユルを使った超常的プスギハンを行なおうとする者は、トゥユルを招きよせる特別の儀式を行なったり、もっと簡単なのは魔術を身に着けたオランピンタル(orang pintar)と呼ばれる者からトゥユルを買い取るのである。

トゥユルは子供のように遊ぶことのほうが大好きであり、仕事を命じられるのは嫌いだ。しかし飼主との約束があるため、いやいやながら命じられた仕事をするというのがバリのトゥユルらしい。飼主のほうはトゥユ

ルの生活を保証してやらなければならない。トゥユルの好物は往々にして母乳や血液だそうで、毎日そういうものをトゥユルのために用意しなければならない。また香を焚き、供物をそなえ、暦の決まっている日に祭礼を行い、時にはトゥユルが人間の生命を要求するために自分の家族を犠牲にするようなこともしなければならない。

トゥユルの盗みにも条件がつけられる。まず嫌疑がかかりやすい隣近所の家では絶対仕事しないこと。次いで、盗難が悟られないよう、一軒の家で目だった盗みをしないこと。銀行や貴金属店での仕事もしてはならない。そういう場所は往々にして結界が張られ、妖怪が侵入できないようになっている。

バリの一般家庭では、トゥユルの被害を防ぐために次のような対策が講じられている。家の敷地内の庭にショウガを植えて茎を長く伸ばす。家の表にポホントゥラッ(pohon tulak)あるいはワリソゴ(walisongo)と呼ばれる木を植える。それらの植物は悪霊が嫌うオーラを発するので、トゥユルのような妖怪や悪霊が家の中に入ってくるのを防止できる。他には、トゥユルが越えることのできない、目に見えないフェンスをオランピンタルに家の周囲に張ってもらうという方法もある。

あるいは、トゥユルが家の中に侵入しても、金目のものを盗まれないようにするための対策もある。財布や袋、金庫、金入れ、抽斗等々に次のような細工をするのだ。

- 針を刺したバワンメラを一緒に入れておく。トゥユルはバワンメラがあると目がひりひりして炎症を起こすので、近寄りたがらない。それを我慢して務めを果たそうとするトゥユルは、針に指を指されて痛い思いをし、そこから逃げ出して、「二度とあんなところへ行くものか！」と決意するという寸法だ。
- 小さい鏡を一緒に入れておく。トゥユルは遊ぶのが大好きであり、見つけた鏡を持っていじくりまわして遊ぶ。遊びに没頭するあまり、自分の務めを忘れてしまう、という寸法だ。
- カチャンヒジャウ(kacang hijau)[17]を十粒以上一緒に入れておく。これもトゥユルの遊び心を刺激してや

[17] 緑豆

るためで、トゥユルは見つけた豆粒がたくさんあるから、それをまず外に出して遊ぶ。そのとき、やはる遊びとして何粒あるのかを数えようとするが、両手の指の数を超えたらもうわけが分からなくなってしまい、何度も何度も数えなおすうちに自分の務めを忘れてしまう、という寸法だ。

- ユユカンカン(yuyu kangkang)と呼ばれる生きたカニを、少し水を入れた大きめのどんぶり状の容器に入れて、金目のものの置場所近くに置いておく。トゥユルはこのカニを見るともう遊びたくてがまんできず、カニをおもちゃにして遊ぶ。それで務めを忘れたらよし。あるいはカニに指をはさまれて痛さにその場所から逃げ出していくようにする。

バリ島にお住まいの方は、ユユカンカンを飼っておくとよいかもしれない。ちなみに、このユユカンカンというのはジャワの民間伝承のひとつアンデアンデルムッ(Ande Ande Lumut)の中に登場する川の主で、巨大なカニの姿をしており、色気を出して娘たちをなぶったために王女様に倒されるという役割を演じている。アンデアンデルムッは12世紀にジュンガラ王国とクディリ王国が再統合されたときのことを物語る内容になっている。

ここからは余談になるが、バリ人の厄払いの言い伝えにはさまざまなものがある。自己の威力を見せ付けて人間を支配下に置き、ひざまづかない者は痛い目や辛い目にあわせ、自分の力を頼ってくる者には代償と引き換えに現世の快楽を与えてやろうという悪霊や妖怪、魑魅魍魎がバリ島の隅々を覆っており、そういうものがもたらす難を避けるために、ああしろ、こうしろ、というのがその種の言い伝えだ。

1. 赤児の枕の下に、リディ(lidi)と呼ばれる椰子の葉の葉脈を乾燥させたものの束とはさみを置いておくと、魔よけになる

2. 妊婦は、日中の暮らしの中で常に折畳みナイフを身に着け、また夜眠るとき枕の下にはさみを置いておくと母子ともに安全。懐妊中の母子に対して送られてくる魔術や呪いを防ぎ、あるいは子供を食い殺す妖怪などを回避できる。

3. 墓地にあった土を絶対に自分の生活圏の中に置かないように。自分の土を取られた死者の霊が、その土に乗り移ってくる。

4. バワンメラ（エシャロット）、チャベメラ（赤トウガラシ）、クニッ（ターメリック）を玄関の扉の上に保存するように。家庭と一家全員を悪霊や悪人がかける黒魔術の障害から守ってくれる。

5. 金目のものを保管している場所の下や周辺に、バワンメラ、チャベメラ、カチャンヒジャウ（緑豆）などを置いておくと、トゥユルに盗まれるのを防ぐことができる。

6. 赤児の枕の下に、祖父の古着の中のパンツを置いておくと、悪霊や呪いの難を免れることができる。

7. 悪霊が憑依した人間を元に戻すためには、黒犬の血を使うのがよい。

8. ジュマックリウオン（暦日のひとつ）の夜に眉毛を抜いてはならない。そんなことをすると、トゥユルが寄ってくる。

「バリ島の神隠し」（2014年11月10～19日）

バリにはウォンサマル(wong samar)という存在が知られている。これはジャワ語とまったく共通の言葉であり、ウォンは「ひと」、サマルは「はっきり見えない、おぼろげにしか見えない」という意味をあらわし、つまりは幽冥界の存在であることを指している。それと同じ概念でムムディ(memedi)という言葉も使われる。これもジャワで同じように使われるが、ジャワではイスラム化されてからアラブ文化の概念であるジン(jin 英語はgenie)のほうが多用されるようになっており、ムムディはバリがバリであるために残ったという印象が強い。ムムディは一般の人には見えないし、存在を感得することもできないが、特殊な能力を持つひとにはそれが感じられたり、あるいは見えたりする。かれらは普段、崖や谷、川や巨木など、人間が恐れを感じる場所にいると見られている。

ウォンサマルは人間界で自在に自分の姿を現したり隠したりすることができるので、時には人間の姿で世の中に出現することがある。そんなウォンサマルに接しても、ほとんどの人間はそれを人間だとしか見なさず、その正体を知ることのできる者はあまりいない。人間とウォンサマルが交際することはありうるのだろう

か？いや、それどころか、人間とウォンサマルが夫婦になり、男と女の行為を行なうという話すらある。それが可能な人と不可能な人があるようだ。この世はすべての人間に平等に作られていないのである。

この話は2006年2月にデンパサルで起こったできごとだそうだ。南デンパサルの一角で、あるご婦人が美容室を開店した。自分で美容師の勉強をし、技術を身に着け、見習いの女性をふたり雇って、店開きをした。開店の客寄せは言うまでもなく半額割引の大サービス。バリ人女性にはガラッパチの男勝りが少なくないのだが、このご婦人はしっかり者で気立てがよく、仕事をていねいにきちんとやってくれるものだから、即座に評判を高めた。

常連客がついて、頻繁にそこを訪れるひともちらほらと出始める。洗顔・洗髪・ヘアカット・髪染め・ルルール・スパ・髷結い・化粧まで幅広くやってのける。時には男性客までやってきて髪染めを頼む。会社の催事や村の宗教儀式、結婚式や慣習行事など、いろいろな社会行事に出るために青年以上の女性たちは既婚と独身を問わず、身づくろいを頻繁にしなければならない。腕の良い美容師がいれば大助かりで、その結果、美容師のビジネスは大繁盛ということになる。

2月のある日、かの女の美容室にはじめての女性客がやってきた。一見しただけでは年齢がよくわからないのだが、独身女性のなりをしていて、魅力的な雰囲気を漂わせている。客は洗顔と洗髪を注文した。例によって、かの女はていねいに仕事したので、客はたいそう気に入ったようだ。客が言われたとおりの料金を払って店から出た瞬間、客が渡した紙幣が手の中でナンカの葉になっているのに気付いて、かの女は驚いた。世故に長けていない女性だったら動転して間違いを犯したかもしれないが、かの女はそうでなかった。かの女はすぐにその客がウォンサマルであることに気付いたのだ。その客はまだ美容室の入っている建物の表に入る。すぐに店を出たかの女は小走りにその客を追いかけ、しっかり袖をつかんで、ささやきかけた。

「ねえ、お金を払うのに何を使ったの？」客は奥床しく答えた。「わたし、お金を持っていないの。」

「それは駄目よ。ちゃんと払わなきゃ。何でもいいから払ってくださいな。」

客の手提げ袋に財布があるのがちらりと見えたから、かの女は「その財布でいいわよ」と言った。しかし客は拒んだ。「これは駄目。これはひとにはあげられない。」

そして、素直な笑みを浮かべながら、何かを取り出し、かの女に渡そうとしながら言った。「ケペン（穴開き古銭）があるけど、これでいい？」

かの女は即座にその申し出を受けた。「ええ、これでいいわよ。」

かの女の手にケペンが2百個載せられた。かの女は話題を変えた。

「お住まいはどこなの？」

「村役場の向かい。」

あとでかの女がそれを確かめるために村役場の前を通ったとき、村役場の向かいは川が流れていて建物など何ひとつなかった。

別れるとき、客はかの女に言った。「三日後にまた来ますから、メークアップしてくださいね。お寺で奉仕の仕事があるの。」

確かにその地区の大寺では、宗教催事の準備が盛んに行なわれていたのだ。

そして約束の三日後、かの女はその女性ウォンサマルがやってくるのを心待ちにしていたが、いつまで待っても現れず、閉店の時間が来たので店を閉めてそこからあまり遠くない自宅に帰った。

『あのひと、きっとわたしが誰かに正体を話したと思ったんだわ。夫か、あるいは店にいる見習いの子か・・・世間に言いふらされて見世物にされたら嫌だものね。仕方ないわね。』

すると突然電話がかかってきた。電話の主はその女性ウォンサマルだった。「奥さん、うちに来てわたしの化粧をしてくれますか？」

かの女は快諾した。夫はまだ帰宅していない。そして家の表でいきなり車の音がした。車から降りた運転手がかの女に、迎えに来たことを告げた。かの女はすぐに支度してそのBMWに乗り込む。車は走り出し、どこをどう通ったかわからないうちに、豪壮なお屋敷の前庭に滑り込んでいた。なんて素敵な家だろう。かの女はうっとりと眺めた。二階建てのモダンなデザインであるにもかかわらず、使われている建材は世の中で目にするものと大違い。扉の上にはボマの彫刻が載っているのだが、そこにはたくさんの貴石が散りばめら

れ、中でも屋根には緑色の翡翠が張られていた。翡翠を使えば屋内が涼しくなるのだそうだ。

屋内に入ると、女性ウォンサマルが大勢の女性使用人にかしづかれていた。どうやら、その女性ウォンサマルはこの世界でかなり偉い立場の人物であるようだ。かの女はその家で丁重に扱われ、ふたりの間に親交が生まれた。

それ以来、ふたりは互いに行き来しあい、さまざまな相談事を交わす間柄になり、強い信頼関係で結ばれた。ふたりはときどき、BMWに乗ってウォンサマルの世界をドライブしているそうだ。ウォンサマルがかの女にコンタクトしたいときはいつでもできるが、その逆方向は容易でない。

だから女性ウォンサマルはその解決策としてこの人間の親友に、異界に移動するための呪文を授けた。かの女はいつでもどこでも、親友の女性ウォンサマルに会いに行くことができる。もちろん、自分が姿を消すのだから、人目を憚らなければその秘密が知られてしまう。かの女はウォンサマルを友人に持っていることなど誰にも明かさない。本当に信用のできる数少ない人間を除いて。

そんな信用のできる人間のひとりが、自分も異界をこの目で見てみたい、と望んだ。かの女が女性ウォンサマルにその許しを求めたところ、にべもなく断られた。人間は、生まれながらにして特殊な能力を持っているひとと、そうでないひとがいる。あなたはその特殊な能力のおかげで異界に出入りすることができているのであり、そんな能力のないひとが異界にやってくると、人間界に戻るときに破滅することになる、というのがその解説だったそうだ。

インドネシアにも古代から神隠し現象が語り伝えられており、ジャワやバリでは異界の存在であるウォンサマルがこの世に棲む人間を異界に連れ去るという、日本の神隠しに良く似た概念になっている。しかし、実はもうひとつのパターンがあって、この世に棲む人間が普通の暮らしを営んでおり、本人には自覚が全然ないというのに、その者の生活の周辺にいるひとびとにはまったく声も姿も感知されず、世間がその者を行方不明になったと見なしている図式も存在している。

バリでは、神隠しのことをクバンムムディ(kebang memedi)と称する。クバンというのはカエンクバン(kaeng kebang)を略した表現で「隠す」ことを意味しており、つまりはムムディ隠しという日本語訳になる。日本人の八百万の神々の中にムムディあるいはウォンサマルのような存在も含まれているにちがいない。かれらが

人間を隠す目的は二種類あるそうだ。ひとつは特定の人間がかれらに好かれ、かれらが一緒に暮らしたいと望んで現世から連れ去るというもので、連れ去られた人間は異界の御殿で豪勢な暮らしを愉しむことができる。もうひとつは、その人間が気に入らないためにいじめたり、あるいはその者の家族を不安に陥れることを目的にしているもの。神隠しが起こるのは子供に多いが、大人にも、あるいは老人にも起こりうる。

神隠しにあったある村人の話によれば、野良で草刈をしていたときに見知らぬ者たちがとつぜんかれをかついで連れ去ったとのこと。そして綺麗な御殿に連れて行かれ、下にも置かぬもてなしを受けた。そしてある日、神隠しにあったかれを探していた親族が、家から近い谷間にひとりで途方に暮れているかれを発見したというのがその結末だ。ひとりの子供に起こった別の事件では、その子は普段と変わらない暮らしをし、毎日家で寝起きして学校へも通っていたが、家族や友人あるいは学校の先生たちもその子を見ることも声を聞くこともなく、世間では神隠しにあったと見なされていた。そしてある日、家族は家の裏手にあるバナナ畑で遊んでいるその子を発見したのである。

家族、中でも子供が神隠しにあうのを防ぎたいなら、上に挙げたような、人間が恐れを感じるような場所へ正午12時や夕方18時にひとりで行かないようにさせることが重要だ。正午12時は昼から夕への境目時、夕方18時は夕から夜への境目時にあたる。

もしも家族のだれかが神隠しにあったことがわかったら、ゴングや金属製の楽器を打ち鳴らしてやるとよい。金属製の鐘を鳴らすことができればもっと効果的だ。そういう楽器を持って、大勢で大きな音をたてながら村中を、中でも人間が恐れを感じる場所や、神隠しが起こった場所を中心にして練り歩くのだ。

大きな金属音を近くで鳴らされたウォンサマルは耳が破裂しそうな状態に苦しみ、それを止めさせようとして隠した人間を放すのだそうだ。

33歳のイ・クデルは、クバンムムディを体験した。かれはバンリのある村に住む農夫だが、バリの伝統的家屋建築の技師であるウンダギでもあり、その副業のおかげでかれはバリ島内のあちこちの場所のみならず島外の諸都市へも出向いており、世間の広い人間だ。かれの家系でウンダギになったのはかれが最初であり、かれの両親は農夫を専業にしていた。

かれの村にそういう変化が訪れたのは、時代のせいだろう。バリ島内の随所にバリ風建物の建築が増加

し、その勢いはバリ島外の諸都市にも吹き募ったのだ。かれと同世代の村の男たちは、ほとんどがウンダギになった。

１９９３年のある日、イ・クデルはバドンでバリスタイルの家屋を建築する仕事を行なっていた。かれは自分が得た知識と体験を元にして、身を粉にしながら働くのが常だ。仕事は順調に進展し、家屋は出来上がっていった。ガルガン(Galungan)祝祭日が近付いてきたため、かれはその仕事を急ピッチで終わらせ、祝祭を家で行なうために故郷へ帰った。バリの村人が故郷から外へ働きに出るというのは、かれらにとって祝祭のための資金を手に入れるのが主目的なのである。

バドゥンでの仕事の前に、かれはカランガスムで建物の建設を行なっていた。その仕事を完成させたあと、かれは報酬を全部もらわないうちにバドンで次の仕事に取り掛かったのだ。バドンでの仕事を終えて、オートバイで故郷への旅路についていたイ・クデルは、先にカランガスムへ回って未払いの金をもらってから家に帰ろうと考えた。そのほうがガルガンの祝祭資金が潤沢になって、恥をかくことなく円滑に祭りごとが行なえるに決まっている。

かれはバドンから一路カランガスムに向かい、未払い金のある注文主の家を訪れた。注文主は快く未払い金をイ・クデルに渡し、もてなしたあと、帰路を急ぐイ・クデルに別れを告げた。そのとき、注文主はイ・クデルに警告した。

「ここから西に向かって行く道の途中に、水田の中に水浴場があるが、そこに立ち寄らないようにしなさい。そこで水浴するなどもってのほかだよ。そこは急いで通り過ぎるのが一番だ。」

イ・クデルは故郷の村に向かってオートバイを走らせるうち、確かに注文主が言った通りの水浴場が見えてきた。ありきたりの水浴場だ。暑熱に炒られていたかれは、喉の渇きを満たしたいと思ってオートバイを止め、水浴場に向かった。透明な水が勢いよくほとばしっている出水口で手に水を汲み、ごくごくと喉を鳴らして飲んだ。その手でかれは自分の顔を洗い、心地よさに目を閉じた。そしてまた目を開いたとき、周囲にあった光景は一変していたのだ。

そこは集落のど真ん中だ。この辺りの地域にこのような集落があった記憶はない。道路や住居の並びは整然として掃除も行き届いており、きれいな草花で飾られ、これほど秩序だった場所はバリにも稀だとかれ

は思った。集落の中を歩き始めたイ・クデルは、もっとも豪壮な建物の存在に目を惹かれて、近寄って行った。ウンダギ根性がそうさせたにちがいない。「これがここの宮殿のようだ。見た目も美しく整っていて、また独特の建て方になっている。この建築技法をよく知りたいなあ。」

かれは宮殿の敷地内に足を踏み入れた。宮殿の使用人と見られる者がイ・クデルに応対した。宮殿の建物構成は通常の三区分をなしており、かれはそれがバリスタイルの設計であることを見て取った。使用人がイ・クデルに尋ねた。「あんたは何をするために、どこへ行こうとしているのか？」

「わしは仕事を探したいのですが。」

「ああ、だったらここで仕事しなさい。馬の飼育係が必要になっていた。」

馬小屋は宮殿の裏手にあり、イ・クデルは毎日馬の餌を集めて回る仕事をした。

その宮殿では毎日さまざまな活動が行なわれており、大勢のひとびとが集まってきたり、また帰っていったりという光景が展開されていた。毎日そこで暮らしていると、宮殿の主人を見かけることもある。そのとき、かれは北側の建物の南面する表テラスに座る白いあごひげの老人を目にした。老人が座ったのは椅子でなく、生きた亀だ。老人が座る前に、その亀は二本の前足をパタパタ打ち鳴らした。どうやらそれが習慣らしい。

イ・クデルは宮殿の他の使用人のように無駄話をせず、また興味津々とあれやこれやを他の者に尋ねることもせず、仕事に励んだ。かれの頭の中にあるのは自分の務めだけであり、自分の過去がどうだったのか、故郷はどこで家族はどうしているのか、というようなことはまったく脳裏に浮かばなかった。

かれが集める馬の餌とは、水田で黄色く色付いた稲なのだ。かれは鎌をふるって自由にそれを刈り集めたが、その水田がいったいだれのものなのか、まるでわからない。目の届く限り広がっている水田が一家族の所有であるとは考えにくいのがバリの農業だが、イ・クデルがどこへ行ってどの水田を刈ろうが、あちこちに姿の見える農夫のだれひとりとして、イ・クデルの行為に文句をつける者がいない。

毎日そうやって一心に働き、疲れ果てると食事の時間が来る。ところがかれに与えられる食事というのは、飯もなければおかずもなく、宮殿の庭に生えているミカンの木から採ってきた実を絞っただけの絞り汁でし

かないのだ。そんなものでありながら、それを飲んで眠れば、かれの身体にまた次の仕事のためのエネルギーが湧いてくる。

宮殿の中にはたくさんの鳥が飼われており、目も鮮やかに美しい色とりどりのチョウショウ鳩がたくさんいる。羽毛は輝いて、その鳴き声も姿も感嘆するほどの美しさだ。あるとき、鳥の世話係がイ・クデルに餌を採りに行くのでついてくるよう命じた。ふたりはパサルに行き、たくさんの商人が売り物を広げている中で、世話係がイ・クデルに「それを採れ」「あれを採って来い」と命じる。イ・クデルは不審に思いながらも、命じられたものを金も払わずに取った。ところが商人たちはだれひとり文句も言わず、イ・クデルが品物を持っていくがままにまかせている。宮殿のためだから、みんな文句を言わずに品物を提供しているのだとイ・クデルは考えた。もちろん、かれは鳥の餌を集める務めを果たしているのだから、自分のために何か他のものも持っていこうという考えなどさらさら湧かなかった。

そんなかれだが、宮殿の建築技法にはとても興味を抱いていた。デザインがアンティックなものなら、使われている素材までがアンティックだ。屋根は穴あき銅銭をひもでつなぎ合わせたものが使われ、巨大な建物の上部を覆っている。下から見ると、暗い緑色の平面が頭上を覆っていて、感動するほどの美しさだ。

ある日かれは、日課の稲刈りに行くため、道を歩いていた。すると向こうから故郷の幼馴染の男がやってきたではないか。イ・クデルはにこにこしながら近付いて行ったが、幼馴染はイ・クデルに見向きもしない。「あいつ、いったいいつからわしにこんな態度を取るようになったんだろう？わしに何か恨みでも持ったのかなあ。」イ・クデルはがっかりしながら、その幼馴染の後姿を見送った。

今度は別の日に、親族や兄弟たちがゴングを鳴らしながら通りを歩いているのに出くわした。道の脇に立ってイ・クデルはその一行が通り過ぎるのを見守ったが、かれらの中のだれひとりとしてイ・クデルに言葉をかけたり、近寄ったりする者がいない。かれは薄々ながら勘付いていた。「どうやら、みんなにはわしの姿が見えないようだ。わしは異界に入り込んでしまったらしい。わしにはあっちの世界が見えているのに、あっちからはこの異界がまったく見えないのだ。あのゴングはバンジャルのものを借りて鳴らしているのだろう。わしはあっちの世界でクバンムムディに陥ったと思われているんだ。」

宮殿の使用人となって働くこと七日、イ・クデルはついに自分の境遇を思い出し、その内容を理解した。か

れは宮殿の主に願い出た。ガルガンが近付いているので、自宅に帰りたい、と。

「そうか、家に帰りたいと言うのであれば、どうぞ。土産に何が欲しいかね？ウコンか、稲か、それとも何がよいか？」

「わしは稲が欲しいです。」

使用人が稲をひとつかみ、袋に入れてイ・クデルに渡した。稲は黄色く光り輝いている。宮殿の主の前を退出したイ・クデルに使用人が道を教えた。「家に戻りたいのであれば、この道をあっちの方角にまっすぐ行け。」

イ・クデルは馬小屋に戻って自分が住んでいた場所を片付け、自分の持ちものを手にして宮殿に別離を告げた。ところがなんと、かれが土産として主からもらった稲の袋を馬小屋の壁に置き忘れてしまったのだ。それをかれが持ち帰っていれば、どのような不思議が起こったかわからない。かれが持ち帰った品物の中には霊験あらたかな石の付いた指輪があり、それはかれが常に指にはめていたため無事に持ち帰ることができた。それだけが、イ・クデルが体験した物語を証明する唯一の品である。

かれが宮殿を去るとき、ふたりの使用人がかれを送ってくれた。右と左を使用人にはさまれて集落から外れた場所まで来ると、使用人はイ・クデルをそこに放して、元来た道を帰って行った。イ・クデルの身体から突然力が抜け、気が遠くなってかれは道端に崩れ落ちた。

イ・クデルの家に村人が走りこんできた。村への入口にあたる街道の道路脇に倒れているイ・クデルが見つかったという知らせだ。カランガスムとバンリを結ぶ街道の途中の水田の中にある水浴場でイ・クデルのオートバイが見つかり、それ以前のかれの足取りを知った家族は神隠しが起こったと判断してバンジャルからゴングを借り、かれを探し回っていたのだ。そのとき、みんなはイ・クデルに遭っていたのだが、それが判ったのは後日の話。

七日間、飯をまったく食べていなかったのだから、力などなくなって当然だ。そればかりか、知覚のほうもおぼつかないありさまで、あらゆる感覚があやふやで、記憶がはっきりせず、ここがどこで、いまはいつなのか、そういう認識力が欠けており、口を開いても出てくる音は言葉になっていなかった。

イ・クデルはしばらくの間養生し、体力を回復させ、イダ・プダンダに厄落としの業を請い、それが終わって、やっと思考と認識の能力が完全に回復した。その後かれは普通の村人に戻って暮らしているそうだ。

インドネシアでは、霊的存在をハントゥ(hantu)と呼ぶ。ジャワのハントゥ学によれば、ジャワ人という種族が発生したときから、かれらはハントゥの概念を持っていたそうだ。つまり、人間が棲んでいるこの世と、そしてこの世に密着しながら次元の異なる異界が存在しているということをかれらは知っていたということになる。ハントゥには、自然環境から生まれたもの、人間が生み出したもの、造物主に関わっているもの、などとその由来はさまざまにあり、また人間の味方をして助けてくれる善的存在と、人間を怖がらせ、虐待、し、搾取する悪的存在がいて、普通の人間には対抗できない能力を持っている邪悪なハントゥはジャワ人にとって恐怖の的だった。

ムムディはハントゥのひとつであり、ジャワ人は次のような邪悪なハントゥをムムディとして分類している。

グンドゥルウォ(gendruwo)、ウェウェ(wewe)、クママン(kemamang)、バナスパティ(banaspati)、テテカン(thethekan)、オンクレッコンクレッ(ongklek-ongklek)、ウェルウォッ(welwok)、ジュランコン(jrangkong)、グルンドゥンプリギス(glundhung pringis)、ウンブルモロル(umbel molor)、ルルパ(lelepah)、ランポル(lampor)、チッノノン(citnonong)、トントンソッ(thongthongsot)

神隠しにあって異界で暮らしたひとの話の中に、それらの邪悪なハントゥと出会ったストーリーが見当たらないので、住んでいる場所が違うということなのだろうか？それとも、かれらが人間界に現れるときだけ、そういう邪悪なハントゥと化すのだろうか？

「バビゲペッ」

ジャワの超常不可思議譚のひとつに babi ngepet というものがある。これは黒魔術の一種で、正道からはずれて生きる決心をした者がドゥクンからこの術を授けてもらい、夜な夜なバビ、つまり豚に変身して近隣の村々を徘徊しては他人の家から金を盗み出すという安易な稼業を行うようになるというもの。ところがきわめ

て用心深いこの盗人は、侵入した家に1万ルピア札が10枚あればせいぜい1～2枚しかくすねないので、盗まれたほうもいつまでも気付かなかったり、あるいはいつ盗まれたのかすらよくわからないケースがほとんど。

タンスの中に1万ルピア札を10枚へそくっていたのにいつのまにか8枚しか残っておらず、夫や子供がこのへそくりに気付いている気配はまったくないし、いつ自分が使ったんだろうかと一生懸命記憶の糸をたどりながらそれでも自分が使った記憶はなく、そのうちふっと口をついて出てくる言葉が「あっ、バビゲペッだ！」

盗人のほうも、突然羽振りがよくなって村役から疑いの目で見られたりしないよう、楽でつつましやかな稼ぎを細く長く続けていく方針を守っている。ところがいくら魔術で変身したとはいえ、悪魔の存在を感知することのできる能力に恵まれたひともいれば白魔術を身に付けたひともいて、いくらインドネシアだとはいえ民衆共同体の中でそう簡単に悪がはびこるようにはなっていない。うろついているバビに悪魔のにおいを嗅ぎ取ると、そんなひとびとは村の衆を誘ってただちに社会の敵に襲いかかっていく。しかしその場で叩ッ殺すようなことはせず、捕まえると耳を切り取ったり、足先を切断してから放してやるのだ。翌日になって、耳や足を最近失ったひとが見つかるとさあ一大事。お定まり、問答無用の集団リンチがかれを待ち受けている。

一方、黒魔術の側にもそんな危機を切り抜ける方策がある。かれが深夜バビに変身して稼ぎに出ると、かれの女房は灯油の明りをつけて炎をじっと見守るのである。風もないのに明りが大きく揺らめきだしたら、それは夫の身に危険が迫っていることを意味している。女房が急いで明りを吹き消すと、遠く離れた場所で村の衆に追いかけ回されていたバビの姿も、その瞬間ふっと闇の中に溶け込んだように見えなくなってしまう。

ジャワのどこへ行こうと行き当たるのはまず例外なくムスリムのカンポンであり、豚を飼っているところなどひとつもありはしない。そんなところで夜中にうろついている豚が見つかったら、耳や足をちょん切るどころか、その場で叩ッ殺されるのが相場ではないだろうか？「ならばこの話はいったい何なの？」と疑問を抱いたのはわたしだけではあるまい。この疑問を地元の物知りに問いただしたところ、バビとはバビフタン(babi hutan つまり猪)のことだよ、と教えてくれた。ジャワでも昔は夜になると猪がよく山から村に下りてきたそうで、だから村の中を夜中に猪がうろつくのはありふれた光景だったそうだ。だからこそバビゲペッはバビフタ

ンを隠れみのにすることができた、というのだ。

しかし何もわざわざムスリム住民が快く思わない猪を選ばなくとも、カンポンの中には猫でも鶏でもネズミでももっとありふれた動物がいるではないか。そんなありふれた動物に変身するほうが怪しまれる確率ははるかに減少するではないか、と理屈っぽいわたしは物知りを追及した。すると敵もさるもの、それに対する回答を持ち出してきたのである。つまりバビにしか変身できないという理由が用意されていたのだ。黒魔術が悪魔のものであるゆえんがそこにある、と地元ムスリム物知りは説明した。「アラーはバビ以外のものが悪魔の黒魔術に使われることをお許しにならなかったのだ。だから悪魔に魂を売り渡した者が変身できるのはバビに限られている。アラーの恵みと慈しみは無限大なのである。」

それはともあれ、ジャカルタのど真ん中に2006年10月、バビゲペッ騒動が持ち上がったのには驚かされた。

東ジャカルタ市クラマッジャティのチリリタンブサール村はジャゴラウィ自動車専用道路沿いの住宅密集地。2006年7月のある日、小型の猪が一頭村の中を徘徊しているのが見つかった。たちまち数人が追いかけて捕まえ、村の中で飯屋を営んでいるオヤジに売り渡した。その飯屋は普段から豚肉（猪肉？）料理を売っている。

10月のある夜、また猪が村の中をうろついていた。それを見つけた数人がまたそれを追いかけた。ところが猪は側溝にもぐりこみ、いきなり別の場所から出てきたりして巧みに逃げ回る。なかなか捕まらないのに業を煮やした村人のひとりが何気なく「こいつ、バビゲペッじゃねえのか？」と口にしたから、いきなり村中が「バビゲペッ出現！」の噂で沸き立った。噂というものはクリスタル現象を伴うものらしい。あっちの家でもこっちの家でも「ここ数ヶ月の間に何度か、家の中に置いてあったお金が突然見えなくなって・・・」という尾ひれが付いて広がったから、もうバビゲペッ間違いなし、ということになってしまった。そうして、追い掛けている連中までがその噂に呑まれた。夜遅くまで追い掛け回されたバビはとうとう人間に捕まり、若い衆がさんざんいたぶりまわしたあげく、村の中の広場にある木に縛り付けて見世物にする。半死半生の猪は逃げ出す気力もない。

バビゲペッが捕まったというニュースに村人たちが何百人も見物にやってきた。中にはぐったりしているバ

ビに近寄って足蹴にし、この泥棒野郎めが本性を表せ、と怒鳴りつける者もいる。女子供たちも猪を遠巻きにしての見物で、夜明けが来て黒魔術が解けバビが人間の姿に戻るのを今か今かと待ち受けている。こうして長い時間が過ぎたが、猪の姿はいつまでたっても人間に変わらない。猪はそのうちにだんだんと虫の息になってきた。近郷に住む超能力者が噂を聞いてやって来る。じっくりとバビを観察したあとで村役に言う。「こりゃあただの猪だべえ。バビゲペッじゃねえよ。」

待てど暮らせど変身は起こらず、そのうち一番鳥が鳴いて朝がやってきた。「なあんだ、変身しないじゃねえか。」見物人たちはぶつくさ言いながら三々五々帰っていく。人だかりがだいぶ減った6時過ぎ、クラマッジャティ警察署から警官がやってきて、姿を変えないために村人たちの人気を失ってしまった、この孕んでいるらしい雌猪をお縄にした。警察がすぐにやって来なかったのは、お楽しみを邪魔して群衆を怒り狂わせるとたいへんなことになるのを知っていたための自粛だろうが、ひょっとしてかれらもバビの変身を待っていたのかもしれない。署に連行してしばらくするとついに猪の息の根が止まる。数時間後、村の中で飯屋を営んでいるオヤジが警察署にやってきた。迷惑にもバビゲペッに間違えられ、群衆の見世物にされてはかない生涯を終えたその猪のなきがらは、その飯屋のオヤジが引き取って帰った。

（2006年11月20・27日　ジェイピープル「現代インドネシア1001景」に掲載）

「幽霊話の裏に何がある？」

スカルノハッタ空港敷地フェンスの外側に接しているバンダラマス住宅地。タングラン市スラパランジャヤ町のこの住宅地は空港関係者や航空会社従業員も買ったり借りたりして住んでいる。そんな仕事の関係上夜遅くまで人の出入りが多いため、町内の治安を預かる住宅地警備員も毎晩任務に就いていたが、ここ数ヶ月ほど警備員の姿が見えなくなってしまった。夜遅く帰宅する住人たちは警備員を「ご苦労さん」とねぎらうために蒸しピーナツや揚げ豆腐などを手土産にするのが習慣だったのに、見渡すかぎり警備員の姿はなく、仕方なしに手土産を持ち帰って夜食にしている。警備員たちの姿が見えなくなり、後を追うように二輪オ

ジェッたちもそれまでたむろしていた場所から姿を消した。いまやこの住宅地に夜遅く帰ってくれば、あたかもゴーストタウンの赴きを感じさせるようになっている。

昼間だけ警備員が警備してくれてもあまり意味はない。住民たちが調べたところ警備員たちは、幽霊が怖いから警備員詰所から離れていると事情を明かした。2007年1月25日、詰所近くの家に住んでいた独身で金持ちのムヒディン38歳が自宅で死体となって発見されたことはみんなが知っている。噂では、外貨投資詐欺に騙されて6億ルピアを失ったためにわが命を絶ったのだそうだ。それ以来警備員たちはムヒディンの家に近い詰所に入って十字路を通る通行人を監視する仕事を投げ出してしまった。かれらはそこから遠く離れた住宅地の端っこの詰所に集まって隅のほうを警備している。

「死んだ人間が生き返って出てくるってのかい？」住民のひとりが尋ねる。

「いや、そうじゃないんだけど、気持ち悪いんだよ。幽霊がいるみたいで。背筋がぞ～っと寒気がして、戦慄が全身を走る。ともかく気持ち悪いんだ。」警備員たちはそう答える。

住宅地の中にあるスチュワーデスたちの下宿は真夜中まで人の出入りが激しく、警備員たちも特にその地区だけは警戒を強くしていた。ところが幽霊騒ぎで警備員が町内の巡回をしなくなったためにそれまで厳しかった監視の目も消えてしまった。インドネシアでは、泥棒がある家に狙いをつけるとその家に幽霊が出るという噂を流す。するとその家の住人以外は怖がって夜その家の周辺からいなくなる。2002年9月に世間を騒がせたポンドッキンダの幽霊屋敷事件もその口だという話だ。その空家は係争中で、転売を防ぐためにそんな噂が流されたという。インドネシアで幽霊話は、幽霊たちさえ怖気づくワルの策略というケースが少なくないようだ。

（2007年3月26日　ジェイピープル< http://www.j-people.net >「現代インドネシア1001景」に掲載）

「トイレの怪」

ひと気のない寂しい場所に幽霊が棲み付くのは洋の東西を問わない。国民人口に比例して他の国より幽霊人口の多いインドネシアでは、大都会ジャカルタのビル内にもたくさんの幽霊が棲んでおり、幽霊話のタネは尽きない。

かわや幽霊というのは日本でも昔からいたようだが、ジャカルタのオフィスビル内トイレにも幽霊がいて、かれらは特に女性用トイレを好んで棲み家にしているようだ。それは幽霊が女性なので身の程をわきまえてそうしているのか、それとも身の程をわきまえない連中が異性に向けて楽しみを発散させているということなのか・・・・・・？

ジャカルタのオフィスで働く女性がひとり「冷房が効いているから近くなるわねえ」などと独り言を言いながら、ひんやりと寂しいトイレに入ってきた。ひとの気配はまったく感じられない。適当にブースの扉をあけて中に入り、態勢を整えて威勢良く放出しているとかなり遠くから同じような放出音が聞こえてきた。しかしかの女の意識はまだその状況に異状を覚えなかった。用足しが終わって水を流すと、こんどは隣のブースでも水を流している音が聞こえてきた。『あれっ、さっき入ってきたときにはだれもいなかったのに・・・』突然背中に冷水を浴びたように感じたかの女は、チェボッ[18]も忘れてそこから飛び出して行った。チェボッはインドネシア語で cebok と表記する。

中央ジャカルタ市スナヤンスポーツコンプレックスに近いあるオフィスビル８階の女性用トイレで起こったというその噂は瞬く間にそこで働くすべての女性の間に広まった。しかしお局様たちは「あらそんなの昔から有名な話よねえ」と平然としているそうだ。そんな噂を本気で怖がるひともいれば、半身に構えてにんまり笑うだけのインテリ娘もいる。『本当にいるなら一度体験してみたいものね』と普段からそんなことは気にしたこともないラッナはその日も用足しに８階のトイレに入った。ひんやり寂しいトイレはガランとしてひと気がない。ブースに入って「いざ・・」の態勢に入ったとき、並んでいるブースのどこかから音が聞こえてきたではないか。クールルル、クールルル・・・・・

[18] 水で洗浄すること

ラッナの首の産毛が逆立った。『出たっ、ホントにいたんだ！』しかしラッナの意識の一部はその状況を冷静に観察していた。『でもあれってひとの寝息みたい』。意を決したラッナはブースから出ると音のする場所を探した。怪しい物音の聞こえるブースの扉を叩くと、中で水を流す音がした。「はい、はい、ちょっと待って。もうすぐ出るから。」

中から出てきたのは他の事務所に勤めている女子社員だった。「あら～、あたしって寝ちゃったのねえ。もう疲れちゃって・・・・」寝不足を露骨に物語っている赤目をしたその女子社員は照れくさそうに、手を洗い、顔を洗い、そしてゆっくりと化粧をはじめたではないか。会社のトイレで昼寝をするその女子社員をラッナは昼日中お化けに出くわしたような目で眺めた。

（2009年3月16日　ジェイピープル< http://www.j-people.net >「現代インドネシア1001景」に掲載）

「幽霊はナシゴレンが好き～」

2010年2月はじめの月曜日の夜、マドゥラ出身のアドゥル25歳はいまや定職となった屋台を引いての食品調理販売に住宅地を回っていた。食品調理販売と言っても、屋台に備え付けたコンロの火に大鍋をかけて作るナシゴレンやミーゴレンがメインだから、ナシゴレン売りと称してもそれほど間違ってはいない。その夜もアドゥルは定常ルートになっているボゴール市内第2チパクインダ住宅地の中をビマ通りからアルジュナ通りに抜けようとして鍋をカチカチ鳴らしながら屋台を引いて進んでいた。時間はもう23時過ぎだが、夜中まで起きているブガダン(begadang)青少年たちがよく夜食を注文するから深夜でも売行きは悪くない。するとビマ通りの一番端の家の表で手招きしているひとの姿が目に映った。アドゥルが近付くと手招きしているのはパジャマ姿のまだ若い女で、おまけに美人だったから、アドゥルは心中快哉を叫んだ。インドネシアでは寝巻き姿で人前に出るのをみんなあまり気にしない。中にはうら若い女性がネグリジェ姿で表に出てくることもあるから、そんな光景に行き当たったら幸いなる哉というところだろう。さて、アドゥルはと言えば、かれの脳裏を疑念が横切った。この家は空き家だったはずだが・・・・

「お兄さん、ナシゴレンをひとつ作ってくださいな。」と鈴の鳴るような声で女は言う。愛想笑いか美人を前にしておもねったか、アドゥルは相好を崩して鸚鵡返し。「はいはい、ナシゴレンをひとつね。」そしてアドゥルは調理を始めながらその上品な女と世間話やら互いの身の上話やらをひとしきり。

「おねえさん、いつからこの家にいるの？」

「最近よ。」

「家の中は静かだけど、もうみんな寝たのかな？」

「そうだわ、電気を点けなきゃ。じゃあ、お金をいま払っとくわ。はい、これね。」

手渡されたのは合計6千ルピアになる二枚の紙幣。パジャマの女は家の中に入り、アドゥルはナシゴレンの仕上げにかかる。

そしてナシゴレンは出来上がり、皿に盛ったナシゴレンを届けようとしてアドゥルはその家の表門に向かった。ところがその表門の前でかれの足はすくんでしまった。電気の明かりなどどこにもない寒々とした空き家が真っ黒な塊のようにそこにたたずんでいるばかり。

「えっ、あれっ、こっこりゃあ・・・・・・」

女が渡した二枚の紙幣はそのときシリの葉に姿を変えた。うわあ～と腑抜けた声を出しながらアドゥルは屋台を引いて駆け出す。重い屋台を引いておよそ100メートルほど走ったところ、何が起こったのかと近隣住民が家の中から顔をのぞかせたから、アドゥルはやっと人心地がついた。

それからしばらくの間、アドゥルは巡回ルートを変えてビマ通りを避けた。ところがある夜、ふたたびアドゥルが屋台を引いてビマ通りにやってきたのである。どういう風の吹き回しなのだろうか？「昨日の夢にあの女が出てきたんだよ。『お兄さん、またナシゴレンを売りに来てよ』ってにっこり微笑まれたから、来ないわけにゃいかなくなってね・・・」

（2010年3月1日　ジェイピープル< http://www.j-people.net >「現代インドネシア1001景」に掲載）

「ジャワ島妖怪大全（１）」（2023年06月05日）

昔、han-tu という音節を逆転させると tu-han になるというジョークを耳にすることがしばしばあった。幽霊が逆立ちすると神になるというジョークはインドネシア人にしかわからないだろう。しかしレミ・シラド氏によれば tuhan はムラユ語の tuan から作られたものだそうで、サンスクリット語に由来する hantu とは縁もゆかりも持ち合わせていなかった。

サンスクリット語の hantu は Let's kill!の意味だそうだ。そんなことをされたら化けて出るのも当然の振舞いになるのではあるまいか。

日本語インドネシア語辞典には「幽霊」に対応するインドネシア語として hantu, makhluk halus, roh gentayangan が掲載されている。筆頭者としてハントゥを指名しておけば、まずあらかたの用は足せるにちがいあるまい。

ところが日本語「幽霊」の語義は１　死者のたましい。２　死後さまよっている霊魂。恨みや未練を訴えるために、この世に姿を現すとされるもの。となっていて、インドネシア語 hantu の意味とあまり正確に合致していない。KBBI[19]によれば hantu の語義は roh jahat (yang dianggap terdapat di tempat-tempat tertentu)[20]であり、これだと日本語「幽霊」の概念に含まれるものの一部を指しているだけのように思われる。

roh の定義は「生き物の体内に宿る生命」が第一義であり、第二義に makhluk hidup yang tidak berjasad tetapi berpikiran dan berperasaan (malaikat, jin, setan, dsb)[21]と記されており、どうも日本語の幽霊という語義はインドネシア語の roh gentayangan[22]のほうにより近いように思われるのである。

---

[19] Kamus Besar Bahasa Indonesia　日本語で言えば広辞苑か。

[20] 特定の場所に現れると膾炙されている悪霊

[21] 肉体を持たずかつ思考と感覚をもつ生き物（天使、魔神、悪など）

[22] 冥界の魂

makhluk halus は目に見えない生き物の意味であり、penampakan[23]が起きたときに幽霊と呼ばれる存在になる者がこの中に含まれているということになりそうだ。つまり幽霊の潜在性を持つ者を中に含んでいるカテゴリー名称になるのではないか？

この不可視生物カテゴリーにはアラジンの魔法のランプに住んでいる魔神も含まれるように思われるが、日本語で魔神・魔人と呼ばれているこのジンを幽霊と呼ぶ日本人はいないだろう。ところがインドネシア語では、ジンをハントゥと呼ぶ者がいるのだ。

インドネシアでハントゥと呼ばれている皆さんの姿を拝見していて、どうもこれは日本語の妖怪のほうに近いのではないかという気になってきた。日本語の妖怪の語義は広辞苑によれば、「人知では解明できない奇怪な現象または異様な物体。ばけもの」と解説され、ネット辞典サイトでは「人の理解を超えた不思議な現象や不気味な物体」と定義付けられている。

しかしハロルド・フォースター氏がジャワで聞き集めたプンティアナッなどの怪異をかれは英語で spirit あるいは ghost と書いていて、われわれを幽霊の概念に導いてくれるわけだが、その内容を見るとどうも日本語としては妖怪と呼ぶほうが妥当なのではないかという気になるのである。medi pocong, cumpelung, banaspati, lamphor, kemamang たちは幽霊と言うよりも妖怪なのではあるまいか。

Medi pocong	Banaspati/kemamang	Lamphor

それでふたたび日本語イ＿ア語辞典をひもとくと、妖怪に対応するインドネシア語として momok と hantu が記されていた。KBBIで momok は hantu (untuk menakut-nakuti anak)という語義になっていて、子供を怖

[23] 視認

がらせるためのハントゥという目的論的な言葉にされている。普通 momok という言葉は危害を加える得体のしれないものというニュアンスで使われることが多く、それこそ妖怪の語感にぴったりではないかと思わせてくれるので、わたしはこの辞典編纂者の見識の高さに脱帽したくなるのである。

ところがインドネシア語資料の中に medi pocong 以下を momok と呼んでいる文は見つからなかった。きっとこれは語義論理の問題でなくて言語感性の問題であるように感じられる。得体のしれない怖ろしいものは momok だが、pocong は形態が把握されるために得体がしれており、怖ろしいという面だけが一致しているので、対応させるのに難があるということなのではないだろうか。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（２）」（2023年06月06日）

ジャワ人が幽霊話を好むのは、そこに見られる人間の生と死およびこの世とあの世という宇宙観に影響されたものだとインドネシア大学インドネシア文学教官は語っている。かれによればジャワ的コンセプトにおける人間の死に二種類あり、善い死として老衰・神の道における死・出産時の産む者あるいは産まれる者の死などがあり、悪い死とは異常な死、つまり自殺死や他殺死あるいは事故死などだそうだ。

Gendurwo

ジャワの怪談の中のトップスターはグンドゥルウォのようだが、ジャワ人の認識している幽霊・妖怪は他にも wewe gombel, kuntilanak, cumplung, cerangkong, banaspati などたくさんいる。ジャワ人が描く妖怪はいったいどこからこんなにたくさん出てきたのかと思うくらいたくさんいて、驚くばかりだ。1896 年にファン・ヒン H.A. Van

Wewe gombel

Hien が著したジャワ人の霊的世界 De Javaansche geestenwereld という書物には95種類の makhluk halus が記されている。

スラバヤで発行されているジャワ語の週刊誌 Panjebar Semangat はブディウトモ創設者のドクトルストモが始めた、今では全国で第二の長命を誇っている週刊誌だ。当初は民族独立の意欲を鼓吹する目的に焦点が当てられたものの、独立して何十年も経てば雑誌のミッションは変化せざるを得ない。

この雑誌の人気コラムのひとつが Alaming Lelembut であり、文学者の中にはその長命の秘密がそのコラムの伝える怪談にあると断言するひともいる。この種の怪談を掲載するジャワ語雑誌は他にも Joko Lodang 誌[24]が

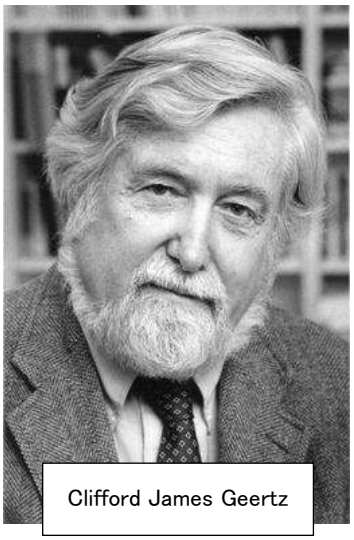
Jagating Lelembut、Joyo Boyo 誌が Cerita Misteri を好評連載していて、ジャワ人の神秘好みを反映しているように見える。

パニャバルスマ~ガッには、自殺死・事故死・殺害されたりレープされた結果の死では霊がこの世を彷徨うことになり、生きている人間の祈り、キアイのような宗教を極めた者あるいはドゥクン[25]がその彷徨いを救うことができると述べられている。

---

[24] DJ は旧綴りで現在は J になっている。ジャワ語には日本語の「あ」の音がなく「あ」と「お」の間の発音であるので O と A が混用されている。

[25] 心霊魔術師。


Clifford James Geertz

１950年代にモジョクトで調査を行ったインドネシアニストのクリフォード・ギアツは Abangan, Santri, Priayi, –Priayi dalam Masyarakat Jawa と題する論説の中で、ジャワの makhluk halus は memedi, lelembut, tuyul, demit, danyang の5種類に大別できると書いた。

ジャワ語の門の下で雨宿りしているわたしには、ギアツが何を基準にしてそのカテゴリー化を行ったのかがよく分からない。ジャワ語におけるそれらの意味を調べたところ、こんな具合になっていた。

dhemit	目に見えない一般的存在
memedi	恐怖を与える不可視的存在
lelembut	人間に憑りつく霊的存在
tuyul	富や財を人間に得させる超常的存在
dhanyang	特定の場所を守護する不可視的存在

もちろんそれらの語はすべてインドネシア語に摂り込まれていて、KBBIはインドネシア語としての語義をこのように示している。

demit[26] = dedemit: makhluk halus yang jahat dan suka mengganggu manusia, roh jahat emedi: makhluk halus, hantu lelembut: makhluk halus, hantu tuyul: makhluk halus yang konon berupa bocah berkepala gundul, dapat diperintah oleh orang yang memeliharanya untuk mencuri uang dsb danyang: hantu penjaga (rumah, pohon, dsb)[27]

ジャワ語では何となく整然と区分されているように思われる概念が、インドネシア語の語義に置き換えられると何が何やら分からなくなってくる。言語摂取の過程で起こる現象が多分こんなものなのだろう。

［ 続く ］

---

[26] 上の一覧表では dhemit と書かれている。これはジャワ語にはインドネシア語にない「た」と「だ」行の発音があるためである。

[27] Dedemit のこと。性悪で人間をたぶらかす霊のこと。悪霊、他人の現金を奪うため飼育された丸刈りにした髪の幼児に化身した化け物。家や樹木などの守護霊。

「ジャワ島妖怪大全（3）」（2023年06月07日）

Prof. Dr. Suwardi Endraswara

ガジャマダ大学教授のスワルディ・エンドラスワラ博士はジャワのハントゥを専門分野にしている。博士はジャワのハントゥを次のように分類した。

A　特定の場所・領域を支配する者

B　恐怖を与える者（ムムディ）

C　女が化けた者

D　人間に飼われる者（プレワガン）

E　動物に由来する危険な者

F　尊ばれる者

G　人間に憑りつく者（ルルンブッ）

クリフォード・ギアツの分類よりも細かくなっているようだ。ではそのそれぞれのカテゴリーに含まれるハントゥをご紹介していこう。

A　特定の場所・領域を支配する者

1.　dhanyang merkayangan

ある土地の発端となった霊。いつも僧侶や修道者のような白装束の姿で出現し、時には長衣で現れる。村や町を興した祖先の霊である場合は dhanyang semarabumi と呼ばれる。庭や広場などの空いている土地が平穏無事であるように守護している。かれらの暮らしは人間と同じようなもので、時に祝祭を行ってワヤンを催したりする。

上級に位置するダニャンは明白なテリトリーを持っていて、その領域に住む人間は必ず供物を捧げることになっている。ジャワ人がスラマタンを行うとき、決してダニャンへの供物を忘れてはな

らない。それを怠るのは論外で、供物の質や量が気に入らない場合ですらダニャンは憤懣を住民に向けて来るし、自分を尊敬しない者には攻撃的になる。供物をおろそかにすると、祝祭を行っていた者が突然病気になり、うわごとを言い出すような現象が起こりかねない。

ダニャンの性格は土地土地で違っているが、共通して言えるのは土地の慣習が維持されるのを好むことだ。献じる供物の内容にせよ、スタイルや方法などにせよ、昔から行われてきた慣習を変えるのはよくない。そして尊敬の念を欠かさないようにするのが、ダニャンのいる暮らしに波風を立てない方策になる。

2　kajiman

古い家屋に住み着くのがカジマンだ。家を空き家にしたり廃屋にしたりすると、カジマンの棲み処になる。特に周囲が淋しい環境で家の中が暑苦しいと、カジマンにとっては願ったりの棲み処になる。カジマンをジンと呼ぶひとも少なくない。

3　siluman

自分を人間や動物の姿にコピーして人間界に出現するのがシルマンだ。そのシルマンの性質が獰猛であると、コピーされた人間や動物も獰猛になると言われている。シルマンが他人の姿をしてどこかで悪さをしたあと姿を消し、コピーされた人間が罪を着せられるということも起こる。川にいる大きな魚を捕まえようと網をかけ、いざ引っ張り上げたら魚の姿が消え失せたということも起こる。

シルマンが住んでいる場所は水気のあるところだ。湿地・池・海岸・木・・・。王宮の大奥の水浴場などにはたいていシルマンが住んでいる。ラトゥキドゥル[28]は南海岸をテリトリーにするシルマン

[28] Ratu Kidul = Nyai Roro Kidul　詳しくはこちらを

であり、アンバラワのラワプニンはサルパバンサ[29]というシルマンのテリトリーだ。クロンプロゴ[30]のムノレ地方にあるチュレレン水浴場はニロレンパティが住んでいて、水浴場の水を守り、また環境と風紀を維持することを務めにしている。水浴に来た人間の振舞いがニロレンパティを怒らせると、このシルマンはその者を水中に引きずり込むと言われている。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（４）」（２０２３年０６月０８日）

ヨグヤカルタのムラピ山[31]にもシルマンが棲んでおり、かれらはときおり南海の王宮に伺候して親睦を深めている。かれらが南海に向かうときは、ジョグジャの町を二分しているチョデ川を通ってスレマンに抜けてから、バントゥル県のオパッ川を通ってパラントリティス[32]に至る。そして海岸に到達した一団は各自が思い思いの方向に散らばるのだそうだ。

シルマンたちは人間と似たような社会生活を営んでいて、地方の王が上位の王に挨拶に伺うことをし、そのときは王者としての威厳を示すために多数の騎馬軍勢を引き連れて川の流れの上を進む。それを迎えた上位シルマンの王宮では、ガムランの響きに伴われて美しい娘たちが舞いを舞う。そのガムランの響きは、はるかかなたから心地よい響きを人間の耳に届かせる。人間はそのどこから聞こえてくるのかわからない楽の音に不思議の思いを抱くのである。

王宮での宴や会談が熱を帯びてくると、海岸の波が騒ぎ始める。場の空気がもっと高まると、かれらの集いの場で空気が爆発する。そのとき地上では大地が揺れる。人間はそれを地震と呼んだ。

---

[29] Ambarawa, rawa pening,

[30] Kulon Progo

[31] ヨグヤカルタ北北東約 30km にそびえる火山。

[32] 高名なパワースポット

シルマン世界の相談事はたいていが人間や動物のふるまい、あるいはかれら以外の妖怪どもが行う不埒な行為に関するものだそうだ。そのいずれであれ、許容できないという結論に達すると、シルマン側からの反撃が開始される。

4　bekasakan

ブカサカンは粗野な乱暴者で、巨木がたくさん生えているうっそうたるジャングルに住んでいる。姿を現すときは、巨大な真っ黒い影になる。

5　kebleg

台所によくいるハントゥで、夕方になるとブルッブルッブルッという音を出すため、クブルッと名付けられた。姿は雄鶏によく似ていて、幼児を怖がらせる。時には料理人と仲良くなることもある。これは音の妖怪であり、夜中に台所からクブルッが出す音が聞こえると一家中が寝床で震えあがることも稀でなかった。

人間に対して強い害意を持っているわけではなく、人間が親しもうとすればクブルッもその相手に善意を向ける。しかし人間が毛嫌いして優しくない仕打ちをすれば相手も反発してくるのが当然だ。

台所の中のクブルッの根拠地はかまどであり、かまどで燃やされる薪の火を操るのがクブルッの第一の仕事だ。クブルッは薪の火が燃え上がるのを嫌うので、かまどで炎を燃え立たせてはいけない。また、火の燃えているかまどを背にして立つ人間をクブルッは嫌う。そんな人間の背にクブルッはしばしば炎を吹きかけたりする。

B　恐怖を与える者

1　genderuwo

グンドゥルウォは赤黒い肌の大男だ。ジャワ式正装をして姿を表わすこともあるが、少し頭が弱いために手入れなしのぼさぼさ頭にいいかげんな服の着方をして出て来ることもある。人間の女とセックスすることに目がなく、激しい性欲を持っていて、その機会に立ち至ればグンドゥルウォは精力絶倫のふるまいをする。

ジャワ人はグンドゥルウォを好色ジンと呼んでいる。家の中にいる淋しい主婦がグンドゥルウォの好むターゲットだとよく言われるが、若い生娘が女性の姿と香りを発散させていれば、黙って傍を通り過ぎるような性格を持ち合わせているわけでもない。

ハビタット[33]は巨木のたくさん生えているジャングルで、夜はしばしば人里近い寂しい場所にある巨木や、あるいは水が流れる大岩などの周辺を徘徊する。姿を隠したグンドゥルウォからはかぐわしい香りとそよ風が流れて来るので、夜中に突然そんな現象が起こると警戒しなければならない。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（5）」（2023年06月09日）

グンドゥルウォはウェウェの夫であり、かれら夫婦は遺体の埋葬が不完全だった死者の霊魂から生まれたとされている。墓地から近い家の扉が夜中にノックされたり、人が通りかかると風もないのに背高い木が大きく揺れたりすることがある。そんなことが起こったら、新しい墓でアルクルアンを読んでやって霊を鎮まらせることが行われる。

[33] 生息地

自殺者の霊がよくグンドゥルウォになると言われており、首つり自殺をすると、男はグンドゥルウォ、女はウェウェあるいはプリになるそうだ。

グンドゥルウォは小さい子供の母親に狙いを付けることが多い。あるいは小さい子供をさらってジャングルの中に連れ去ることもする。それはウェウェやプリの行動と同じだ。グンドゥルウォが淋しい女を狙うように、ウェウェやプリも淋しい男を狙う。

グンドゥルウォは好色な上にいたずらが大好きで、ふたりだけでいちゃついているカップルがあると、その男の方になりすまして女といちゃついたりする。ところが間の外れたタイミングで声を出したり、おかしな振舞いをしたりするから、女はびっくりして逃げ帰ってしまう。

結婚初夜のカップルが一晩中かかってもセイコーしなかったというケースはグンドゥルウォが邪魔をしたためだという話もある。結婚する者はお祈りをしっかりと行わなければならないという戒めのようだ。

2　wewe

ウェウェはグンドゥルウォの妻だ。小さい子供を抱いて暗く寂しい場所に現れる。かの女はしばしば、ムスリマが礼拝の際に着るルクのような白く長い服をまとって現れることもある。夕方ひとりで歩いている子供をさらうウェウェは wewe putih あるいは wewe gombel とも呼ばれる。

3　kemamang

火の妖怪であるクママンは特定の場所に出現する。その火は1キロくらい先から見える。ところが火のある場所に近付くと、火はやってきた人間の前後左右で現れたり消えたりする。その人間が目的の家にたどり着くころには、火は姿を消してしまう。

4　banaspati

燃え続ける火が頭になっているラッササがバナスパティだ。動く時には足が上頭が下の体勢で、手を使って素早く動く。バナスパティに出会った者は、火から逃れようとしてすぐに逃げ出す。

5　thethekan

テテカンの身体は小型のラッササで頭が猿になっている。夜中に木の下を通る人間を怖がらせるために木の上でタンブルやクントガンを鳴らしたり、通る人間の前や後に木片や枝を落としたりする。

6　ongklek-ongklek

オンクレオンクレは墓地に近い木に住むハントゥで、ひとが通ると幹がクレックレックレッと音を立てるほどその木を大きく揺らす。木でなくて竹だったりすると、竹の先が地面に付くくらい倒しては戻すことをする。

7　welwok

川で溺れたり、猫いらずを飲んだり、殺害されるような不自然な死に方をした妊婦の霊魂がウェルウォッになる。この霊は復讐を願望にしているから危険だ。たいてい半裸で、身に着けているものも汚れており、うすぎたない女の姿をしている。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（6）」（2023年06月12日）

8　　jrangkong

闇の中を徘徊する骸骨がジュランコン。子供を殺された親が姿を変えたものと言われていて、子供や孫にその姿を一瞬だけ見せる。寝ている者を起こして怖がらせたり、点っている電灯を消して部屋の中を徘徊したりする。

9　　glundhung pringis

グルンドゥンプリギスは頭があって胴がなく、腸がしっぽになっているハントゥだ。顔の付いている禿げ頭がヤシの実のように転がるのである。この怪異を目にした者はびっくり仰天して叫び声をあげる。気丈でなければ精神や体調がおかしくなるだろう。しかしグルンドゥンプリギスは人間を驚かせて喜んでいるだけなのだが。

10　　umbel molor

夜に現れるハントゥで、こどもを怖がらせるのを好む。ウンブルモロルはただ鼻から汚物を出すだけなので、大人はたいして怖がらないのかもしれない。しかし追い払おうとすると向かって来るので、安易に手を出さないほうがよい。

11　　lelepah

ルルパはやせてのっぽのハントゥ。魚を生で食べることを好むから、Lelepah pakanane iwak mentah.という諺ができた。ところがジャワ語のiwak は魚と肉を意味しているから、このことわざは生肉・生魚と理解されるのが普通であり、生肉・生魚を食べるやつはルルパだから人間はそれらを食べるなという教えに使われた。ジャワ人が祝祭を行うとき、諸霊に捧げる供物の中に生肉のコマ切れが必ず入っている。

12　lampor

夜中に遠くの場所で大勢が火を灯して歩いているのを見ることがある。大勢の者はまるで整列行進しているみたいだ。火は一瞬間消えて、そしてまた点く。そんな点滅が繰り返される。ところがそれを追いかけて近くまで行くと、だれもおらず、火も見えない。ハントゥの兵隊がやっていることだと言われている。

13　citnonong

頭が突き出ているトゥユルのような姿のハントゥで、見るからに悪相をしている。チッノノンは働いている人間にちょっかいを仕掛けて邪魔をする。

14　thongthongsot

身体は人間、頭は動物という姿をしている。悪人のお偉いさんを痛めつけることを好む。汚職者や圧制者が夜に仕事していると、座っている椅子がユサユサ揺れることがある。あるいは、だれが撒いたかわからないトゲが椅子にばらまかれていたりする。それらはトントンソッのしわざだ。

C　女が化けた者

1　wedhon

白一色に身を包んだ女のハントゥで、汽車にはねられたりバスにひかれたり木から落ちたりといった自然でない死のためにハントゥになったとされている。通行人にちょっかいを出すのを好むために十字路にいることが多い。寂しい時間に通行人がやってくると姿を現わしてピョンピョン飛び跳ねるから通行人は肝をつぶす。ウェドンが通行人を怖がらせたいからそうしているのか、それともその通行人に興味を持ったから姿を現わすのかということについては、後者のほうだという意見もある。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（7）」（2023年06月13日）

2　　pocong

ポチョンも、虐待されたり堕胎したり首を吊ったりといった自然でない死のためにハントゥになった女の霊だそうだ。だからウェドンと似た者ではあるが、たいてい墓地の周辺にいる。かの女はイスラム式埋葬のための白いカファン布を巻かれた姿で墓の外を歩く。その辺りを通りかかる人間の前に姿を現わして、一緒について行きたいそぶりを示す。

3　　kuntilanak

妊娠中に死亡し、胎児も助からなかった女がハントゥになったものがクンティルアナッだと信じられている。出産時に母子ともに亡くなったケースも含まれる。不義の子を孕み、その出産時に死亡した女はまちがいなくクンティルアナッになると言われている。そんなケースの中には、不義密通の結果できた子を堕胎しようとして亡くなった者もいるにちがいあるまい。

クンティルアナッになり得る状況下に死去した女性の指・ひざ・ひじを針で突いておくのがクンティルアナッにしないための方法だそうだ。妊婦がクンティルアナッに襲われないようにするには、川や水浴場で水浴や用足しをする際に釘・ナイフ・かんざしなどの尖ったものを持っていくとよいとも言われている。

4　sundel bolong

スンデルボロンは一瞬だけ女の姿を垣間見させて消える。身体の一部に穴が開いているが、穴の位置は背中・腹・目・下腹部などいろいろに変化する。身体の一部をつかむと、そこに穴が開くそうだ。このハントゥは殺された娼婦の霊に由来していて、男を性的に誘惑することだけを生きがいにしている。

5　peri

男に失望させられた美女の霊がプリで、特にその男に殺されたりした場合には必ずプリになる。悪い男への復讐の念を強く持っていて、その男が憧れる美女の姿になって誘惑し、男の首を絞めて殺す。それが終わると、カラカラと大声で哄笑するのがプリの特徴だ。プリは都会の喧騒から離れた静かな土地で暮らしており、しばしば美しい天女の姿で現れる。ハンサムな男に恋をすることもあるそうだ。

D　人間に飼われる者

人間に飼われて人間の手伝いをするハントゥを perewangan と言う。たいてい不自然な死に方をした霊がこれになる。プレワガンを飼いたい人間はハントゥとの交信能力を持つドゥクンに注文する。しかし時にはプレワガンの方から特定の人間にコンタクトしてきて、その人間を助け、それが終わると姿を消すようなこともある。この種のケースでは、プレワガンは人間と何も契約をせず、純粋に人助けを行うことだけを目的にしている例がたくさん見られる。

プレワガンを飼う人間は医療ドゥクンやプスギハン目当ての者が多い。医療ドゥクンが病人を治療するとき、プレワガンがドゥクンに乗り移るのである。

　プスギハンで人間を助けるのはたいてい悪いハントゥだ。プスギハンとは超常パワーを使って金持ちになることを意味している。プスギハンのためのプレワガンは飼い主が約束を厳格に守っているかぎり、たいへん飼い主に従順で忠実な存在になる。

1　　dhenok dheblong

　ドゥノッ・ドゥブロンは子供の姿のハントゥで、医療ドゥクンを助ける。昔カルタスラ[34]に女性のドゥクンプレワガンがいた。この女性は子供を産んでまだ授乳期にあったある日、赤ちゃんがいなくなった。探したが行方が知れない。しばらく経ったスラサクリウォンの夜に突然子供が現れた。自分は赤ちゃんのときにいなくなった子供であり、母親を助けるために戻って来たと言う。母親は医療ドゥクンになってありとあらゆる病気を治した。腹部の手術までしたが、メスも使わず血も一滴も流れなかったそうだ。母親が医療を行うとき、その子供が母親に乗り移るという話だ。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（８）」（2023年06月14日）

2　　setan gundhul

　坊主頭で小人の姿をしているのがセタングンドゥル。肌の色は赤っぽく、目つきが鋭くて恐ろしげ。特技はトゥユルやブトイジョと同じだが、トゥユルが他人の金を少しずつ盗むのに対してセタングンドゥルは丸ごと、しかも金が入っている入れ物ごと盗んでくる。

3　　thuyul

[34] 中部ジャワスラカルタ市南西方向にある旧都。この町はマタラム王家がヨグヤカルタとスラカルタに分裂する前の王都だった。いまは見る影もない。

トゥユルは小人の子供の姿をしているが、子供のジンではない。男児も女児もいて、身長は50～80センチくらい。肌の色は赤っぽい茶色で人間の赤児のようだ。頭は坊主頭になっている。さまざまなハントゥがいる中で、トゥユルはおとなしくて飼い主に従順な種である。内心で人間を怖がる面を持っていて、特にトゥユルのことに詳しい人間には頭が上がらない。しかし自分への待遇が悪いと怒ることもある。

特技は他人の金銭や有価証券、高価な品物などを盗むこと。特に金銭は、持ち主が減っていることに気付かないように少しずつ盗む。家から家を巡って盗みの仕事をしてこいと飼い主はトゥユルに命じる。プスギハンに狂ったジャワ人はトゥユルを数人飼って、毎日目標金額を与えて盗みに行かせるという話だ。

しかしジャワ人社会でトゥユルを飼っている人間を見つけ出すのは容易でない。ひょっとしたら隣の家が飼っているかもしれないではないか。しかし飼っていることが世の中にばれたら世間からつまはじきされるに決まっているから、飼い主はそれを極秘にする。盗んだ金が手に入っていることをカモフラージュするために、表向きは何かの商売を本業として世間に示している。そしていざ金持ちになったらトゥユルを飼うのをやめる。そのあとは手に入れた資産を回転させて食っていればよいということになる。

祝祭やスラマタンを行った家には、客の寄付が集まる。それがトゥユルのターゲットになる。宴が終わってその家の主人が寄付金を数える前に、トゥユルは寄付金入れの籠から現金を少しばかりつまみ出すのである。そうなると、家の主人はトゥユルにかすめ取られたことすら判らない。

普段の仕事でも、金銭がどこに置かれているか、他人に取られないようにどんなに厳重に保管されているか、といったことがその家に入ったトゥユルの障害になることはない。トゥユルが金を盗んでいることを知った家の主が、トゥユルが来るのを待ち受けて痛めつけようとすると、トゥユルも

怒る。と言っても立ち回りが起こるわけではない。トゥユルはその場から逃げるだけだ。そして別の日に、残っていたその家の金を根こそぎ盗むのである。

トゥユルを飼うときは、霊への供物が絶対に必要になる。何を供物にするかは飼い主とトゥユルが交渉して決める。加えて、トゥユルは待遇に関する要求をすることもある。それらの約束をきちんと果たさないと、トゥユルは飼い主の指図を聞いてくれなくなる。そして最終的にトゥユルは飼い主のもとから逃げだしてしまう。トゥユルの不満が恨みにまで達すれば、飼い主に危険が降りかかるおそれもある。

4　buta ijo

ブトイジョもプスギハンのために使われる。姿はその名前の通りの緑色をした巨人であり、見るからに恐怖をかきたてる。トゥユルは少額の金を集めるが、ブトイジョは大金をごっそり盗んでくるから、飼い主はいきなり大金持ちになる。

ブトイジョを飼う方法はトゥユルと大差ないものの、ブトイジョはたいていトゥンバルを要求する。トゥンバルとは成功を得るために犠牲にされるものを意味しており、飼い主にとって大切な者の生命がトゥンバルに要求されることもある。ブトイジョへの毎日の供物は欠かせない。ブトイジョを傷つけたりすると、ブトイジョは暴れて無差別な攻撃をしてくるからたいへん危険だ。

ティラカッを行ってブトイジョを呼び出すこともできる。ティラカッとは禁欲の行を意味し、日常生活における欲求を抑えて瞑想にふけったり、また人のいない場所に閉じこもって瞑想するような行を指している。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（９）」（2023年06月15日）

5　menthek

メンテッは子供の姿の妖怪で、水田を棲み処にしている。イナゴを食べるのが好きだ。日没直前に姿を現わすため、田んぼ仕事に出た農夫が夜まで帰ってこないと、メンテッに悪さをされたのではないかとみんなが心配した。

メンテッは水田の稲がみのると籾粒を別の田の稲に移す力を持っている。それをされると稔った稲は籾粒のないものばかりになり、収穫は失敗する。そのためにジャワ人が水田の稲刈りを行うとき、必ずウィウィッを行う。ウィウィッはデウィスリに捧げる供物を水田の真ん中に置いて、みんなでそれを取り合う伝統行事だ。そうすることでメンテッの害を防ぐことができる。

E　動物に由来する危険な者

1　bulus putih

威嚇的な大型のスッポンがブルスプティだ。しばしば、水源の守り神になっているハントゥである。水源で水遊びをしたり小便をかけたりするとブルスプティに襲われる。もしもブルスプティに噛まれたなら、人間は死ぬ。

2　kutuk lamur

ikan kutuk は雷魚の一種であり、ikan gabus とも呼ばれている。川で夜釣りをしていると超巨大なクトゥッ魚が出現して驚かされることがある。それはハントゥなのだ。

3　truna lele

巨大なナマズのハントゥ。トルナレレは水中の大岩に棲んでいて、そこに人間がナマズを取りにやってくると姿を現わして怖がらせる。このハントゥを怒らせると人間を攻撃し、毒針を刺して殺す。

4　tengis

巨大な川ガニの姿をしている。夜に出てきて、人間が近くを通ると~ギス~ギスという音を出すのでトゥ~ギスと名付けられた。この妖怪は音で人間を惑乱させるだけ。近くに悪事を企てている者がいると、~ギス~ギスという音は一層強くなる。

5　babi ngepet

ブタの姿をしたハントゥで、プスギハンに使われる。バビ~ゲペッを飼うと、だれでも突然大金持ちになる。金を持っているのにまだ全額をはっきり知らない人間が往々にしてターゲットにされるし、あるいは隣近所で祝祭があると、夜はたいていバビ~ゲペッが町内を徘徊する。ターゲットになった家の裏扉から屋内に侵入するのがいつもの手口で、そのときしっぽを裏の壁にこすりつけると、その家のひとびとは突然睡魔に襲われて眠ってしまう。そうしてからバビ~ゲペッは誰にも見とがめられずに悠々と仕事をして引き上げるのである。[35]

[35] 伝承によると babi ngepet から現金を守るためにはクリップやホチキスで紙幣をとめるのが良いとのこと。だからプラスチック製の紙幣がすぐに使われなくなってしまったのだろう。

6　　jaran panoleh

後ろを振り返っている馬の姿をしたハントゥ。プスギハンのために飼う者がいるが、本物の馬でなくて馬の置物の場合もある。早く金持ちになれるように、馬に香を焚いて願をかけるというわけだ。このハントゥは商人が持つのにふさわしいものである。

7　　klabang sayuta

クラバンはムカデ、ジャワ語のユタはインドネシア語の juta の意味で、この言葉は百万匹のムカデを意味する。飼い主は攻撃的な百万匹のムカデを神秘的な方法で飼っている。それは同じような効能を持つ Candhabirawa や bala sewu の護符を祭るのと類似の方法で行われる。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（10）」（2023年06月16日）

チョンドビロウォもボロセウも敵を倒すための秘術であり、その点で百万匹のムカデとよく似ている。チョンドビロウォは自分の身体が敵に斬られると身体が二つに分かれて二人の自分になる。斬られるたびに倍増して行き、最後に大勢の自分が敵のとどめを刺すのである。ボロセウは千人の兵士を意味しており、この術を使って兵士を大勢出し、敵を倒す。クラバンサユタも数えきれないほどたくさんのムカデを出して敵にばらまき、敵を降参させる。

しかし都市生活においては武器を手にしての闘争の機会がないため、他人の所有物を奪うための使用がメインになる。自分の欲しいものを持っている相手を降参させてそれを差し出させるのだ。このハントゥは人命のトゥンバルを毎年要求するために、飼う者にとっての難しさがある。

8　srenggara nyarap

これは獰猛な犬のハントゥだ。広い家の番犬、更には家に置いてある財産や宝物の番犬に適している。入った泥棒は猛犬に怖気づいて逃げ出すだろう。ところが逃げないで犬を追い払おうとすると、泥棒はスルンガラニャラップに噛み殺される。

9　burung tuhu/burung kholik

静かな夜更けにトゥフトゥフトゥフと鳴く。何度かそれを繰り返し、その合間にホリッホリッホリッという鳴き声をはさむ。それを聞くと、ひとは不吉な予兆を感じ取る。その夜に何か悪いことが起こる徴候だと考えるのである。

ジャワ語の tuhu は「間違いなく何かが実現する」を意味し、kholik は造物主を指している。ジャワ人はその鳴き声から、造物主が何かを実現させて人間に示そうとしていると解釈するようだ。

10　burung gagak

日本人はこの鳥をカラスと呼んでいる。ガガッ鳥は昼間からカオッカオッカオッと鳴く。ジャワ人はそれを、死ぬ人間が出ることをハントゥが教えていると解釈した。昔この鳥は墓を足でひっかいて暴き、埋められていた人間の遺体をついばむ姿を見せることがしばしばあった。

11　angkup

夜中に聞こえるピョン　ピョン　ピョンという音がアンクップと呼ばれている。それは生き物が出している音とされていて、ジャワ人の間で一般的にアンクップと呼ばれているナンカの樹の実が熟すときに出す音とは別ものだ。

この不思議な音に関しても、その界隈に何か良くないことが起こるのを知らせているものと解釈するジャワ人が多い。このアンクップの音が聞こえたら、遅かれ早かれどこかで変死体が見つかるだろうと言われている。

12　gemak melung

鳥の鳴き声のハントゥがこのグマッムルンだ。その鳴き声はだれか人間が怖がり始めるまで続けられる。そしてだれかが怖がると、鳴き声はますます大きくなる。鳴き声のする木の上で小鳥が飛び交っていれば、その声がグマッムルンであることに間違いない。

13　codhot ngising

コウモリの姿をしていて、通りかかる人間の近くを矢のように飛んで驚かす。また留まっている木を揺さぶったり、上から糞を落としたりする。そして怖ろし気な声で鳴き、人間を怖がらせようとする。それでも通行人が怖がる様子を見せないと、コウモリの数が増えて通行人の周囲を飛び交い、果実を上から落としたりする。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（１１）」（2023年06月19日）

14　balung kokan

バルンコカンは猫や犬のような姿をしている妖怪で、人間の周りを走り回って怖がらせようとする。しかし捕まえようとすればすぐに捕まるし、人間を噛もうともしない。人間に馴れるから飼うこともできる。しかし妖怪を飼うのだから、住む家がその雰囲気を帯びるのは当然の帰結だ。ましてやその動物を虐待したり殺したりすれば、その家は呪われた家になりかねない。夜中に赤児の泣き声が聞こえたり、埋葬された人間の骨が家の周囲に散らばっていたりするような家に。

15　kicir

チルルル・・と夜中に奇妙な音を長く響かせるハントゥがキチルだ。夜中に巨木のある淋しい場所を通りかかると、そこにキチルがいて音を出す。通行人がその場所を通り過ぎても、音だけはその後を追ってくる。通行人がまったく怖がらずに無視していると、小石を投げてその者の目の前に落としたりする。キチルは人間を害しようとしているのでなく、単に怖がらせているだけなのだ。

F　尊ばれる者

1　jalangkung

ジャランクンは人間が作ったハントゥと言える。人間がバナナの花を使って人の形に飾りつけたものにルルンブッが入るとジャランクンになる。そのため、この人の形をしたものは人間の欲求を感知し、人間が尋ねることの答えを紙に書く。

ジャランクンの人形は竹の胴とヤシの実の殻の頭でも作られる。ルルンブッをジャランクンに入らせるためにちょっとした儀式が必要になる。ルルンブッがジャランクンに入れば、この人形は人間が出すあらゆる質問の答えを紙に書いてくれる。

2　thothokkerot

トトックロッという名称よりもニニ・トウォッあるいはニニ・トウォンの方が通りが良いだろう。トトッというのは柄杓にするヤシの実の殻を指していて、柄杓に服を着せて人形にしたものだ。その人

形をどこかに捨てると、ルルンブッが住み着く。そして近くを通る人間にちょっかいを出す。夜に泉に水を汲みに来る女性が第一ターゲットにされる。

Nini Towong

ニニ・トウォンにルルンブッを呼び込むために、儀式が行われる。その儀式は古いジャワの遊戯の形式を執り、死者の霊をそこに呼ぶのである。その儀式は聖人と見られているドゥクンによって、不気味な雰囲気の場所で行われる。その場所では地面にござが敷かれ、その上に供物がたくさん置かれる。

ドゥクンはまず香を焚いて呪文を唱える。ニニ・トウォン人形は先にざるの上に座らせてあったのが、ルルンブッが入るとくずおれる。それをまた元通りに座らせようとすると重くなっていることがわかる。そのあとはニニ・トウォンをほめたたえる歌を唄いながら娘たちが人形を高く捧げて周辺を練り歩く。

バントゥル県プンドン郡パンジャンレジョ村ではニニ・トウォン降霊儀式が今でも行われている。稲の取入れが終わってから、サロン、ゴン、クンダンなどいくつかあり合わせのガムラン楽器の伴奏でダニャンを呼ぶのだ。呼ばれるのはデンバグス・ムル、デンアユ・パイラ、デンアユ・ユリア、デンバグス・スマントリであり、これは祖霊の加護を願う儀式のようだ。そこでは、ニニ・トウォンは霊を呼ぶための媒体として使われている。

G　人間に憑りつく者

1　dhengen

ドゥグンは人間にへばりついて病気にする。人間が好む場所に住んでいて、人間がその場所を荒らすと報復する。たとえばジャン

ブの木があるエリアにドゥグンが棲んでいるのを知らないまま、実を取りに来た者が実を集め、葉をヤギの餌にするために集め、あるいはバナナの葉を切り集めて家に持って帰ろうとするとドゥグンはその者に付いて行き、家に入ったあとで憑りついて病気にする。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（１２）」（2023年06月20日）

病気になった者の体内にはナンカの種くらいの大きさのコブができていて、手でそれを潰すとコブはすぐに別の場所に移動する。病気を治すためには、ドゥグンが棲んでいる場所から取って来たものをドゥグンに返さなければならない。

2　　candhikala

日没時に出現して小さい子供に障りを起こすハントゥがチャンデイコロだ。チャンディコロに障られた子供は熱を出してうわ言を言う。だからジャワ人は日没の前に子供が家に帰るようにしつける。

チャンディコロは sarap sawan とも呼ばれる。サロップサワンは幼児の大敵だ。幼児にはさまざまなジャムゥが使われるが、その中でも頭頂に塗られる dlingo bengle のまだ欠かせない子供がサロップサワンのお好みターゲットになる。ドゥリンゴベンレは薬用植物から作る塗り薬でさまざまな薬効があり、また幼児の頭頂部が固まるまでそこを保護するためによく使われている。

そんな幼児を家の外に連れ出すとき、しっかり自分の身体に密着させて抱きかかえず、自分の身体から離して持ち上げるようなことをすると、その子は容易にサロップサワンに憑りつかれると言われている。

幼児をサロップサワンから守るものは自分の胎盤・血液・つむじ・へその緒などに由来する霊力である。そのために、赤児が生まれるとその霊力が活発化するように幟や旗、傘、バナナの幹に刺したクリスなどを家に飾り、赤児の周囲にはサプリディやはさみなどを魔除けとして置く。

サロップサワンの障りを受けた幼児は年寄りが一晩中膝に抱きかかえ、夜明けになってから膝からおろして寝かせる。家の外にも、入り口扉の外に白糸を差し渡してバリケードにし、白黒に塗った竹槍やパイナップルの葉などを置いてサロップサワンが近づかないようにする。

3 sengkala

暗黒をもたらす恐怖のラッササがスンコロだ。漆黒の夜に子供が外に出ることをジャワ人は昔から禁じていた。満月の夜でなければ、子供は外で遊んではならなかった。暗い夜には家の扉も窓もしっかりと閉ざされ、家の中に外部の影響が進入することをできるかぎり防いだ。外部の影響の中にはスンコロがもたらす災厄があったからだ。

厄に見舞われて苦難に陥った者の影にスンコロがいる場合が少なくない。病人やあるいは苦しみで精魂尽き果てた者の周りにこのハントゥがいるのをしばしば目にする。

人間の心を暗くさせて不安に落とし、落ち着いて生きることを忘れさせてしまうこのハントゥはあらゆるものの姿で現れる。イノシシの姿で現れて女性になつき、女性が馴れるとセックスに誘うようなこともする。女性が拒絶するとイノシシは牙で相手を突くのだそうだ。動物の姿になるときはたいてい牙のある動物になる。

威嚇の対象にした人間には、一瞬だけ姿を見せてからすぐに消える。見ないようにしようとしてその者が目をつぶると、もっと頻繁に瞬間的示現を行う。その者が眠ると、神秘的な方法で目を覚まさせる。

スンコロに憑りつかれないようにするには、道路の四辻や不気味な場所に供物を置いて呪文を唱える。

これがその呪文だ。

ana sengkala seka lor balia ngalor, kidul balia ngidul, kulon balia ngulon, ngetan.

もし憑りつかれたなら、三日三晩 tapa kungkung を行って退散させる。開始する日はジャワ暦が示す自分の誕生曜日にしなければならない。それが成功してスンコロが退散したら、家の周囲にドゥリンゴベンレを植えてスンコロの再来を防ぐのが大切だ。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（１３）」（2023年06月21日）

タパクンクンあるいはタパクンクムというのは首まで水に浸かって瞑想する行であり、多分日本で水垢離と呼ばれているものに該当するのだろう。タパクンクムは二つの水流が合わさる場所で行い、身に一糸もまとわず、水流の来る方に向かってあぐらで座る。そして目を閉じ、手を胸に組んで瞑想するのである。深夜正子の時刻に開始し、少なくとも三時間は続けること。その間身体をあまり動かしてはならないので、水流の強さ、座る場の泥や滑り具合などにも注意を払って行のための絶好な場所を選択しなければならない。

スワルディ・エンドラスワラ博士の妖怪リストは上のように49種にのぼった。ファン・ヒンが著したジャワ人の霊的世界には95種類が挙げられているという話だが、わたしの資料にはその6割くらいしか示されていなかった。ともあれ、それでもスワルディ博士の49種よりは多い。

わたしの持っているこの資料に見られるものはジャワのアニミズム信仰者が信じているハントゥであり、それは人間に由来するものとムムディの一派に分類されている。これに関する詳細もお知らせせずには済まないだろう。

I　人間に由来するハントゥ

1　dhanyang desa

ダニャンはその姿を人間に見せないハントゥだ。Dhanhiang あるいは Baureksa とも呼ばれて村の開祖として崇められている。人間がそこに村を開く前からその周辺あるいはその地域にいたハントゥで、そこに住むのを好んだためにエリアの守護霊になった。すべての村民が享受する恩恵と安全はダニャンがもたらすものだ。しかしダニャンが満足するように村民が振舞わなかったり、敬意を示さなかったり、ないがしろにしたりすれば、村は試練や災厄に見舞われることになる。

ダニャンデサは村が繁栄するための源泉であるため、村人はそれへの尊崇を示し、家の中のどこかの隅に供物を置く場所を用意して、家の主人が定期的にそこで香を焚く。

ダニャンデサの棲み処は村に近い場所にある巨木や大岩、あるいは墓地などで、そこは聖域とされている。そこに不用意に近づくことは禁止されており、従わない者は事故に遭ったりして罰せられる。

ダニャンデサへの尊敬の印として木曜の夜に香が焚かれる。必要があれば供物を用意してダニャンを呼ぶ。長旅に出る者は道中の無事を願ってダニャンデサのために香を焚く。恋に落ちた者は自分を無視する相手が自分に目を向けるようにダニャンデサの助力をお願いして呪文を唱え、香を焚く。

ジャワで、ダニャンと交信するための呪文はたくさんある。多分、村ごとに違う呪文が作られたのだろう。それぞれのハントゥがそれぞれの村のダニャンになったのだから、住民とかれらのダニャンとの個別な関係が築かれ、定められた呪文も個別な関係の中でのものになったはずだ。

しかし時代が下って最初の呪文が忘れられた村では、新しいもっと簡単な呪文を作ることも起こっただろうし、隣村の呪文を真似ることをしたかもしれない。呪文が異なっていたということはダニャンがそれぞれ異なる個性を持っていたことを示しており、その帰結として各ダニャンの間で力量の上下が発生したようだ。

地理的にまとめられる領域内の村々の間でダニャンの能力の優劣が段々と明らかになってくると、最も力の優れたダニャンが一段上に置かれる現象が起こった。その最有力ダニャンはDanyang Tuwo と呼ばれた。婚姻・収穫・田起こしなどに際して他の村がダニャントゥオにも祝福をもらおうと望み、地場ダニャンに加えてダニャントゥオも招くことが行われるようになった。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（14）」（2023年06月22日）

村の鎮守であるダニャンへの不敬はダニャンを怒らせて村全体に危難を招くことになりかねない。そのために村人の間でもしもダニャンの怒りを買うような振舞いをする者があると、村の総意でその者に制裁が加えられるようになった。掟の中にその面に関わる禁止事項を定めている村もある。

2　cikal bakal

村の開祖あるいは礎を築いた者の霊魂がチカルバカルであり、それは形を持たず、姿を人間に見せることもない。だが開祖であるがゆえに、その村に築かれまた発展したあらゆるものごとと住民を守護すると信じられていて、村が天災人災に襲われるとき、夢の中や共同体の中になんらかの兆候を示して住民にそれを教えてくれる存在とされている。チカルバカルは村がより良い発展を成し遂げるように力を貸してくれる存在なのだ。婚姻や村全体の祝祭にチカルバカルを招いて祝福してもらうこともよく行われている。

3　dhemit

Ratu Dhemit と敬称で呼ばれることもあるドゥミッはダニャンデサと似たような役割を果たす。違いはダニャンが村を鎮守するのに対してドゥミッは町を鎮守すること、そしてドゥミッの方がより強い力を持っていることだ。

ダニャンと同じように、ドゥミッも住民に尊崇されることで鎮守を行なうのであり、住民が敬意を示さないどころか、忘れ去ってないがしろにするなら、町は悪化の方向に導かれてしまう。ドゥミッに対する礼拝方法はダニャンにするものとよく似ている。

4 begejil

庭園内にある木々に宿る、庭をテリトリーにするハントゥがブグジルだ。その場所に昔から棲んでいたので、そこが庭園になった今もその場所を鎮守している。つまりその場所にとってはブグジルがダニャンの代理人ということになる。

棲んでいる木の近くで供物を捧げて人間が自分への尊崇を示せば、ブグジルは喜ぶ。供物は毎週木曜の夜に捧げられる。しかし人間がそれを忘れたり怠ったりすると、家の中をひっくり返したり、あるいは人間の嫌がることをして、家の住人に抗議する。

5 berkasakan

ブルカサカンは空き家に宿るドゥミッであり、人間の住んでいない家屋を守護するハントゥなのである。ところが人間の姿で出現するためにジャワのアニミズム信仰者はブルカサカンを怖れる。誰もいないはずの廃屋に突然出現するから、人間は驚き、悪くすると病気になったりする。空き家や廃屋があればまず間違いなくブルカサカンが棲んでいる。だからその数はたいへん多い。

6 bandhu

森林の中で人間の居住がなされていないエリアを守護しているのがバンドゥだ。不気味な雰囲気を漂わせている森林にはバンドゥがたくさんいる。入って来た人間を襲って害するようなことはしないものの、それに出会うと人間のほうが病気になってしまうため、アニミズム信仰者にとっての恐怖のタネになっている。

7 mariyem

マリユムは人間の姿をした森林に棲むハントゥであり、ドゥミッの一種だ。人間の居住していない場所を守護している。人間に関節の痛む熱病をもたらすと考えられていて、アニミズム信仰者はた

いへん怖れている。マリユム自身が人間の前に現れたがらないことが人間にとっての大きい救いになっている。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（15）」（2023年06月23日）

8　kaki legondha

9　nini legondha

10　kaki daruno

11　nini daruni

12　yamaraja

13　yamarani

かれらもドゥミッに区分されるハントゥであり、森林の中の人間が居住していないエリアを守護している。人間の男あるいは女の姿をしていて、その性別に従って名称が異なっている。

14　prayangan

15　priyangan

人間の男あるいは女の姿をしていて、性別で名称が違っている。このハントゥは他のハントゥの召使であり、定住せず、主人ハントゥの行くところに付いて行く。人間に害を及ぼすわけではないものの、出会うと人間のほうが病気になるので、怖がられている。

16　siluman

修験の行を行っている聖者が化身したものであり、死ななくても霊魂はドゥミッになることができる。死亡すると霊魂は行場を守護するドゥミッになる。

17 leluhur

親や祖先の霊がハントゥになったもので、子孫を守護する。

18 sedulur

親でない、亡くなった近い親族のハントゥで、sederek sepuh とも呼ばれる。親の一族や他の年長の一族が含まれる場合もある。

19 lelembut

亡くなってハントゥになった、自分の親族でない者の霊。ルルンブッはダニャンやドゥミッの仕事を助けてさまざまなことを行っている。ルルフルやスドゥルルが身内びいきをするのに対してルルンブッはだれかれの区別をせず、だれにも容赦を与えずに是々非々を掲げて向かって来るから、善くない人間や動物には厳しい罰が与えられる。

ルルンブッは本人の機嫌の良し悪しと関係なく、必要に応じて姿を現わすので、たとえ目の前に出現しても害を与えに来たのかどうかは判断できない。ダニャンもドゥミッもルルンブッの存在を高く評価している。

20 tiang anom

人間を助けるすべてのハントゥを総称して、ジャワのアニミズム信仰者はそう呼ぶ。ティアンアノムはそれぞれが別々の分担をしていて、場所や状況に従ってその担当の者が仕事するようだ。人間の前に自分の姿を現わすことはない。

21 cicir

音のハントゥであり、目に見えない。家の近くにある樹に棲んでいて、ひとりで通りかかる人間に付いて行き、バッタの鳴き声に似た音を出して自分の存在を相手に知らせる。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（16）」（2023年06月26日）

22 kaki puspaki

23 nini puspaki

姿を見せることはないが、人間はかれらを老齢の分別に満ちた人物として想像している。そのため男のほうを Mbah Kakung、女は Mbah Puteri と親しみを示して呼ぶ者も多い。

ジャワ人が苦難に陥ったりどうしてよいのか分からなくなったとき、このハントゥに供物を捧げて道を開いてもらうのである。人間にとって、欲求や失望、罪悪感などの調整役として働いていると見ることができるだろう。

24　kaki among

25　nini among

赤児の時から結婚するまで子供を守護するハントゥがニニアモン別名 Nini Mamang だ。このハントゥも姿を現わさないが、老爺（カキアモン）や老婆（ニニアモン）の姿をしていると想像されている。

ジャワ人が子供を連れて遠い旅をする場合、カキアモンやニニアモンを呼んで子供の保護を依頼する。そのために子供が生まれてから最初の数年間、親が食べ物の供物をこのハントゥに捧げておくのである。

26　candra birawa

チャンドラビラワは子供の姿をした兵隊ハントゥであり、bocah bajang とも呼ばれた。古代の王は神秘の小人兵団を擁していて、魔術師が呪文を唱えたり秘物を使って兵団を呼び出し、敵との戦争を勝利に導いた。しかし現代ジャワ人にとってこのハントゥは昔話でしかない。とはいえ、現代ジャワ人の中にチャンドラビラワに助けを求めて喧嘩に勝とうとする者がいるのだそうだ。

27 niyayi tawa

別名 niyayi tawang とも呼ばれるこのハントゥは台所の守護者だ。このハントゥは顔の大きい老婆の姿で示現し、人間を助ける。ジャワの女たちが台所仕事をするときにはニヤイタワを呼んで、料理が焦げないように、あるいはかまどの薪が適切に燃えるように依頼した。そのためには、毎週木曜日の夜に花を供え、台所道具を美容クリーム boreh でこする儀式を行わなければならない。

一年に一度、ニヤイタワに食べ物を供えて敬意を示す儀式が行われる。その儀式では、柄の付いたヤシの実の殻に白粉で目鼻耳を描いたものをニヤイタワに見立て、名前を呼びかけ、揺すってから、みんなで食べ物を食べる。そのときニヤイタワもそこに来ていて、みんなと一緒に食べていると信じられている。

28 ilu-ilu

生きている間、気随気ままでワイルドな暮らしをしていた者の霊魂がイルイルだ。イルイルは泣いている人間の姿で現れ、後悔の念を示す雰囲気を発散させている。人間を害する振舞いはしないものの、怖ろし気な印象が見た者の心身の調子を狂わせる。イルイルの涙は伝染病の源だと考えられている。イルイルは定住しない。

29 glondhong

巨大な頭を持ちながらそれが身体にくっついていないで分離している姿のグロンドン別名 Endas Gelondong は、そんな状態であちこちを徘徊する。生前に断頭刑に処せられた者のハントゥであり、その処刑が不正になされたことを憤ってハントゥになった。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（17）」（2023年06月27日）

グロンドンは寂れた道路に鶏を入れた籠の形で出現する。そこを通りかかった者は、良い拾い物をしたと思って、それを持ち帰ろうとする。すると突然その籠はカッと目を見開いた巨大な頭になって持ち帰ろうとした者を非難するから、その者はびっくり仰天、半死半生の状態で逃げ帰る。なんとか家にたどりついたら、そのままベッドに倒れ込んでうわごとを言い始める。それらの反応は非難されたことの結果ではない。グロンドンの人間界への復讐はそんな形を取る。

30　Roro Wudu

Ratu Lara Kidul, Nyahi Gede Segara Kidul などの別名を持つロロ・ウドゥはパジャジャラン王国のプラブ・ムンディン・ワギの美しい娘だ。父王の命じる結婚を拒否したためにこの王女は呪われて、ジャワ島南海岸部のクンバン山地に捨てられた。

かの女はそこで病気になり、悪霊たちに命じて自分を海底に捨てさせた。肉体は死に、霊魂は南海の女王になった。そして海底に王宮を建て、海岸を守護するハントゥたちに王宮の維持と運営を行わせた。

かの女は若い娘の肉体を持ち、一糸まとわぬ姿でその豊満で美しい肉体の美を誇る女王として描かれる。衣服を着ないのは、自分の価値を誇示するためなのだ。

ところが、人間はニャイロロキドゥルを目にすることができない。もしも偶然目にしてしまうと重い病気にかかり、女王との契約を迫られる。そのまま死ぬか、死ぬのがいやなら病気を治して大金持ちになるか。しかし大金持ちになって栄華にふけったあと、死んだら南海の王宮で女王の使用人にならなければならない。

パランウエダンの洞窟で眠ると、夢で女王に会うことができる。夢の中で女王は、女王に会いに来た者の頼み事に耳を傾け、忠告や助言を与えるのである。

31　kumbalageni

クンボログニはラトゥキドゥルのお気に入りハントゥだ。ラトゥキドゥルと契約を交わした者が死ぬと、必ずクンボログニがやってきて契約を果たすように迫る。だから相手を甘く見て契約した者にとって、クンボログニはうるさい相手になるのである。

32　net-net

生きているとき哀れな人生を送り、死後も魂の平安が見いだせないでいる女性のハントゥで、白猫の姿をしている。人間がその白猫に近寄って行くと身体がだんだん大きくなり、最後に人間の身体に変わってしまう。人間に悪さをしたり害を与えようとするわけではないが、目の前で猫が人間に変わるとたいていだれでもびっくり仰天するだろう。この猫はネッネッという声で鳴く。

33　harun

昔ハルンという名のアラブ人の大富豪がいた。亡くなったとき、遺体はチルボンから近いコロムン山に埋葬されたという話だ。ハルンのハントゥは交信してきた人間や供物を捧げた人間を金持ちにしてくれる。供物は、香を焚き、花を捧げ、ハルンのことを強く念じるのだそうだ。すると大金持ちになれる。だがそれだけでは済まない。死んだあとは霊魂になってハルンに仕えなければならない。死んだあと召使になって相手に仕えることをジャワ語で ngarun と言う。

34　dokan

あまりにも吝嗇で物惜しみする人生を送り、善行としての寄付など一度もしたことのない者が、死んでから自分の人生を後悔してドカンという名のハントゥになった。夜中に人間界をさまよい、自分のようなケチ人間を見つけると恨めしそうな姿を現わしてじっとたたずむ。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（１８）」（2023年06月28日）

Ⅱ ムムディ

1　wetala

ウェトロは墓地に埋葬された遺体の皮膚から出る輝きに由来しており、墓地でよく見られることから setan kuburan とも呼ばれる。ウェトロはときどき墓地の一帯を徘徊して新しい墓の遺体に入るようなことをするから、死者がよみがえったという話が人間の間で話題になる。

この種のムムディは誰かを支配しようとする人間に利用されやすい。ウェトロシッディの呪文で呼び出されたウェトロは、呼び出した者の命に従って指示された人間に憑りつき、呼び出した者が望むあらゆることを憑りついた人間にさせるのである。しかし霊魂の抜けた星気体に包まれている、善行を好む人間には通用しない。

2　cacal

チャチャルはウェトロに似ている。霊魂が天上界に向けて去ったあとに残された星気体の死骸の影がチャチャルだ、チャチャルという言葉はアラブ語の chayal に由来している。この影は呪文によって生命を吹き込まれるとよみがえるので、何らかの意図を持った人間が善行のため、あるいは悪行のためにチャチャルを動かして何かをすることが起こりうる。そのときチャチャルは道具として使われているだけだ。

3　preta

強欲な人間の心の影がプレタである。欲張りな性質の人間が死んで天上界に去って行くとき、星気体の死骸に心の影が残される。それはハントゥになって欲張りな性質の人間に惹かれて行く。悟りに導くためか？いや、その反対だ。プレタは人間の強欲さを限りなく高めようとするのである。

4　makaryangan

生きているとき性悪な人間だった者の霊魂は、死後天上界に移ることができない。地上界に居続けるためにハントゥになった者がマカリヤガンである。アニミズム信仰者が敵を神秘的な方法で攻撃するときに使うのがこのハントゥだ。

このハントゥに向けて特定の呪文を唱えると、ハントゥは敵の家に石を投げたり、扉や窓を叩いたり、家の中の物の位置を変えたり、敵にシリを噛んだあとの唾液を吹きかけたりする。

ジャワ島では頻繁に、この種の目に見えない沈黙のパワーが復讐のために使われてきた。それらのハントゥを操作するための呪文が watek aji と呼ばれており、そのパワーを自在に操ることのできるドゥクンは世間から怖れられている。

5 rogo sukma

ロゴスッマは生前、悪行の限りを尽くして最終的に命を落とした男の霊魂に由来するハントゥであり、意のままに自分の姿を人間の前に現わすことができる。ハントゥとしての自分の生命を維持するために、寝ている人間の血液とパワーを吸い取る吸血鬼がかれらだ。

かれらは死ぬ時、死後自分の身体をさまざまなものに変える呪文を唱えてその能力を得た。かれらの中にはヴァンパイアの姿を選択した者が多い。その姿になると悪事が行いやすくなるのだろう。

この種のバンパイアは欲望を鎮めることのできない悪人の血を渇望する。善なる生を生きる者は周辺環境にあるさまざまな善の要素がその者を包むために、ヴァンパイアは近付くことさえ躊躇する。その者の血を吸おうなどとは考えもしないだろう。ジャワの古文書には、死後にヴァンパイアになる呪文を唱えて死んだ者の死骸は腐らないと記されている。仮死状態になっているということのようだ。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（１９）」（2023年06月30日）

6　asra pas

女のヴァンパイアがアスラパスだ。夜になるとこのハントゥは美しい女の姿になって男を誘惑し、淋しい場所へ連れて行ってふたりきりになる。もしも性交が行われると、男は重病に陥り、生死の境をさまよう。

女のヴァンパイアを滅ぼすには、腐らない死骸を焼かなければならない。昔は、女の死骸を墓から出して焼くことがしばしば行われた。

7　shadim

生きているときブラックマジックに長じ、種々の呪文を使って死後も星気体の寿命が長持ちするように仕組んだ結果、遺体の腐敗がゆっくり進行するようになった者の霊魂がシャディムだ。シャディムが憑りついた人間は欲望や快楽を追求することに躊躇しなくなり、それ以前に持っていた性格がガラリと変わってしまう。

8　palit

パリッ、別名 cutna は男性に由来するハントゥ。

9　picapahi

生きているときに性欲や快楽を追い求めた女のハントゥがピチャパヒで、たいてい突然死に見舞われている。死んでからもこのハントゥはセックスや快楽を求めて人間界をさまよう。時には人間の体内に入り、自分がかつて欲望を追い求めて痛い目に遭った体験をその人間に繰り返させようとする。

10 kanni

穢れた状態で死んだ邪悪な処女の霊魂がカンニだ。よこしまな欲望のために霊魂は安まることがない。この娘たちは突然生命を奪われて地上界を徘徊するように呪われた。人間を害する技術をあまり持っていないので、悪事を行うことは少ない。

11 phutam

12 peh

13 priska

これらのハントゥは突然死した人間の霊魂に由来していて、棲み処に定住せず地上界をさまよっている。かれらは人間が過ちを犯すようにつとめ、その人間が社会生活で得ていた評価を失墜させる。

14 asira

アシラは頭のない人間の姿をしたハントゥで、これは断頭刑に処せられた者の霊魂に由来している。攻撃的な危険性はないが、これに出会うと人間はショックで病気になる。

15 awici

生前に劣悪な人生を送り、死んだあとで身体から抜かれて地上を徘徊するようになった人間の霊魂に由来するハントゥであり、悪事を行うことを好む。アウィチは悪い性格の人間に憑りついてその者に悪事を犯すようにしむける。

16 ngalu

17 kasasar

生きているとき邪悪な人生を送り、あるいはセックスや欲望の快楽を追い求めて生きていた者が、それゆえに自殺したり、突然殺されたりして世を去った場合、その霊魂がガルやクササルになる。死んだら快楽を愉しむことができないのだから、かれらは人間の中に入ってその愉しみを得ようとする。その結果、センシティブな人間がかれらに憑りつかれることになるのである。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（20）」（2023年07月03日）

このハントゥは吝嗇・邪悪・残酷・嗜虐的な性質を持ち、自分の死の原因になった行為を憑りついた人間にさせようとする。そのため、憑りつかれた者も似たような運命をたどることになる。善で潔癖な人生を送っている者は滅多に憑りつかれることがないとはいえ、ハントゥの誘惑に負ければ悪い運命をたどるだろう。

18　urang alus

仮死状態になった善人の霊魂が体外に出たものがウランアルスだ。地上界にいるだれかを保護したいために行われることであり、そのだれかに向かってやってくる邪悪な影響をウランアルスが遮断する。保護が必要でなくなったとき、はじめてウランアルスは天上界に向かって地上界を去る。ウランアルスは自分の姿を示現する能力を持っているので、ジャワ人はこれもハントゥのひとりに区分した。

ウランアルスになるためには、生きているときにヨガの術を完璧に身に着けなければならない。呼吸を止め、何も食べず、身体を動かさないで生き続ける術を行って霊魂が体外に出られるようにする。霊魂が抜けた仮死状態の肉体は腐敗しない。普通の人間はオカルティズムを死後体験するのだが、この種のひとびとは生きているときにそれがどのようなものであるのかを既に知っている。

温水で身体を洗うことで仮死状態の肉体を生き返らせることができる。それがうまく行かないと何年も仮死状態が継続し、霊魂はその間、自分の務めを果たすのである。

19　macan gadhungan

sima gadhungan という別名を持つマチャンガドゥガンには二種類ある。

1．人間が呪文で自分をトラの姿に変えたもの

2. 死に際して人間が呪文で自分の霊魂をトラの姿にし、霊魂が自らの意志で実のトラに変化したもの

生きていたときの自分の敵を滅ぼすのがトラへの変身の目的であり、爪で引き裂いて食い殺す方法か、そうでなければ敵を仰天させて怖がらせ、重病に陥らせる方法がその手段に用いられる。マチャンガドゥガンは、1の場合だと一日しか続かないが、2の場合は四十日間継続できる。このトラへの変身には特別な条件があるので、呪文を知っていても変身できるとはかぎらない。鼻と口の間にへこみがなく、あるいは脚にかかとのない者だけがトラに変身できるのである。

20 blawong

ブラウォンはオオカミのこと。マチャンガドゥガンがトラなら、こちらはオオカミへの変身であり、内容はどちらもよく似ている。トラになって敵を倒すか、それともオオカミになってそうするかという、本人が執る姿の違いがあるだけのようだ。

21 tiang malih rupo

manglih とも呼ばれるティアンマリルポは別の姿に変身する者を意味している。かれらは呪文を唱えてワニや毒蛇のような、人間を食い殺したり毒で殺したりする動物に変身する。そのために昔のジャワ人はトラ・ワニ・オオカミ・蛇などを見つけたら、すぐに殺すようにしてきた。

普通の人間を害する動物に変身する者は dukun, urang teluh, neloh と呼ばれるひとびとだ。この術の短所は、変身しているときに傷を負うと変身を終えて人間の姿に戻ったとき身体の同じ場所に傷が残ること、そしてもしも変身中に死んだら変身が解けて元の人間の姿に戻ってしまう点にある。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（２１）」（2023年07月04日）

22　prapti

生きている人間のハントゥがプラプティである。呪文を唱えて身体が透明人間になり、霊魂はその身体から離れて別の場所で別の肉体を持つ。しかし時には、自分の身体が透明人間にならず、魂が抜けただけの仮死状態の身体になってしまうことも起こる。霊魂が戻るまで、その仮死状態の身体に手を触れてはいけない。ちょっとでも触ると身体は本当に死んでしまい、霊魂の戻る場が失われてしまう。

23　shaiya

シャイヤは人間の祈りや善の想念が自然界の霊魂の皮や影と交わってはじめて形成されるものであり、人間の目に見えない。シャイヤは人間に悪い考えを起こさせるネガティブな影響からその者を保護し、善人であることを維持させようとする望ましい星気体である。

24　bhut

シャイヤと反対の、悪の想念が呪いや罵りを引き起こし、それが自然界の霊魂の皮や影と交わってできた、目に見えない邪悪なハントゥがブッだ。ブッは人間全般を敵視する。

悪行の源泉になる悪意を人間に持たせるのがブッの望みであり、本人の性質がそれほど悪人でなくとも、ブッの影響を受けて悪事に走る人間の数は少なくない。悪事を犯した者があとで自分の行為を振り返り、どうしてあんなひどいことを自分はしたのだろうかと反省するようなことは日常茶飯事で起こっている。

それは言い換えると、人間は容易に悪に影響されて悪事を行う傾向が強く、反対に人間にとって善は悪ほど強いものでなく、また魅力的でもないということを意味しているように思われる。

以上がおおよそのジャワ島妖怪名簿になるだろう。しかしそれらの名前と特徴をすべて克明に記憶したからといって、ジャワ島で妖怪に出会ったときにその妖怪がこの名簿のどれに該当するのかを言い当てるの

はたいへん難しいように私には思われる。しょせんはハントゥの一語ですべてを代表させなければならないのかもしれない。いや、現実にはグンドゥルウォ、ウェウェ、クンティルアナッ、スンデルボロン、ブトイジョ、トゥユル、バナスワティ、その他大勢のハントゥという区分を用いている人々もたくさんいるにはいるのだが。

ご多聞にもれず、インドネシアでもホラー映画が好まれている。インドネシア大学フランス文学女性教官はインドネシアのホラー映画に関する博士論文を書いた。それによれば、80年代のホラー映画は二・ロロ・キドゥルや二・ブロロンなどの神秘的力を持つ女性あるいはクンティルアナッのような女の幽霊を主人公に取り上げるのが常だったとかの女は語る。クンティルアナッは存命中男に虐げられた女が幽霊となってその復讐を男に向ける話なのだが、なんと悲しむべきことに、幽霊になってすら男のドゥクンや宗教者に倒されてしまうのである。女の不幸に向けられる関心が高かった時代の意識がそのような現象を招いたのだろうか？

もっと後の時代になって、ホラー映画の主人公にポチョンが仲間入りした。昔は、性別のまるで判然としないポチョンがホラーの主役の座に着くようなことは起こらなかった。インドネシア人にとってポチョンは恐怖をもたらすものだが、異文化人の目にそれは滑稽なものに映っている。身体をぐるぐる巻きにされてひもで縛られ、ただぴょんぴょん飛び跳ねているだけの存在のどこが怖ろしいのか、というのが異文化人の感覚だそうだ。[続く]

「ジャワ島妖怪大全（終）」（2023年07月05日）

昔の映画では、ハントゥが出現する場所は決まってブリギンの樹、湖、あるいは神聖または不気味な場所だった。ところが今の映画では、公共スペース・トンネル・オフィス・病院などどんな場所にも出現している。現代人にとって身近な場所のイメージが変質したということなのだろう。ハントゥの都市化は人間の感覚が招いたものかもしれない。

通販サイトトコペディアのブログに、インドネシアの優良ホラー映画のお勧めが掲載されている。ホラーファンの読者は既にどれだけご覧になっただろうか？

1 Pengabdi Setan – 1980

2 Ratu Ilmu Hitam – 1981

3 Malam Satu Suro – 1988

4 Jelangkung – 2001

5 Bangsal 13 – 2004

6 Mirror – 2005

7 Kuntilanak ? 2006

8 Pocong 2 ? 2008

9 Macabre/Rumah Dara ? 2009

10 Keramat ? 2009

11 Pintu Terlarang ? 2009

12 Modus Anomali ? 2012

13 Danur: I Can See Ghost ? 2017

14 The Doll 2 ? 2017

15 Pengabdi Setan 1 ? 2017

16 Mata Batin ? 2017

17 Kafir: Bersekutu dengan Setan ? 2018

18 Suzanna: Bernapas dalam Kubur ? 2018

19 Sebelum Iblis Menjemput ? 2018

20 Jailangkung 2 ? 2018

21 Ratu Ilmu Hitam ? 2019

22 Perempuan Tanah Jahanam ? 2019

23 Sunyi ? 2019

24 Mangkujiwo ? 2020

25 Sebelum Iblis Menjemput Ayat 2 ? 2020

26 Surat dari Kematian ? 2020

27 KKN Desa Penari ? 2022

この評論者のお勧めは上のようになっていた。最近の作品がたくさん含まれているのは、現代インドネシア人のセンスをより強く反映している点を示すものと考えるべきかもしれない。ホラー映画ファンはたっぷりとお愉しみください。[完]

編集後記

画像と脚注はすべて編者がつけたもの。

作者　西祥郎

編集　田口重久

初出　記事内に表記

編集　2023 年 7 月 9 日